

二-34

応用心理学論文集

[第1集]

[10]11-13回 [14回]

日本応用心理学会大会

研究発表報告



日本応用心理学会

140.4
N77
V.11-13

目次

はしがき.....一

日本応用心理学大会

第十一回研究発表報告.....三

第十二回研究発表報告.....三八

第十三回研究発表報告.....六七

補遺.....九六

日本応用心理学会・関西心理学会

連合大会研究発表報告.....一〇三

はし が き

◆この研究抄録は、日本応用心理学会第十回、十一回、十二回、十三回大会で発表されたものである。その期日および会場はつきのとおりである。

- 第十回——昭和二十五年十一月 学習院大学
- 第十一回——昭和二十六年七月 千葉大学
- 第十二回——昭和二十六年十一月 東京学芸大学
- 第十三回——昭和二十七年七月 横浜国立大学

◆従来日本応用心理学会での研究発表報告は、教育心理研究、人間科学などに掲載されてきたが、戦争中あるいは戦後の出版事情のため、永い間中絶されていた。第十回大会の総会にはかり、その後のものをまとめて出版することとなり、委員をあげて準備をすすめて、昭和二十七年十一月、とりあえず第一回——第十三回までの「研究発表項目一覧」を刊行した。

◆総会の都度、会員によびかけ、抄録の提出を依頼したが、全部

をそろえることはできなかった。またなかには、制限枚数をはるかに超えているため、やむをえず削除しなければならなかったものもある。編集は、大会ごとに、通し番号をつけ、発表順に配列し、内容による分類は行っていない。

◆この報告ができ上るまでに、東京十仁病院長梅沢文雄氏からは刊行費にあてるための多額の寄附をいただき、出版については中山書店の好意を、また校正については川村短大助教授島田一男氏他の奉仕的な努力をいただいた。記して心からの謝意を表する次第である。

なお今後は、一カ年ずつをまとめて刊行する予定である。

昭和二十八年七月

編集委員

小保内 虎夫

鈴木 清

松村 康平

日本応用心理学会 関西心理学会 連合大会 昭和二十七年十一月 奈良学芸大学

特別講演奈良時代の楽器と音律

林 謙 三

奈良時代にはわが国固有の音楽を始め唐楽、舶来等の外来音楽その他軍事や仏事に用うる数十の楽器の存したことを古典が記載しているが、そのうち正倉院や国立博物館、古社寺などに現存する当時の楽器を数えれば凡そ二十八、九種の多きにのぼる。

- 1 体鳴楽器 Idiophone 梵鐘・鎮鐸・鈴・鏡・磬・方響・錫杖。2 皮鳴楽器 Membranophone 羯鼓・腰鼓・二鼓・三鼓・磁鼓・雞樓鼓。3 絃鳴楽器 Chordophone 琴・準〔仮称〕・和琴・新羅琴・箏・瑟・篋篋・阮咸・琵琶・五絃。4 氣鳴楽器 Aerophone 鳴篳・簫・尺八・横笛・笙・竽〔正倉院には二十三種ある〕。

これらの楽器の過半（十九種）にのぼる唐楽は後世日本雅楽の王座を占め邦楽全般にも重大な感化を与えたのであるが唐代に完成した楽理はよくこれら遺物の上に反映し千二百年後の今日でも凡そ当時の楽律がどのようなものであったかをよく示している。例えば横笛や尺八のように吹奏できるものは一貫した音システムを物語るし、打ては鳴る方響は勿論、簧 reed を失った笙や竽にせよ、琵琶・五絃・阮咸の柱 fret 制にせよ、唐楽に用いた音律とか楽調えの適応性を示さないものはない。

唐の最盛期の玄宗代には主としてインド楽調に由来する俗楽に用うる調 mode に少くとも十三あったことが記されており、その後二十八調にまで発展した。この流れはわが国や中国では後世長く伝えられ今日でも生命を保っている。わが奈良時代の後期には右の十三調の一部を早くも伝えたことは楽曲との結びつきから推して知られる。例えば宮調（教会のリジア）の沙陀調、商調（同

しくミクソリジア）の一越調。大食調、羽調（同じくドリア）の平調・黄鐘調・盤渉調である。

俗楽調の音律は唐代の律尺である鉄尺（小尺）から作られた一連の律管の音律（これを正律と呼ぶ）そのものに直結するのではなく、それとある関係をなす五律（四度）低い仮想の音律（これを俗楽律と呼ぶ）の上に立っているのである。俗楽律は正律を律名を転換して仮借する。そこで鉄尺から求めた正律の黄鐘を C と判ずるときは正律の倍林鐘 C^2 が俗楽律の黄鐘となるわけである。一越調は俗楽律の太簇（正律の無射 C^2) の上に主声 *tonica* をもっていたところから後世この律を一越と呼ぶようになった。

それからは日十二律の成立について一言すると、奈良時代には唐風をそのまゝ借り、平安時代に先ず一越・平調・双調・黄鐘・盤渉の五を、次いで下無・上無を補い平安末から鎌倉にかけてその他を完備したものであり、然もそのうち断金と鏡鐘は転換して用うる例もあって今日のような形に一定したのは案外近世である。

最後に奈良時代と今日の音律の高度は理論上、約半律（ $1/4$ 音）古の方が高く、千年の間に軽微の移動があり、江戸時代には約一律（ $1/2$ 音）下り、明治以後現状（一越は d ）となっていることはいろいろの資料によって窺うことができる。

青年期発育に関する一調査

Longitudinal study による（第四報告）

後藤 与一

奈良県下農村中学校女児五二名について女子の身長、体重について十年間の調査を行った。

平均年令は昭和二十七年三月現在で十五・五才であった。

当標本の十二才時の身長、体重の X 、 S は次の通りである。身長平均一三七・二三種、標準偏差七・六四種、体重平均三二・七七種、標準偏差五・二九種であった。最大増加期の平均は身長一二・六一才、体重一三・四二年、標準偏差は身長〇・七七才、体重〇・九〇年、初潮期平均一四・四六、標準偏差〇・八四であった。

〔整理一〕 身長並に体重について個人最大の増加年令を調べると、その平均年令間の差は〇・七六年となり検定の結果は有意であった。却ち青年期に現われる身長発育は体重発育に約十月先行する。次に身長最大の増加期と体重のそれとは相関指数〇・四八八にのぼる高い相関がある。

身長年間増加量について松本博士の調査と比較したが略々一致した。尙同博士は身長年間増加量よりストラツツに反駁しているが、それは誤りである。又、充実期（八一十一才）は身長の増加率が減少し体重の増加率が上昇するというストラツツの論の如く発育する者は僅か十五・四％に過ぎず、残りの大多数はそのように典型的な発育を示すものではない。

〔整理二〕 初潮年令と身長並に体重の最大増加年令との相関関係は、身長との r は〇・一五九、体重においては〇・二七八であった。尙、修正発育年令を算出し、これを初潮期との相関を見たところ〇・三七〇の比較的高い r を得た。更に相関表における頻数分布から X^2 test を試み、身長において有意、体重において有意でない結果を得た。又平均十五・五年調査時における有潮者と未潮者について、差の検定を試みたが両者とも有意であった。尙又初潮期を基準にして身長並に体重の発育期

分布表を作った。これによると初潮期の一年前に身長が発育中心期を持つもの四二%、同じく二年前は四〇%ある。体重の発育期は初潮の一年前に持つもの三三%、同時のもの五〇%となっている。以上四方法によって検討すれば、身長発育は体重発育よりも初潮年令との関係がより密接で、これは松本博士の結果と同じである。

〔整理三〕 身長、体重の発育期、初潮年令、乳房、体毛の発達、の五者について夫々の関係を見出す為に頻数分布表を作り t -test 或は X^2 -test を試み次の結果を得た。青年期的発育並に第二次性徴において、身長の発育が最も関係が多い。体重や初潮は予想に反しこの関係が少い。初潮と乳房の発達は関係がありそうであるが当調査においてはそれを見出し得なかった。

教師の Morale (1951)

— Morale の社会心理学的研究 —

田 中 国 夫

「今日の学校に於ける効果的な教授は教師が民主的の社会に於ける学校の機能、就中、教育の目的についての明白な理解を持っている場合にのみ可能である」といわれている。戦後七年、日本教師の共通のうめきは、「教育の目標が定まっていさえすれば」ということだという。果して然りか。然りとすれば我々は又、「教師の全パーソナリティが教育過程の中に含まれている」ということばに戦慄を覚えずにはおられない。「教師は学校の生きた人格である」ともいわれる。心強さを感じてよいのか戦慄をおおいかくすわけにはいかないのか苦しさを得ない。日本教師のモラル (morale) の究明を急ぐ所以のものである。

作業能率に関する研究に於いては、作業に対するモラルが作業量の割合に関係していることを示している故にモラルの研究は比較的容易である。教育に於ける作業量

に当る標準は深遠なる問題を含んでいる。しかし、教育者においては教師の能率はその仕事を彼がいかに感じているかに関係していると推論し、この二者の間に密接な平行関係の存在を仮定する。然して、更に、いかなる因子が教師のモラルに影響を与えているかについての知識を拡充すること、並びにそれらの因子に關聯して教師のモラルの評価に有用な用具を作成することが出来ればという観点から試案を提供せんとするのが本調査の目的である。

Coffman, W. E. に示唆され乍ら一〇項目、七三問から成る質問紙を作成した。項目と、若干の問いを列挙すると次の通りである。

〔1〕 教育 観

〔8〕 貴方は教師以外の職業についていたらよかったですか。

〔2〕 職 業 観

〔18〕 教師であることが貴方の服装その他スタイルを社会的に束縛しますか。

〔3〕 教授活動への適応感

〔22〕 貴方は余りに多くの雑務に追われるか。

〔4〕 経済的安定感

〔33〕 貴方のサラリーで生活をエンジョイ出来ますか

〔5〕 教 科 観

〔36〕 貴方の学校のカリキュラムは余りに保守的であるとされますか。

〔6〕 校 長 観

〔45〕 校長に対し、考えを述べることは容易ですか。

〔7〕 同 僚 感

〔56〕 重要な問題に關し、他の教師と仕事をする十分な機会を持っていますか。

〔8〕 安 定 観

〔62〕 自分の仕事に対して適当に認められていますか

〔9〕 児 童 観

〔65〕 児童の I・Q がより高い学校に働きたいと思われませんか。

〔10〕 自 我 観

〔72〕 貴方は過去二カ年前よりより立派な教師になつておりますか。

今日は主として年代別、性別の観点から各種因子の分析を進めた。

民主主義の理解

— 中学高等学校生徒の場合 —

横 山 松 三 郎
小 川 隆
斎 藤 幸 一 郎

第二次大戦終了後、民主主義教育の必要が叫ばれて以来七年有余の歳月が経過したが、われわれは、この機会をとらえて中学校高等学校生徒がどの程度に民主主義を理解するに至ったかを調査しようとした。本研究は、第十六回日本心理学会大会（一九五二年五月）に於いて序報として発表した研究に続くものである。

調査の手續き——質問項目として、I 民主主義のよい点はどこでございましょう。II 民主主義を實行するのに今あなたは手近なこととどんなことをしたらいいでしょう。III 将来世の中に出てからあなたはどんな事をして民主主義を實行しますか。の三項目を設け、各項目について多肢選択法（選択肢各五箇）に依って四つずつの判断を求めた。被験者としては、関東地方の中学校一年、三年、高等学校二年の男女生徒合計二六五〇名を用い、調査は何れも、学級単位で団体式の方法で実施した。

集計の手續き——今回の研究では、主として学年に依る発達の傾向を分析して見た。即ち、三つの質問項目に対する各四群の選択肢計十二の選択肢群に關して、各群につき五箇の選択肢、計六〇箇の選択肢毎に、男女別学

年別選択頻数を数え上げ、これを被験者数に対する百分率に換算して比較検討した。

結果——(1)、男女何れについても、生徒の判断は学年が進むに従って、特定の選択肢に集中してゆく一般傾向が見られた。又こうした集中化傾向は、男子より女子において甚だしく現われた。こうした傾向は、言いかえれば、高学年になる程民主主義についての生徒の意見が互により多く一致したものになってゆくことを意味する。

(2)、男女とも高学年になるに従って多く選択される傾向を示した選択肢は、いずれも民主主義の要点を概括的に或いは端的に述べた言葉であり、そうした意味で高学年ほど民主主義の理解が深まってゆくことを示した。

(3)、男女とも高学年になるに従って少く選択されたものは、大部分、各学年を通じて選択頻数の少いものであり、又男女間に大きな相違も見られなかった。

(4)、中学一年、高等学校二年に比し、中学三年において最も多く、或は最も少く選択された選択肢もあった。それらの選択肢は、中学三年という時期が第二反抗期に相当する時期であることを裏書きするような内容をもつものであった。

(5)、高学年になるに従って男子に比して女子において特に多く選ばれた選択肢は、「婦人参政権が認められる」「女子の地位の向上につとめる」の二つであった。

(6)、「封建的なことをやめる」「職業上の差別をつけない」の二つは、男子では高学年になるに従って多く選んだのに対し、女子では、高等学校二年において選択頻数がかえって低下していた。

青年の悩み

新井康祐

信州大学教育学部の学生一、二年一六〇名に対して Hepner. W. の五項目による質問紙法を用いた。

(1)最大の恐怖又は煩悶は、
(2)私の最も困難とする傾向は、

(3)自分にそれが欠けているので最も欲しているものは
(4)私の最も不得意とするものは、
(5)私の最も悪い癖は、

〔結果及び考察〕

第一問の解答については、現在の自己の立場の不安に悩んでいるものが三〇・二%である。

Hepner の調査によれば、「他人からの批判」と答えたものが三〇%で最高を示している。

次に自己の将来に対する不安に悩んでいるものが、二五・一%である。

社会の在り方、及び動きに対する不安が一六・三%を示している。

第二問については、「他人との交際」と答えたものが二七・一%で最高である。Hepner の調査によれば、「あまり自己が強すぎる」と答えたものが三二%である。本調査の結果を吟味すれば、「あまり自己が強すぎる」と答えたものが三二%である。

「他人を信用出来ない」と答えたものが三二%である。本調査の結果を吟味すれば、「他人を信用出来ない」「他人を信用出来ない」為に他人との交際が困難だと述べているものが多かった。かゝる解答を総合すると四二%で青年期の心理的特徴を現わしていると考えられる。「実行力、規律正しい生活を困難とする」と述べているものが一一・八%で「実行力の不足」は、第三問にも出てくるが、これは、自信の欠如による内向性の現われと思う。

第三問に関しては、「社交性」と答えたものが第一位で二三・八%であるが Hepner の調査によれば、二二%で第四位である。「決断力、実行力」が本調査では二二・四%で第二位であるが、Hepner によると、「自分の能力に対する確信」として三三%の最高を示している。幾らかの差が見られる。

第四問については、「他人との交際」が三八%で第一位で「他人の前で話をする」と二三・九%で第二位

である。Hepner の調査によると「公衆の前で喋ること」が第一位で三七%である。「金をためること」が第二位で二九%である。

第五問については、「消極的行動」が一番多く二三・二%で第二位が「他人との交際(非社交的)」で一六・四%である。Hepner の調査によれば「他人の意見を思い煩うこと」が第一位で三一%を示している。

以上の考察を総括すると、

① 対人関係についての悩みが最も多くあらわれている。

② 悩みのグルンドになると考えられるものは、「自己の能力に対する確信の欠如」であると推察される。

連想を通じてみた学生思想の時代的変遷(第二報告)

山根 薫

先きに発表した報告(註1)で、現在の大学生の思想動向と一三年前の高等学校生徒のそれとを連想結果を通じて比較した。その結論として五〇刺戟語中、一七刺戟語において、明らかに彼らをとる環境の変化からの影響をみることができた。しかしそこにはまた時代をこえた共通性のあることも知った。すなわち色情性および試験に関する反応語が多い。また反応語を通じてみる限り、社会情勢を敏感に反映しているが、これを批判せんとする態度は著しくない。

本報告ではそれら結果にみられる男女差による相違を明らかにしたい。

反応語種類数および無答数をみる。一人当りの平均数は男組反応語種類数二〇・四、無答数五・七に対し、女組二八・三、五・七である。この数に意味を認めれば、女組の方が連想にあらわされるような生活経験が豊かである。

あることを示す。しかし略共通の生活経験をもち彼らであつてみれば、被験者数の増加はただちに反応語種類数の増加と相応するものでない。人数が多くなれば、平均値は低くなるから、この数値は過大に考えられてはならない。

次に最頻度を示す反応語の異同を表についてみると、両組で全く同じである場合は、五〇刺戟語中二四語であり、異るとしたものである中、同一と見なされるもの二つを数えるから、半分以上が同一反応語を答え、経験内容の高い類似性を示している。

この類似性はさらに同一刺戟語による、男組の反応語種類数の多少と女組のそれとの間に、相関係数 $+0.455$ 、信頼度 0.08 の關係として表れている。

このような高い類似性をみるとともに、なお両性の相違を浮き出させる反応語もある。たとえば暗いという刺戟語に対して、男組では「夜」といい、女組では「こわい」と答えるがごときである。これには男女の生活に対する異った態度が示されていると考えられる。

また反応語の頻度は刺戟語によって違っているが、このことは、そのまま生活経験の共通性と個別性の程度をあらわすものであろう。その關係は反応語種類数においても同様である。頻度と種類数との間に男組では、 0.325 、女組では 0.639 の相関がみられ、集中度の高いものは種類数が少ないことを示す。この数はまた彼ら学生の生活経験の範囲が限定されていることを表している。頻度の高い反応語をもつ刺戟語を高い順に一〇箇あげると、そのうち六語までが男女両組で共通で、美しい、歩く、青い、元気な、親孝行、失敗がそれである。彼らの生活の共通性を示す。逆に頻度の低い方から一〇刺戟語をとると、暗い、月夜、正義、惨酷、金持の五つだけが一致し、一致しないものが経験の個人性を示す。結論的には、男女の差をもちながら、より多くの共通性をもつといえる。

註一 最近心理学の諸問題 千輪先生還曆記念論文集

現在教師の当面している問題点について

松山安雄
田中国夫

義務教育を担当している兵庫県下の都市、農村、山村の教師三八六名より、日日の教育実践に於て最も問題となつて居る事柄について回答を求めた。

その一は、特に現在教育心理、児童心理の直接対象と考えられている事柄である。その二は、間接的或は直接的に教育心理の対象と考えねばならぬ、社会的家庭的環境の問題、その三は、教師の Personality の問題、その四は所謂新教育の方向の問題、その五は教科教育の問題である。

第一のカテゴリーに含まれる事柄は全体の三三%を占め、最も問題とされているものである。其等は所謂問題児を如何に処理す可きかと云う事柄に最も苦心している事実を物語っている。

此の問題児の問題が第一のカテゴリーの四〇%に及んでいる。更に此の問題児と關聯して考察される事ではあるが一般的に云つて子供の躾、道徳教育の方法につき論ずるものが第一カテゴリーの三〇%を占める実体が見られる。次に二六%に上る。第二のカテゴリーに見られるのは、教育財政の貧困、設備の不足、失業者の子、貧困者の子、等経済的な事情に依る問題が大きくとりあげられ、次には家庭環境の問題として父兄の教育観、父兄の子供に対する態度つまり家庭に依りもたらされる教育への悪影響を、更にはPTAの問題、マスコミ・ケーションの平和の問題、等々、社会的、家庭的環境により教育の場にもたらされる切実な影の体実である。この問題は教育心理、社会心理として今後に残された事柄が大い

ではなからうか。

次には教師の Personality の問題が一四%の Weight で採り上げられている。教師の薄給よりくる生活苦とか教養等々の問題、教師自身の人生観の問題、教師観の封建性、等々教師自身がお互に教師の Personality に関し多くの問題を良心的に感じている実体をここに見るのである。

第四に見られる新教育の方向の問題とは世界観と教育、教育目標とは何かという事柄から出発して考えられる事柄である。現場にある人々はこの教育理念の拠つて立つ所を求めてあぐねている実体であり、そこに旧教育との比較が考えられ、或いは旧教育へのノスタルジヤともなり、教育の危機が教師自身に強く感じられている姿を見るのである。評価と測定の問題の意味が深くこの立場からも考察されねばならぬのではないか。最後の教科の問題は個々の教科につき最も効果的な方法が多くの問題を含んで考えられる様子を見るのである。

性意識の発達について

坂本英夫

信大教育学部学生二一〇名。内訳男一四七名、女六三名につき生誕から現在に至るまでの性的体験(性的行動、意識体験)の記憶回想の記述を求めた。

一、幼児期 四才から就学前迄の記述にもとづけば、Berkley の幼児性欲説の所謂第二期末分化期に当たるのであるが行動面では性的遊戯が最も多く次いで性器玩弄・男女共にする遊戯・異性関心・性語使用の順となつて居る。性的遊戯と性器玩弄とは相通するものがあるかと思ふ。既に四才(女)で性的行動快感の体験をもつ者のあることが知られる。意識面では性的認識が最も多く、次いで出生に対する疑問・異性関心・性的観察・性的衝動・遊戯の順となつて居る。性的認識・異性関心・性的

観察に於ては男女差に就いての意識・異性思慕の情の萌芽のあることが伺われる。尙五才(男)で異性抱擁の衝動を意識体験している者も一名ある。

二、児童期 小学校就学期に Freed. K の第三期性的対立期にあたる。行動面で最も多いのは異性関心でこれに次いで性的遊戯・性器玩弄・性器観察・性語使用・其他の諸項目の順となっている。幼児期に芽生えた性意識——男女差の意識と肉体的性感の意識と——が愈々自覚されてそれが著しく、行動の面に現れてきている。而して一面幼児期には殆どみられなかった。所謂性的対立現象もかなり現れて来る。そして既に性的読書・同性愛・恋愛も見られるのである。意識面では異性関心が最も多く、これに次いで性的認識・出生・性的不安と疑問・性的衝動・性道徳・恋愛等の順となっている。

尙幼児期の素朴な出生についての疑問が児童期では異性間の問題としての出生についての疑問となっているかと思われる。

三、青年期 Freed. K の第四期性愛期に当たる。行動面では自慰行為が最も多くこれに次いで性的衝動『性的読書・恋愛・異性関心が多く更に同性愛・性交・性語使用・性的観察の順となっている。ここで注目されることは自慰行為と性的衝動との消極面が大であることである。如何に彼等が生活環境的刺戟は敏感な体制にあるかと言ふことを物語っているかと思われる。意識面では性的認識が最も多く性的読書・異性関心・性道徳・性的不安と疑問・性的衝動・出生其他の順となっている。性教育・性的読書等によって性的認識はかなり得られて来る。

月経週期及び継続と性格との 關聯に関する研究

大 平 勝 馬

人格性理解のために、それが身体的生理的特質との間にもつ關聯を順次検討して基礎資料を提供したいのが著者の念願とするところである。本研究は月経週期、継続日数及びそれらの動揺度が如何に性格を着色しているかを研究した報告である。

研究にあたっては先ず中学二、三年高校一、二、三年、大学二年、女子工員計六四五名について月経期間(日、時)調査を六ヵ月間継続し、この調査に基き各人毎の継続及び週期平均日数並びに両者の動揺度を算定した。次に質問紙法による月経に対する情緒的反應及び生理的異常感覚有無調査、淡路、岡部両氏情緒不安定性検査、内田クレペリン作業検査を実施し前者との關聯を考察した。

結果中、月経週期、継続日数とそれらの動揺度及び生理的異常感覚有無の%をしらべると、情緒的反應調査では平氣と答えている者一四・九%他は不快(一四・八%)心配(一二・四%)予期的不安(一一・八%)考へこみたくなる(一一・九%)等々種々の情緒を伴っている。然もこれらの否定的な情緒は継続日数の長い者、継続日数及び週期の動揺甚しい者、生理的異常感覚を伴う者により著しく見られる。月経特質の程度と情緒不安定性との關聯は、継続日数及び週期動揺度の高い者及び生理的異常感覚を伴う者は然らざる者に比し情緒不安定性が稍々高い。クレペリン作業検査結果との關聯は、動揺度の高い者及び生理的異常感覚を有する者は然らざる者に比し休憩効果は稍々高くなっているにかゝらず曲線型はより多く常態から離れ且つ作業量動揺度もより多いことを示している。

以上要するに月経の個人差として見られる継続日数長

短、継続日数及び週期動揺度、生理的異常感覚有無は単に一時的情緒的反應に差が見られるにとどまらず、固定的な性格形成に多少の影響を与えているものと認め得る。

都市勤勞青年の悩みについて

葛 谷 隆 正

熊本短期大学夜間部学生、熊本市内各種事業場の勤務者、及び八代市興国人絹、東洋纖維、三榮酒造各会社の従業員に対し質問紙法によって調査した。

都市勤勞青年は自己の問題、勉学に関する問題に最も悩み、職場、人生社会に関する悩みは案外少い。

都市勤勞青年についてのみ更に項目別に性別、通学不通学別に検討してみると、夜学に行っている者は勉学の問題が最大の悩みであり、次いで自己の問題に悩んでいるが、その程度は前者の半ば以下である。之に対し不通学者は自己の問題が最大の悩みとなっており、次いで家庭の問題の悩みが大きい。

男女別についてみると、男子では勉学問題が女子では自己の問題が他に比して極めて著るしく最大の悩みとなっている。併し通学、不通学別にみると、前者では勉学問題が後者では男子に於て家庭、職場の問題、女子に於て自己の問題が最大の悩みとなっている。

都市勤勞青年に最も多い大きな悩みは自己の問題が最も多く、家庭職場の問題が之に次ぎ、交友問題は最も少い。男女別では男子に於て自己の問題が筆頭で、職場勉学の問題が之に次ぎ、人生・社会の問題も可成り多い。女子に於ては家庭、自己の問題が他より遙かに多く、勉学問題など最も少い。併し通学不通学別にみると、勉学問題が前者で第一位、後者で最下位、自己の問題は後者で第一位、前者でも第二位となっているが勉学問題に劣らぬ程に多い。この点は男女を更に通学不通学に区分してみると一層はつきりと現われてくる。

之等を通じて男子は女子に比して、又通学者は不通学者に比して一般に悩みが多いことが知られる。

次に具体的内容から見るとどうか。全体としては（職場と勉学との両立に悩む）が最も多く、この点男、女、通学者に於て同様である。次は（自己の性格、性質が望ましくないで悩む）が多く、この点男子、通学者に於て全く同様である。女子では更に（家計が苦しい）、（深い交友の望み難いこと）が第一位を占め、不通学者では（家計）と共に（自己の体格、健康、容貌が望ましくない）が首位にある。又男子では（人生問題の悩み）が、通学者では（交友）や（学資の問題で悩む）がかなり高い得点を示している。

最後に都市勤労青年はこれら悩みをいかにして解決しようとしているか。全体としては信頼する人（親、教師、先輩、同僚）に相談するのが最も多く、自己修養が之に次ぎ、この両者が圧倒的である。

青年の自我意識、

とくに自尊心についての基礎調査

佐藤正

一、問題

(一) 青年の考えている自尊心とは、どんなものであるか。
(二) 自尊心に基づく諸行動を通じて、青年の自我行動の傾向性（自我のメカニズム）を知ることができないであろうか。

二、調査

(被験者) 東京学芸大学男女学生計一二四名。(調査期日) 昭和二十七年九月—十月

(方法) 質問紙法

学生に対して次の質問を行い、応答してもらおう。

「あなたが、今までに（今年中の経験を反省して）、も

っとも強く、あなたの自尊心が傷けられたと思っている経験、および、あなたの自尊心が、もっとも強く高められたと思っっている経験を、その強いものから順に三つずつ書いてください」

三、整理

応答を個人別にみると、三つずつあげられた経験は大體似かよった事例であったので、もっとも強いものだけを集めて、次表のように整理した。

(一) それぞれの経験は、対人関係において起る場合がいちじるしく多い。従って、友人、家族、教師、他人、その他に分ける。

(二) 自尊心に対する刺戟を外部的、内部的に分ける。

(a) 外部的とは、青年に直接的に働きかけるもの、青年の性格、学習能力、態度、人生観、ものの考え方、顔かたち、スタイルなどに対する非難、嘲笑、欠点の指摘、一賞讃、激励などとしてあらわれる。

(b) 内部的とは、青年の自己反省に基づくもので、青年の他人の行動に対する推測と、自己の行動に対する自己反省とを含む。他人同志の会話、約束の破棄、作品の修正などが前者で、試験の成績、名前の公表、信頼、成功などが後者に含まれる。

四、結果

1、自尊心とは自我に対する価値感がある。価値感には自己の完全感、自己に対する信頼感が含まれる。

2、自尊心は対人関係に多くあらわれる。

2、女子は男子よりも、自己反省、間接的刺戟に敏感である。

専門コース選択の動機に関する調査

木村禎司

工学部の夜間部学生二四四、昼間部三八名合計一八二名について、その機械、電気、建築、土木および工業化

学のコースを選んだ動機についてエッセイ風に記述させた。その前に動機について講義をし、その動機論を各自のコース決定に適用させて見たわけである。結果は別表の通りであるが、動機が幾つも重複する場合は比較的客観的なものを取り、経歴的には最後のものをとった。例えば自分も興味があり、両親もすすめ、工業の高等学校に入学した場合は最後の学校をその動機とする。現場が建築会社で建築科を選んだ場合は職場とする。従って各人一動機として統計したものである。

夜間部の学生は職場の必要や向上心からコースを選択するものが最も多い（二一%）。家庭というのは家庭の職業家人の意向等に従って選んだ者である。これは機械、建築、土木に比較的多い。昼間部の学生にはこの家庭関係で選んだ者が多い。これは夜間部学生に職場動機が多いのと対照される。この家庭動機で選んだ者には、その選択の失敗を感じている者が少数ある。今日の機械工業の不振、建築を選んだが絵画と数学との不得手等によるものである。

個性というのは好き、得意等の興味や材能による選択である。この動機によるものは電気と化学工業に多い。幼少の時からこうした方面に興味を持つ。機械でこの動機の少いのはすでに工業学校に入学して、学校動機に分類されたからである。学校動機は機械と電気が多い。

環境動機は地理的環境と、戦時戦後の時局および現場見学、映画等による選択である。戦時中の機械的環境による選択が機械にある。

知人や親戚による影響は化学工業に多い。土木と建築とには国情による動機が多い。これは風水害の影響と敗戦後の焼土再建がみられる。価値というのは学問そのものの価値を目標にしたものである。機械、電気が多い。これを要するに機械は戦争という環境的動機によつて選ばれたが現在には不振の状態にあり、時期を待つという

傾向がある。電気と化学とは幼時よりの興味によって選ばれ特殊の才能を必要とする如くである。建築と土木とは現在の国情によるものが多いと見られる。ただし建築は数学と絵画との材能を必要とする点が土木と異なり、土木はその仕事の雄大なものと、金銭の扱いの大きいことなどが魅力である様である。(なお知能的には電気、機械を選ぶ傾向があるようである。)

| コース | 機械 | 電気 | 建築 | 土木 | 化工 | 計(%) |
|-----|------------|------|-------|------|------|-------------|
| 動機 | | | | | | |
| 場 | 9 | 9-1 | 5-1 | 8 | 6 | 37-2 (21) |
| 家庭 | 4-6 | 1-1 | 8-6 | 6-1 | — | 19-14 (18) |
| 個性 | 1-2 (6) | 7-1 | 1-3 | 1 | 10 | 19-4 (14) |
| 環境 | 6-1 | 4-2 | 1-2 | 4-1 | 4 | 19-6 (14) |
| 知人 | — | 3 | 3-2 | 3 | 6 | 15-2 (9) |
| 学校 | 10 | 5 | 1 | — | — | 16 (9) |
| 国情 | 1 | — | 5-5 | 3 | — | 10-5 (8) |
| 価値 | 4 | 3-1 | — | — | 2-1 | 9-2 (6) |
| 計 | 35-9 | 32-6 | 25-19 | 24-3 | 28-1 | 144-38 (99) |

備考一並べた数字の左方は夜間部、右方は昼間部である。

終戦後の青年の心理的変遷について

岡本重雄

敗戦による心の傷手が、成人に対する不信の現象とな

ったり、モラルの頽廃した社会状態が、自虐乃至自殺の現象となったり、イデオロギーの波が或は民主主義的な行動となり、或は急進過激な実践となったりする。

Rosenzweig は Frustration から出て来る人間の反応を、攻撃 Aggression と防禦 Defense という概念でおさえ、自己防禦の反応をな反応と Extrapunitive な反応と、Intropunitive な反応と、Intropunitive な反応に分けている。即ち、「他人を責める」、「自己を責める」、「誰をも責めない」という三つである。

自分は、青年心理の根底に「自己完成」の要求と「理想社会形成」の要求とを認め、そこから自己批判、他人批判、社会批判が出て来るものと考え。それが Frustration の場面では、生活気分やマイナスの情緒と結びついて Negativism とでも称すべき心理状態を生み、そこから犯罪・自殺・忍耐といった三種の行動が出てくるものと解する。

女子青年学徒の関心と願望

飯田順雄

I 学科の好悪評価

被服専攻学生の好む学科又は身を人れてやる学科は洋裁、音楽、和裁がリードし、英語、体操、自然科学は好まず、家事、文化、国語等は中位に感ぜられている事に分る。

家政専攻の者はその学科の性質上、家事、自然科学(生理衛生)等が興味を以て好まれるが尙之を凌ぐものが音楽であるのは、女性の本来の趣味と音楽の盛んな社会の風潮の影響も多いと思われる。而して英語、体操の余り好まれないのは被服家政両者に共通した傾向と見られる。

英文専攻の学生に於ては英語音楽がリードし、洋和裁は何れも関心を持たれない。自然科学、文化科学は中位

に位している。

II 学校での教科以外の趣味としての稽古

被服、家政、英文各科を通じ特色は見られず、生花、茶道、器楽(ピアノ、ヴァイオリン)、書道、舞踊等が多く、謡曲、箏曲、編物、タイプ等もあるがその数は少い。

III 社会的事件に対する関心

調査当時一般に知られた著しい事件六項(吹田騒擾事件、ヒドラジット製造販売許可、防空訓練参加問題、国共共和大統領候補指名問題、中共との貿易開始問題、邦映画「羅生門」)に対し、その関心の重さによる評価をせしめた結果、

被服科としては社会的事件に対する関心は防空演習、吹田事件、米大統領領問題等の政治問題に重きが置かれ、ヒドラジットや羅生門等に関心が薄い。

家政科も文化、小説、批評等が関心の中心で経済記事は余り関心を持たれていない。

英文科では文化、社会記事が関心され経済記事は関心されぬ事を示す。

IV 放送に関する問題は

家政科の傾向は洋楽、劇、街録等に興味をもつと共にニュース、娯楽等に関心を示すが講演は余り好まれない。

被服科としては洋楽、放送劇が最も好まれ、街録の如き聴取者の声の反映は好むが講演、和楽は好まれていない。

英文科の好みは洋楽、ニュース、クイズ等が優位を示すが講演は矢張り興味が少い。

V 読書について

被服科に洋裁についての雑誌、スタイルブック。英文科に英語研究、時事英語、それいゆ等の特殊雑誌が挙げられている。外は単行本、雑誌を通じて各科共通で、雑誌としては文芸春秋、リーダーズダイジェスト、中央公

論、婦人公論、週刊朝日、サンデー毎日等が大部分で、興味を以て読んだ記事としては時節柄女教員の夫殺し事件、所謂バラバラ事件が女性の立場からショックを受けたものと見え最も多く挙げられている。単行本としては「愛と認識の出發」(倉田)、「我が懺悔」(トルストイ)、「心」(漱石)、「人形の家」(イブセン)等の古典から「廿五時」(ゲオルグユウ)「窄き門」(ジイド)「風と共に去りぬ」(シチュエル)「幸福の限界」(石川達三)その他破防法問題に関する物等種々雑多である。

重量弁別の学習効果

金子 秀 彬

実験方法

九瓦より三二瓦まで一瓦ずつの差をもち外見的には全く厚みその他の条件を等しくする封筒を材料として、実験の条件を

- 1 一つ一つの封筒を二〇瓦より重い、軽い、等しいと判断する一分前に標準刺戟重量二〇瓦の封筒の重さを銘記せしめ、この時間を30" 10" 3"の三条件とした。
- 2 一判断の時間を1/25" 1/50" 1/75"の三条件
- 3 一連の実験に用いる封筒の重要範囲をA(九—二四瓦)、B(二二—二七瓦)、C(一六—三三瓦)の三群とし三の実験条件を作った。

これ等の条件によって、一連の判断(一六—一七回)の前に与えられた標準銘記時間の影響、判断速度の影響、刺戟群の影響、更に経験者、未経験者の結果を比較して習熟の効果を把握しようとした。未経験者として二〇—二三才の女子学生、経験者としてこの種作業に従事する経験〇・五—五年の郵便受入担当者夫々一一・九名

実験結果

- 1 確実に乃至五〇%正しく弁別される限界は経験者と

未経験者との間に有意な差が認められない。

- 2 銘記時間の長短は実験条件の範囲では誤判断率、上下弁別閾の拡がりとは関係なく経験、未経験による差は明かでない。しかし銘記時間が長いときは主観的対等点の個人差が少くなること反主観的対等点の標準重量からのずれが小さくなることの二点が未経験者の場合認められ学習の効果を示す如くである。
- 3 判断速度が高くなると主観的対等点は標準重量より大きくずれて軽い方向に向う。経験者、未経験者の傾向は全く同様で習熟の効果はこの点では認められない。錯誤率の点からいえば、主観的対等点が移動しても変化はない。
- 4 実験条件のうち、刺戟群によるものは最も著しく、この傾向は経験者未経験者同様で又刺戟群により判断が影響される大きさも同様で習熟の効果は認められない。
- 5 上述の結果は順序(刺戟)の影響を当然予想せしめるが、前刺戟の大きさによる誤判断の率の変化は経験者、未経験者の差異は明かでない。被験者に対し、前刺戟と判断刺戟とが二〇瓦を中心として同側にある方が誤判断率が多い。

絶対反応について

岡 本 夏 木

〔目的〕 従来単に大小系列にのみについて、或は明度系列についてのみ、相対反応とか絶対反応とか言われていた関係把握に於て、色や形、又両者の混合形式等が同時的条件として共在してくる時、それらは関係把握というよりも、一つの選択状況に於ける cue の問題として、如何なる発達の变化を示すかを探索する。

〔手続〕 Ss は京都市内五保育園児、五才群〔四・七—五・六〕、六才児群〔五・七—六・六〕各一〇〇名ずつ

計二〇〇名、刺戟材料は大図形として直径一六種の円と一辺一六種の正三角形、中図形は、直径、一辺ともに八種の円と正三角形、小図形は、直径、一辺ともに四種の円と正三角形で、色は各々につき青と黄で計一二個、何れも一種の蓋状。正反応の報酬としてオハジキをその下に入れる。条件は次の五種。

- ① (大小) 大中小三図形とも同形同色。
- ② (色) 三図形とも同形で中のみ異色。
- ③ (形) 三図形とも同色で中のみ異形。
- ④ (混合) 大小は固形同色なれど、中は色、形ともに大小と異なる。以上訓練では何れも中を正として RLLR の順で訓練し、検査時の第一回の反応で、相対反応 γ 、絶対反応 α (但し大小関係についての意味での名称) に分類する。
- ⑤ (混合) は先ず条件①の検査時に於てもすべて γ に訓練し、それに続いて④を施してみる。

〔結果〕 数値次表の如し。

| | 六才児 | | 五才児 | |
|--------|----------|----------|----------|----------|
| | γ | α | γ | α |
| ① [大小] | 17 | 3 | 18 | 2 |
| ② [色] | 15 | 5 | 8 | 12 |
| ③ [形] | 14 | 6 | 10 | 10 |
| ④ [混合] | 12 | 8 | 7 | 13 |
| ⑤ [混合] | 16 | 4 | 15 | 5 |

①②③④各条件を通じ、六才児群では γ α の分布に有意的差はみとめられぬが、五才児では $p < 0.01$ の危険率で有意差があり、又④⑤間にも五才児は $p < 0.05$ の有意差が認められ、②について五才児と六才児間では、 $X^2 = 3.68, 0.1 > p > 0.05$ であったが、これは今少し例数が多いと、恐らく有意差がみとめられたであろう。

〔考察及び結語〕 以上の結果については今後四才児や八才児の研究をまけて更に明かな考察が下しうらと思われるのであるが、六才児の大小の相対的關係を cue とした反応というものが五才児にて示された如き段階を経

て出てきたものであること、そして六才児でも④では α は増加し、又五才児でも⑤の如き状況では α は減少することは、この兩段階の連関性を示すものであると同時に、②の色に関して兩段階間に相当大きい変化がみとめられたことと共に今後の追求の大きい手がかりとなりうると思われる。

尙本実験には京学大、齋藤喜久雄氏の大きい援助を受けたことを感謝します。

桂離宮における奥行知覚の

二三の問題について

佐藤幸治
和田陽平
和岡美延
○辻

桂離宮には視知覚上からみて興味深いものがいくつある。例えば中書院山水の間の違い棚、戸袋、床の間の構成や、新御殿廊下の櫺の框の彎曲や、賞花亭における格子からの谷間の俯瞰の際の深さなどである。違い棚は事実よりも深く見えるように、又は板が反らぬように奥の方が厚くなっているといわれているが、実際は水平より約三度位手前が上方へ傾いて、棚の下面が坐者からは普通以上に見えるようになっていて、奥行の感じを強めている。われわれはこの違い棚の下面の傾斜の角度と奥行の印象との関係について実験的説明を試みたのである。

即ち装置として、標準刺戟は奥行三〇糎、巾六八糎、厚さ三糎、棚の下面のみ〇度より四五度まで変化しうる棚を作り、比較刺戟としては、巾、厚さ同様で奥行のみ二〇糎より四〇糎まで変化しうる水平の棚を用い、観察距離二米、両眼で眼は比較刺戟の棚の下面より約二〇糎下の所に固定し、(約五度下、山水の間の床の前に坐って見るときの位置)調整法で行った。比較刺戟は標準刺戟の左とし、正中線の両側に並べて置いた。

実験結果は、被験者、下面の傾角、実験順位の三要因

にわけてラテン方格で検定した。

これによれば棚下面の傾角の間には5%水準で有意差を見出すことが出来た。被験者間と実験順位間とは有意な差は認められなかった。これによると棚下面の傾きは奥行の過大視をもたらしことは明らかであり、時に五度より三〇度までの過大視量が大きく、四五度ではそれが減少している。この中SとWのV_pは過大視量の傾角がやゝ異なるため、更に傾角を細分して検討してみた。これによるとやはりSとWの各人の夫々の傾向は変わらず、Sは一〇度乃至一五度の辺に、Wは二〇度乃至三五度の辺に過大視量が大きく、個人差があり、何処が過大視量の最大になるかという一定の傾向は見出し得ないが、〇度と四五度に近い両翼において急に過大視量が減ずるところとは一致している。

更に注視点を棚の下面と同一水準においた場合の実験では過大視量の傾向は同様であるがその絶対量は減少した。

中書院山水の間では戸袋の下面も傾いており、違棚の傾きと相まって奥行の印象を深めていると考えられる。

大きな刺戟を用いての重量比較

鷹野次健
松井三雄

I 方法 ①用具……イ、重量箱(一〇キログラム)。縦

三〇センチメートル、横六〇センチメートル、高さ二八

メートルの木製の箱に砂袋を加えて一〇キログラムに調

節、箱の両端にロープを附し、ロープに木製の把手を附

ける。ロ、重量刺戟。紙袋に砂を入れて作る。重さは一キログラム、〇・五キログラム、〇・二五キログラムの三種。②要領……被験者は目かくしをして、重量箱を前にし、約三〇センチメートルの足巾で立ち、実験者の合

図で体を前に屈し、把手を握って持ち挙げ、約二秒程保

持しておろす。次の合図で第二刺戟を同様の要領でもち

あげる。箱が体に触れないこと、第一刺戟をおろした

後、体を一度もとの姿勢に復すること、拳重の高さは、特

に規定しないが、最初の高さを一貫して保つこと等の注

意を与え、第二刺戟を挙げた瞬間に第一刺戟に比べて重

いか、軽い、等しい(疑わしい)かを報告させる。③

刺戟提示法……全系列法により、時間間隔は一比較一二

秒(一三秒、第一刺戟と第二刺戟との間約四秒)五秒、

一比較と一比較との間約一〇秒、⑤試行数……一系列は

五組からなり、一組はex Iでは一八比較、ex IIでは

二六比較、夫々比較刺戟第一順序(Vist)、比較刺戟第二

順序(Vand)を同数に含む。

II 結果 ex I A、 ΔR は標準刺戟一三キログラム、

一五キログラム、一七キログラムの場合夫々平均・四

二、・三四、・三六キログラムであるが、大体に於て標

準刺戟の増大に対し、 ΔR はあまり変らなく、・三五キ

ログラム見当と思われる。

ex I B、八名の被験者について $\Delta R/R$ を見ると、一定だとも云えないが3.50/100乃至1.50/100であった。

ex II A、ex I に於ては明らかにstep が大きすぎたので、step を0.25kgとし、回数を四〇回に増して行った。四〇回を完成した $\Delta R/R$ は各被験者略々一致しているところから、この問題もなお回数を増して吟味しなければ、Weber's Lawとの関係は結論出来ない。

失聴者の内省報告について

中村秀

満一六才のとき失聴した現在二七才の男子の心境を訴

えた記録について報告する。その要点は、一、聴覚の欠損により近親にすら誤解され懷疑される。二、耳からの知識に比して目に限からの知識が限られていることか。三、「話したくてたまらない」衝動の抑止されることか。四、他方、ろう者が黙している普通人に与える恐怖の感。五、音響の与える精神的变化が如何に大であることか。従って幼時より父母の愛撫の声を聞かず、お伽話や童話を聞くことのないろう者は情操或いは道徳的判断に欠けてくる。六、ろう者の性格として、残忍性があるといわれることがあるが、之は一般に泣き声が聞えないところから同情心が生じないのによる。又親の盲愛の結果は依頼心が強く克己心が乏しい。更にもうたことに気付いてからは「母の育て方が下手だから」との恨みを持つようになる。又愛される権利は求めても、それに対する義務を知ることが少い。七、ろう者の側から一般人に対する要求は、ろう者にも話す機会を与えて(仲間入りさせて)孤独感を味わせないで欲しい。又ろう者と話すときは口がよく見えるように心持ち仰向いて話してほしい。更に語を全体的に理解させて欲しい。たゞタマゴ、タマゴと繰返すことはやめて。八、ろう者の結婚についてはろう同志の組合せが多いのはやはり一般人に対する気兼ねからである。九、最後に一般人に対しては、ろう者を「忘れられた人」としてではなくて、暖い心持ちで扱って欲しい。

心理学実験動物としての

ゴキブリについて

岡 本 春 一

ゴキブリは甚だ豊富で手に入り易い。北海道の如き寒地を除いて本邦各地に生息し、繁殖力も大である。(ワモンゴキブリの雌は一生に平均五一個の卵塊を産し八〇〇個以上の卵を生ずる——高橋良一氏)

飼育も簡単である。ゴキブリの食物は果実、魚肉、穀類、澱粉類に糊、紙類、昆虫の屍、人糞等甚だ種類が多く、しかも食物を全く与えず七十六日間存在した(Holt)報告があり、高橋氏の飼育された若虫は食物も水も全く与えられず六十八日間生存し、而も死に至るまで甚だ活潑であったと述べている。

昆虫の中には成虫期間が極めて短く、従って実験動物として甚だ不向のものが少なくないが、此虫は成虫となつてから死ぬ迄の期間が甚だ長くワモンゴキブリで平均雌一年半、雄八ヶ月であり、若虫の期間も長く一世代は約三年に達し得る。若虫も訓練の対象となり得る。(私の第一号雄は本年九月十日第一回訓練の日から約五十日間生存し其の間二十一回に亘って実験材料となり十月二十九日死亡した。)

ゴキブリは向熱性の動物で摂氏十五度以下ともなれば行動が鈍くなるが私の経験では九度に下つても死ぬことはなかった。二十度附近に保つならば通年実験にも差支えないものと思われる。

アデルハルデンの生物学的研究法比較心理学の部にはエルデルリン(一九一九)が此の虫に適用した選択箱と迷路の引用があるし、フランスでも一九四〇年代の後半から関係文献が急に増している様である。ゴキブリは夜行動物で明所を避け暗所にかくれる。電気の罰を用いてこの傾向を変更する方法をはじめ実施したのはスマンスキー(一九二二)である。彼は十四の若虫を用いている。其の装置は少しづつ改められてハンター(一九三二)南氏及びダレンバツハ(一九四六)等に襲用され、前者は低温無活動が保持に及ぼす効果を問題とし、後者は同じく強制活動及び無活動の保持に及ぼす影響について頗る行届いた実験をされた。

ターナー(一九二二)は水上に高架した相当複雑な迷路を用い、平素収容されている容器にかえることを試みている。

ゲイツ及びアリー(一九三三)は暗い休息容器に達する途の外二つの袋路を具えいしかも暗所に達せんがためには先ず最も明るき場所を通過するを要する水上高架迷路を用いて、単独学習が共同学習にまさることを結論している。(丘直通氏も同様の実験を試みられた由を間接に聞いた。)アリーはシカゴの虫でこの目的に使用し得たものは約三分の一であったと述べている。

私は今年九月以来クロゴキブリ(Periplaneta picea Shiraki)について南氏の型式の実験箱を試用したが今日迄に試みた六十四個体中十試九成の標準に到達したものは三十五個体であり、色々の事情で途中で訓練を打切つたもの、中絶行すれば八割近くがこの装置のまゝで訓練可能の如く思われるのである。

記憶の実験的一研究

荒 冷 政 雄

被験者は五年生児童五五名、二年生児童二三五名を用いた。

実験(1)、二年の児童に家庭学習してはならぬテストである事を納得せしめて、乗法九九、2、3、4、の段を一二分間提示して記憶せしめ直後及び後日想起せしめ、更に六の段は等質各グループ五集団に一回想起させて、連続想起との比較をした。

実験(2)、二年及び五年の児童に、二年は七、五調の詩八行、五年には七、五調の詩一〇行を一二分提示記憶せしめて、直後及び後日想起せしめ、更に等質グループ五集団に一回のみ想起させて連続想起と比較した。

第一、第二の実験から、九九詩の如く論理性或いは意味ナリズム的なもの、即ち形態化を統一する調子、気分がまとまっているものでは、一日目は何れも下降して居り二日目は上昇傾向であり、その後も稍上昇傾向すら見える。斯くエビングハウスの把持曲線とも、バラードの

Reminiscence の曲線も画かない。この一日目の下降は記憶の痕跡が神経過程で体制化され記憶の枠結の位相に落着く為の整理期であろうと思われる。二日目以後が上昇或は安定傾向あるのは、ゲンタルの形態化がある程度力を持つと自動的に完成する傾向ありとの説と、痕跡の潜在しているものが、ぶつと連絡づいて引出され、その想起で体制化し安定するのによる根拠の一つとなると思われる。これは原学習を提示しない想起が再学習としての効果を持つものであると言い得る。そこに想起の記憶の頻数に於ける意味を見出す。尙原学習後毎日一回の想起をしたのと、連続想起をしないのと同経過日に比較する事により一層想起の意味を明らかに証し得る。

実験(3)、実験(2)と同様な詩の記憶で等質集団に時期を変えて、各一回五分間再学習して、初回の学習より七日目に想起させた。

二年と五年が相反した傾向を取っているのは、精神発達之差から高学年(五年)は全体が形態化されて把握され、低学年(二年)は統一的形態が出来ずに部分的把握がなされたものと考え得る。これはあたかも有意的なものとの全習と無意味なものとの分習及び後退禁止の大小に対応する。

実験(4)、詩の内容による把握相異は実験(2)に於て、二年の同グループの異った詩に六・〇二と三・六七の相異ある事に於て示されているが、更に五年生に与えた程度の詩、八行の同グループ同条件の直後再生では二・二二であった事から、内容語句の理解度が記憶に大きな関係のある事を知る。精神の発達から抒情的のものは低学年には不向きで抒情的のものが良く、又語句も低学年に理解出来るものでなければ形態化不が可能であると云い得る。

Müller-Lyer 錯視の destruction 12 関する実験的研究(3)

滝野千春

Müller-Lyer 錯視の反復観察によって生ずる錯視の destruction の要因として Köhler は displacement を考えている。併るにその際の標準刺激としての内向図形については、凝視に伴う所謂 self-satiation の要因もかなり働いているであろうことは推察に難くない。

その点に関する手がかりを得る意味に於て内向図形だけを予め一定時間凝視させてから錯視量の減少をしらべた実験では次のような結果を示した。即ち凝視時間が長くなるにつれ、錯視の減少量は増加する傾向が見られ、短時間の凝視ではむしろ錯視の増加を示した。

次に内向図形をごく普通の態度で凝視させた場合と閉じた図形の一部であると云う態度で凝視させた場合とを比べると、前者は錯視の減少を示したのに対し、後者はむしろ錯視の増加を示した。之は displacement に対抗するものとして self-satiation の要因が働いたのではないかと思われる。

今度は内向図形だけについて図形残効をしらべて見た。先づ inspection figure として内向図形を提示した後、それを一定時間凝視せしめ、test figure を提示する。test figure は inspection figure に用いた図形と同形同大のもの二個が上下に並んだ図形で、その上方の図形が inspection figure に丁度重なるように提示するのである。そして test figure の上方の図形に比して下の方の図形が長いか等しいかを答えさせるのである。結果を総括すると凝視時間が短い(一分以内)場合は短いと云う答えは現れず長い或は等しいと云う答えだけだが、凝視時間が更に長くなると下の方の図形が短く見える。と云う答えが出てくる。以上から凝視が短時間の時は self-satiation の要因がより強く働き、

長く凝視するにつれて次第に displacement の要因が拮抗的に働いてくるのではなからうかと推測し得る。そして Köhler の説明した displacement の場合は反復観察のため、内向図形がかなり長時間凝視された場合に相当するものであると思う。

視野闘争における意志的統整の効果についての小実験

柿崎祐一

視野闘争、図形反転現象等の観察に際し、S が「注意」又は「意志」によって、一方の図形を優位ならしめ得ることは、古くから衆知の事実であるが、かゝる効果についての定量的な分析は未だ殆ど行はれていない。

本実験では、とりあえず一名の S について、かゝる効果がどの程度の実在性を有するかが検討され、又実験の反復による一種の練習効果が存在することが示された。装置、条件、実験手続等は大体に於て既に報告した実験(心理学研究、二〇巻二及び四号)と同様である。

実験者の指示により、次の三条件が規定された。即ち
規準条件(N-条件)
「自然的な受身の態度で観察せよ。」

統整条件(VR-、及び VI-条件)
「右(又は左)の Figur を意志的に優位ならしめよ。」

各条件について、一回六〇秒の観察中の左右各図形の出現時間(T_r 及び T_l)と出現回数(N_r 及び N_l)を測り、之等に基いていくつかの測度を定義したが、(前出論文参照)、こゝでは一応右(又は左)の左(又は右)に対する出現時間の比のみをとりあげる。即ち、

右の左に対する優位度 $Dr = tr/rl$
左の右に対する優位度 $Dl = tl/tr$

主要なる結果

(1)、N-1条件における反応の定常性。

一日 1 sitting (5 trials) として連続10日間の実験を通じて、 $\log D$ の平均値 0.0、分散 $u^2 = 0.0016$ 程度で変動は極めて小さい。更に其の後実験を反覆しても、上により定めた棄却限界 ($\gamma = 0.01$) を出ることはない。

(2)、V-1条件における効果の実在性

N-1条件による実験と同一 sitting として、V-1及び V-1条件による trial を各五回づつ行つたが、初期の実験でも既に相当の効果が示され、D値は高まる。(Jod $D = 0.2$ 程度)

(3)、練習効果

実験回次の進むにつれて、V-1条件によるD値は概ねS字型曲線を描いて上昇し、一〇乃至一五回の実験で $\log D = 1.0$ 程度に達する。しかし更にそれ以上反覆するにどのようになるかは、今後の研究にゆづらねばならぬ。

尚、V-1条件におけるD値は、持続観察又は trial の反覆に伴って減少の傾向を示す。(持続観察の場合には一種の周期性が予想される。)かゝる禁止の効果は、上述のような「練習」の進行につれて減少の傾向を示し、練習によつて禁止効果への抵抗も増大することが推測される。

ランシュブルグ現象の分析的研究

小 保 内 虎 夫
辰 野 千 寿

目的 Ranschburgは一九〇二年、数字系列を瞬間的に認知あるいは記憶する実験において、一列の中に同一数字が二個含まれているときには、その認知や記憶が不良となることを発見した。それ以来、この現象は Ranschburg 現象と呼ばれ、その後 Aall, Schultz, Kleinschnecht, Tusley, Henning などにより研究された。

しかし、それらの研究結果は、必ずしも、Ranschburg

の最初の主張と一致せず、ある場合には同一項は却って認知、記憶されやすいことを示すものもあった。そこで、本実験においては、系列内における同一項の位置、両者の間隔を組織的に変化し、それが Ranschburg 現象をいかに変えるかを考察しようとする。

方法 実験材料としては、七桁の数字系列と七個の仮名系列を用い、同一項を次のように配列した。

x a b c d e
x a b c d e
x a b c d e
x a b c d e
x a b c d e
x a b c d e
x a b c d e
.....

ここで a, b, c, ..., e は異なる数字、仮名をあらわし、x は同一項をあらわす。

刺激提示は継次的で、一項約一秒の速さで口頭で与え、その後直ちに再生させた。被験者は高校二年生八二名(数字のとき)と八一名(仮名のとき)

結果 再生の脱落、誤記を誤として数え、誤謬率 $\frac{\text{誤謬}}{\text{総数}} \times 100$ を各項ごとに算出し、同一項を含む系列の誤謬率とを比較した。すなわち、同一系列の同一項の誤謬率と標準系列の同一項に該当する位置にある項の誤謬率の差を求めた。

その結果、同一項の位置、両者の間隔によつて、促進効果と禁止効果があらわれた。いま、その傾向を概括すれば、次のようになる。

(1) 系列において、その端から(たとえば左から)同一項の間隔を大きくしていくときには、始めは促進の効果が見られるが、間隔が大きくなるにつれてその効果は減少し、禁止の効果があらわれる。しかし、ある点をこえると再び促進の効果があらわれる。

(2) 系列の中央から同一項の間隔を大きくしていくときにも、促進と禁止がみられた。すなわち、同一項の間隔が近いほど促進効果がみられ、離れるにつれて禁止効果があらわれた。しかし、系列の両端に同一項がくるとき

には促進の効果がみられた。

白鼠の計数実験——第三報告

大 塚 鏡

著者がさきに報告した一枚跳躍架台を用うる実験結果が、二番目乃至五番目の選択の可能なことを示した。この動物の学習が試行錯誤による迷路学習と同種のものであるとは考えられないことを Woodbury の実験との比較して検証することがこの報告の目的である。

1、学習の経過を示す曲線は課題の難易によつて単に傾斜を異にする単純な上昇曲線ではなく、二番目の選択と三番目の選択とは性質のちがった曲線を示している。即二番目の選択では、単純な上昇曲線であるが三番目の選択の場合はS字状になる。四番目五番目の選択では曲線の動揺が著しい。

2、各選択点に於ける誤の傾向を見ると、圧倒的に目的とする架台の一つ手前に誤が集中することが分る。これはある点本実験と類似している Sprow, A. J. の等質的な複合的試行錯誤学習の結果とも Woodbury の結果とも相違する重要な点である。Sprow によれば等質的な unit を組合せた直線迷路では学習の後期については誤数が最初の選択点で最も多く、最後の一つ手前で最少になるといふ。この実験では正に反対の傾向を示している。Woodbury によれば ABBB, AAABBB, 等では最後の A に最も誤が多くそれから両方向へ減少して行くのである。Goal に関して考えればこの実験と彼との相違は明らかである。唯 B への行動の変化を標準にするところの結果と相似した点が見られる。然しこのことは彼の trace 説からは許されない。又彼の結果に整然と現はれている如き課題の困難度に比例しての誤数の変化は得られなかった。

3、動物の一走行時間について見ると、最も大なる架

台の組合せ、小なる架台の組合せ及び中程度の組合せと三つに分けて調べれば、大体各組合せによって平均一秒位の差があることが分る。これは著者の使用した各 unit が距離の相違するものであることによるのであるが、このような比較的大きな時間差のある課題を略同様の困難さで学習出来ることは注意に値する。直線迷路の公式をそのまま適用するに躊躇する複雑な条件の変化がこゝにあるが、こゝではそれにふれない。

以上 Woodbury の多重反復実験と比較して見て両者の学習は同一性質のものと考えられることは不適当であり、若し時間的三重交替が可能ならば、それも彼の trace 説では説明出来ないのではないかと考えられることを明らかにした。

白鼠異常行動の筋電図及び脳波的研究

桶 渡 志 良

私は聴原発作に関する実験的研究の報告を日本心理学会に於て屢々なして来たが、今回は筋電図及び脳波について報告する。

聴原発作の際の行動の記録は肉眼的観察に基くもの(佐主で、例外的にはキモグラフ・イオンで記録したもの(佐々木)があるが、拘束状態の時の後肢の運動に限られるという欠点がある。私は近來生理学乃至臨牀医学に於て盛んになった筋電図即ち筋の活動時に発生する活動電流をオシログラフで撮影して行動研究の一助にする事を思い付いた。我が国の心理学会に於ては P・G・R や E・E・G に関する報告は見られる様になったが筋電図に関するものは無いので、行動分析の一手段として筋電図はもっと利用されるべきである事を強調したい。

実験方法は発作を起す素質のある白鼠(体重一五〇瓦前後)を選び脳波は頭蓋内皮質に挿入固定した小銀板電

極より、筋電図は *m. biceps femoris* に一部絶縁を除いたエナメル線電極より誘導した電流を二つの四段増幅器(時定数〇・二秒)で増幅し、電磁オシログラフを用いて同時撮影した。動物は電極挿入の手術後二日を経た行動及び脳波が正常に復した後、麻酔なしで自由状態でガルトン箱により 12kc の音の刺激を加えて異常行動を起させた。

実験成績を述べると、刺激後すぐに起る短走、周走にはそれに相当した筋電図が現れるが脳波は基線の動揺、基本波抑制程度で大した変化がない。周走の終りには痙攣の時に近い振幅の大きい筋電図が出る事があり脳波も棘波或は高電位徐波となる。狂走期、第一間代期は筋電図は痙攣特有の振幅の大きい *Ca*、*Cg* 型で脳波は速波、棘波、高電位徐波であつて、この時筋電図と脳波と同期する事があつた。強直期には筋電図は紡錘状に振幅が段々に大きくなり再び小さくなる *T* 型を示し脳波は速波、棘波群である。第二間代期は筋電図は *Ca*、*Cg* 型で脳波は徐波が主で棘波、小速波を混じた。痙攣後刺激を断続すると刺戟中は跳躍等の行動を示し、それに応じて筋電図に変化があり又脳波は棘波小速波を示し、刺戟中断中はカタレプシー状態になって不動状態であるが筋電図には極めて振幅の小さい変化 *R* 型で脳波は低電位徐波で、実験前又は恢復後の筋電図や脳波とは異つていた。刺戟中止後一〇分程度で自発性の正常行動が現れるが、筋電図も脳波も正常に復した。要約すると行動の異常と筋電図及び脳波の異常とは略々平行していた。

白鼠の模倣行動——第二報

伊 藤 安 二

模倣は学習するか否か決定するために、前に実験した結果は日本大学に於ける今春の日本心理学会に報告した

とおりである。即ち *Non imitation group* の *follower* の模倣学習についてはもっと実験をかさねないと確言され得ないということであつた。そこで今回の実験を開始した。まず鼠を *leader* と *follower* に分けて各々独立に外界からの影響がない様に *control* して生活をさせた。*Leader* は四カ月のもの。カード辨別群四匹と位置辨別群二匹、計六匹。カード辨別群四匹のうち二匹を *imitation group* 他二匹を *non-imitation group* とする。三十日間、延三百試行のカード辨別の訓練を行つてから本実験に入る。

Follower は八匹、三カ月のもの。うち四匹は *imitation group* 他四匹を *non-imitation group*。延八日間予備訓練を行つてから本実験に入る。第一本実験は *leader* 四匹に *follower* 八匹を用いる *imitation group* では *leader* 二匹に *Follower* 四匹を *non-imitation group* では *leader* 二匹に他の *follower* 四匹をつけて一日十試行、十二日間、計百二十試行実験する。(この際 *imitation group* の *leader* 一匹は白カードへ、他は黒カードへ辨別して行く。*non-imitation group* の場合も同様であることはいふまでもない。*follower* 四匹は、その内二匹が、白へ行く *leader* に *follow* し、他の二匹は黒へ行く *leader* に *follow* する。)

一日おいてカード無しの場合の検証実験を二日行う。それは *follower* が *leader* に辨別しているのか又はカードに辨別しているのかをしらべる為に行うものである。

次に第二本実験は、第一本実験の *Leader* の内の一(白へ)を他(黒へ)と交代させる。*follower* は同じ。実験方法も前と同じ。一日十試行十二日間続行。一日休んで検証二日、一日十試行。

第三本実験は一カ月おいてから第一本実験をくりかえして記憶の有無又はハビット形成の有無をテストした。第一本実験と同じ鼠を同様なる方法において行う。而し

て結果次の如し。

今春日本大学に於て発表せし先きの実験に於いてに於いて non-imitation group の follower 認められなかつた模倣学習の傾向は、今回は確認されて成功する。尙お、

『心理学研究』第二二巻、第四号、昭二七年六月号、四六頁参照。

肺結核患者の自信度測定に

関する研究 I

——女子患者の入所時における資料——

波 辺 徹
関 誠 一 郎
大 村 政 男

〔問題〕 T・B患者の精神的傾向についての研究は、かならずしも同じ傾向の結果を得ていない。すなわち患者に抑うつ的・心気症的傾向が少く多幸的傾向を帯びるとするものと、内向化・神経質傾向の昂進を挙げているものがある。この研究においてはC検査(文献 児童の心性と能力検査・日本大学文学部研究年報I)を用いて患者の「自信 Self-Confidence」を調査した。このC検査は神経質を調査するN検査と $r = .68$ (5) $r = .59$ (6)の相関関係のあるものであって、神経質傾向を裏面から探ろうとしたものである。二五問の箇条のうち主なものは次のとおりである。(Shaffer: The Psychology of Adjustment 1944 P. 320f かから翻訳改訂)

(三) 非常に興奮することがしばしばありますか？

(一八) 劣等感で悩むことがありますか？

(二四) 大勢のひとの前に出ると尻込しますか？

〔手続〕 各地の国立療養所における女子肺結核患者を重症・中等症および軽症の三つのグループに分け、層化見本として九五%の精度を持つ見本(N五七一)を無作

為抽出した。このグループについて概評・病態・安静度・体温・脈搏などの五項目とC検査と検査の得点との関連を求める。

〔結果〕 見本の分配曲線の型は $N571-x21-0$
五 u^2 八四・六四 β^2 一・五五 β^2 二・一六である。

概評と自信度

重症 $N167-x22-15$ u^2 八三・三〇

中等症 $N246-x20-30$ u^2 八六・一八

軽症 $N158-x20-95$ u^2 八〇・六三

病態と自信度

進行型 $N360-x21-30$ u^2 八二・八一

停止型 $N211-x20-35$ u^2 八一・〇〇(略

治型を含む)

安静度と自信度

A・B・C度 $N223-x20-15$ u^2 七四・一三

D・E度 $N348-x21-90$ u^2 九八・〇一

(絶対安静を必要とするようなグループ)

体温・脈搏と自信度

C検査の得点が十一・五S以上のものと十一・五S以下の範囲にあるものとの二つのグループの体温と脈搏と

について調べてみると、そこにはなんら規則的なものが認められない。

これらの資料は推計学的検査によりみな消極的なものばかりである。これは入所当時のものであるから、これ

だけではなんともいえないが、一が問題問題は調査方法の欠陥にあるものと考ええる。

児童に於ける思考の発達の研究

その一

因果関係の概念(1)

田 中 敏 隆

被験者は小学一年から中学三年迄計八七四名。Form

Form 1 (1) 風はどうして起りますか、(2) 雪はどうして出来るのですか、(3) なぜアドバルーンは空高くあがるか、(4) なぜ雨の降った後によく虹がでるのですか、(5) なぜボートは水の中にしずまないでうかんんでいるのですか、(6) 影はどうして出来るのですか、(7) かみなりはどうして起りますか、(8) あなたが鏡の前に立つとなぜあなたの姿がうつるか。

Form 2 (1) 光のついているロケットにコップをかぶせるとなぜロケットは消えるか、(2) ボール紙の四隅から糸をつけて、紙上に一銭銅貨をおいて廻転させるとなぜ銅貨は落ちないか、(3) ビーカーに一定の高さに水を入れ、次に小石を入れるとなぜ水面が高くなるか、(4) 一つは中心に支点を持ち、他の一つは中心からずれた折に支点をもつ。前者の両端に重さの同じ石によって均衡であり、他はそうではないもし大きな石を一方の端からとり小石をのせるとなぜ均衡になるか、(5) コップに水を入れ、ボール紙でふたをして裏返しにしてもボール紙が下に落ちないのはなぜか、(6) 連通管の一つの管にコルクせんをつめて水を入れ、次にコルクせんをぬくと全管の水が等しい高さになるのはなぜか Form 2 は実験を行ないその後返答させた。

一七のタイプの検討をして見る。個々の問題を分類することは困難であった。Deutscheも同様であった。三人の助言を得て分類し、人工的、関系的、四囲の媒介、凝縮のタイプに当る答は見出せなかつたと報告している。彼は「ごまかし」(trickery)を入れて一八に分類している。本研究では、助言を得て二二に分類した。一応 Piaget の分類は認められるが若干の問題点が存する。(2) causal thinking は段階的には発達しない。(3)

causal thinking の機能的転換は一般的に何年生ぐらに見られるか、現象的な解釈は四年で上昇し、五・六年と下向き、機能的な解釈は低、上学年に低く、四・五年で頂点をなし、六年で下向きする。論理的解釈は学年に

よって上昇傾向が見られるので、多分六年頃に転換期があるのではないか。(4)性差についてみると現象的な概念は若干の学年を除けば女子が高い%を示しており、機能的なものでは小学校に於いて男子はやや高く中学校では逆の現象になっている。論理的なものは一貫して男子が高い%を示している。これの点から Physical causality の思考は男子は女子よりもすぐれている傾向が見受られる。(5)地域的にながめると現象的では明確に田舎の子供の%が高く、機能的なものは、ほぼ同じ傾向であり、論理的では都会の子供は高い%を示している。

女性徒における級友関係の把握について

藤野 藤俊

被験者は熊本市女子尚綱中学校高等学校生徒、各学年一学級(但し都合により高校三年生を含まず)総計二六〇名。

方法 次の三通り問題が与えられた。

問一、各生徒にその級の名簿を与え各氏名の相当する処に、そのものに対する友人としての好き嫌いを五点法で評定させる。

問二、同じく名簿を与え、各氏名の相当する処に、自己がその生徒からどう思われているか、即ちどのように評定されるか五点法で記入させる。

問三、同じく名簿を与え、各生徒がその級でどのくらいの人気を得ているか五点法で評定させる。

一、問一と問二の相関係数は現実にも他のものから与えられた Sociometric Score とそれについての自己自身の予見値との間の相関で、いわば、自己の学級内における Status をどの程度正確に把握しているかの度合を示すものであるが Ausubel 等の結果と比較すると著しく相関度が低く、又学年による一定の発達の傾

向はみられない。本調査の被験者に関する限り、自己についての Sociempathy の度合は余り高いものとは言えない。

二、問一と問三の相関係数は各人の Sociometric Score と、それについて他人によりなされた予見値との間の相関で、いわば、他のもの、学級内における Status をどの程度正確に把握しているかの度合を示すものであつて、Ausubel 等の結果にやゝ近似しているが、学年による一定の発達の傾向は明確に現われていない。

三、一の結果と二の結果、即ち、自己についての Sociempathy の度と他人についての Sociempathy の度を比較すると、明らかに後者の方が高い。この結果だけからみれば、一般に自己についての Sociempathy よりも他人についてのそれの方が容易であり、且正確であると言われ得る。然しこれにはまだ問題が残されている。

四、問一によって得られた得点、即ち Sociometric Score 上位のものの中位のものを、それぞれ一〇名ずつとつて、彼等が自己を過大に或は過少に予見した値の平均をもとめると Sociometric Score 上位のものは自己は過小に評定し、下位のものは自己を過大に評定している。

乳幼児の事例研究

——性格形成の基礎について——

福田 杲正

人間の性格の形成は決して短日月でなされるのではなく長い年月を経てなされるものであることは今更云うに及ばない。一度性格が出来上つてしまつてなかなか改変することは難しい。が改変されないと、性格だから仕方がないと断念するには心理学が許さない。

ところで性格とは可変のものだとも不可変のものだとも云えるようであるが、性格の中心核ともいふべき基礎は、一度出来上ると絶対不可変とは云えないが、それに近似しているのではないか。その中心核をめぐつてつくられた周辺層は可変のものではないかと考えるのが妥当のようである。俗諺の「三つ児の魂は百まで」というのも這般の消息を物語っていると思う。

では中心核とは何であり、何時頃までに出来上るものであろうか。それは先天的遺伝性のもので学齢期までの生活経験による影響をプラスしたものが核であると考えられる。従つて普通、学齢期までに中心核が出来上ると云ふと云えよう。即ち素質 Predisposition と云われるものに環境 Environment の影響の加つたもの——第一形成期——であらう。これを云わば Character と云ふことが出来るのではないか。ついでその核を中心にその周辺に出来た層——第二形成期——を Personality と云つてはどうだろうか。或はこれらをひっくるめて Personality というべきが、より妥当であるかも知れない。

Gilbert Robin は青少年の不良化防止の策は満五才までに厳しさと愛情を以て育て、礼儀を教えこめという意味のことを云っている。性格の中心核形成期には新に愛情と厳しさを(適度に)もつて教育的環境としなければならぬといふわれわれの考えとロバンの言とは一致している。

今、私は乳幼児時代がこの性格の基礎をつくる上に大きな役割をしていると思われる事例をあげて考えてみたいと思う。

〔事例一〕 S・K 昭和二六年六月三日生

父、O・K、三三才、土工の後層買

母、U・U 二六才、三才の連れ児をして二四年に結婚、二七年はじめ逃げ四月正式離婚。

二七・八・一七 映画館に遺棄された本児 S・K、市警

より相談所へ、一時保護。眼疾。聴啞児？

二七・八・一九 動物的行動、靴をきらい、布団にねず、茶碗より水をのまないで、廊下や地面にねて、廊下にまかれた水をなめる。

二七・八・三〇 眼疾全快

二七・九・九 入所以来三〇日ほどですっかり相貌といひ躰といひ別人の如くなる。昼は主として女の先生、夜は主として男の先生と炊事婦の世話。

二七・九・二一 食事作法も前後手を合せ、キャラメルをたべる時、抱みの紙をチリ箱にすてる。聴啞児と思われていたのが「アイ」と返事するようになる。

二七・一〇・七 愛を真に知らなかったのが相談所の一時保護所で大人の思いやりをうけ母のような愛情を感じてきた。

二七・一〇・二〇 児童福祉法第二七条による措置するまで養護施設S学園に一時依託。

本事例について考察すると、一才二ヵ月位で環境不遇から、家庭的でない児童相談所の Temporary Protect-house に入れている間わずか二〇日位で全く変わったというのは、先天的に悪い遺伝的素質はないために、幸い早くよくなりえたのでもあるが、乳幼児時代であるために

中心核 nucleus が、まだ固まらないので悪くなりつつある核が、よい方向へ変ったものと思われる。

〔事例二〕 以下紙面の都合により省略。

要するに性格形式は成人期まで続くものであり、青年期に略々出来るものであるが、そして常識的ではあるが、素質と環境によって成るものであり、性格のあらわれは、やはり Kurt Lewin の $B=f(P, E)$ の公式に当てはまるものであろう。

そして素質は遺伝的、身体的、精神的等の因子に、環境は身体的、精神的、(自然)環境的、(人為)教育的等の因子を含むものとして考えられるのである。その素質に六才頃までの環境が加わって中心核をつくり行くと

云えると思う。そしてこれは不可変に近いもので、大きくなるまで続き、なかなか改変は困難である。この乳幼児期までが性格形成の基礎となる大切な時期であると云わなければならぬ。この時期は精神的にも肉体的にもどうにでもなる時代であるこの時期に(早産、難産等以前の時期は今は一応別として)大病、手術、大怪我、大きなショックなどがあると危険で、性格形成に悪影響を与えるものである。

更にこれらの弊害を除き予防すると共に、よい環境を考慮することが望ましい。

この時期の習慣はやはり中心核の一部をなすものと考えられ、ロバンの云った「習慣は性格に影響するのみか、全く性格と成る惧れがある」(『異常児』吉倉範光訳)から、よい習慣を必要とするものである。

乳幼時期の大切なことを強調すると共に、心理学的基礎訓練期でもあることを痛感する。

Gerontology (老年学) についで

橋 覚 勝

Paediatrics から Paidology が生れたと同じように、

Geriatrics から Gerontology が生れたということができ、具体的には老生体に関する医学上の問題から、社会福祉と文化の問題となつたところに Geriatrics から

Gerontology への止揚があると考えられる。蓋し科学の発達が個々の科学の分業の分化にありとするならば、このように Gerontology は現在のところ未分化

な原初発足の段階にあるとしかいえない。

Gerontology が提唱されたのは一九四〇年以後のこと

で、一九四六年に Journal of Gerontology が発刊された次にはじまるのであるが、これは勿論現実の逼迫した生活事態や緊急な世論にもとづくといつてよい。ところがことはそれらにもとづいて高年者自体と年をとる (aging)

age) という事実に関する学問的要求と社会的責任とに対する反省の所産であるといふことができる。即ち Gerontology は生体殊に人間の成長(発達と衰退) 向老に対する生活環境の設計、精神衛生、生存の保障、文化生活の変化などのいろいろな問題についての総合的に研究するもので、従つて医学は勿論、生物学、心理学、社会学などの強力な参加を要求するものであり、即ち如く極めて multi-dimensional なものである。

こゝで問題となるのは Gerontology は単に老生体自体の研究のみならず、aging (向老) の過程、即ち成熟 (maturation) の過程と協応して向老の過程を研究するといふことであり、しかもこの aging ということについて大いに考えなければならぬ問題がある。そしてこれは Gerontology にとつてたしかにその門戸を扼する critical な仕事でなければならぬ。それは aging に関して二つの相対立する見解があるといふことである。

a) Aging の過程、すなわち衰頹 (involution) の過程は細胞、組織、器管を含む生体の pathological な変化である。

b) Aging の過程は単に biological な変容である。とする二つの見解で、これらのうち何れが是なりやといふことを解決することが先決問題である。現在の段階に於いては、勿論これに対してまだ決定的な断案はなされていないのであつて、今後の研究にまたねばならぬ。

何はともあれ、Gerontology はその含むあらゆる分野に於て、今後のしかも重大な研究領域とならねばならぬ。最後に、参考までに最近の文献(私の見たもの)を二三あげておく。

(1) Journal of Gerontology (雑誌) 一九四六

(2) Geriatrics (雑誌) 一九四六

(3) Donahue, W. and Tibbitts, C. Planning the Older Years, 1950.

- (4) Vischer, A.L. Seelische Waudlungen Beim alternden Menschen, 1949.
 (5) Hall, st Senescence, 1922.

児童の恐れ(3) 地域別の比較

上田 敏児
 前田 三郎

調査の対象は奈良県の農村と大阪市内の児童男女合計約一一〇〇名。

恐れの対象を動物・天災・人物・想像物・社会的事件・その他に分けて考察すると、都市児童では動物を恐れるものが全体の四〇%を占め、之に次いで天災を恐れるものが約二七%、人物一%、想像物一〇%であった。農山村児童においては、天災が三七%、動物三六%人物および社会的事件は各九%、想像物七%となっている。

このように、都市においても、農山村においても、動物、天災に対する恐れがもっとも著しく、両者を合すると、大体七割を占める児童がこの恐れをあげている。この中で、動物に対する恐れは都市に多くみられ、天災の恐れはあきらかに農山村児童に多い。その他の恐れの対象については、両者に著しい差はみとめられない。

さらに各個の対象別に考察してみると、動物では哺乳類が一ばん恐れられ、爬虫類が之に次いで多く、魚類・鳥類はきわめて少ない。都市児童が多く恐れる動物は蛇・ライオン・犬・虎・ひょう等であり、農山村児童では犬・蛇・きつね・いのしし・ライオン等である。一般に、都市では動物園でみられる猛獣を恐れ、農山村では日常生活に身近な動物が多く恐れられるようである。

天災では火事・地震が両地域とも多く恐れられ、前者は殊に農山村児童に著しい。台風が第三位を占め、雷への恐れは僅かである。

社会的事件の中では戦争への恐れが断然他を押し、人物では泥棒が両地域ともに首位を占め、父母・人さらい等がそれに次いでいる。想像物ではお化け・人魂等、其他では病氣・死等が主たる恐れとしてあげられている。これらの恐れの対象については地域差は殆んどみとめられない。

次に恐れの対象を發達的に考察すると、天災の恐れが学年がすすむにつれて大体増加の傾向があり、動物の恐れはその逆の傾向がみとめられる。このような傾向は殊に都市児童においてあきらかである。社会的事件の恐れは二年生では両地域ともに皆無であり、三・四・五年ではきわめて僅かにみとめられ、六年では急激に増加する。人物の恐れ、想像物に対する恐れも大体高学年で減少するようであって、その減り方は都市の方が比較的大きい。このように、全般的發達傾向も地域に差をみとめることができない。

恐れの原因は、都市児童においても農山村児童においても、身体の障害・生命の危険・喪失という理由が著しく多く、何れにおいても合計六割余を占めている。この中で都市においては身体の障害が三六%を占めて首位、農山村においては喪失の理由が二九%で首位を占めている。これら三大理由に次ぐものは対象の特異な活動によるもの、視覚的理由等であるが、地域差はない。

児童の美の概念について(二)

堀 端 孝 治

先きの日本心理学会(本年五月三日)において第一回の発表しましたのは、一般普通児童について十二項目による質問を実施してそれによって得た結果を報告したものである。その質問形式は次の如し、

- 1、あなたのお母さんを私によく分るように話して下さい。
- 2、又お父さんの事。
- 3、あなた自身のこ

と。4、あなたのお母さんは美しいですか、どんなところが美しいですか。5、お父さんは。6、あなたは。7もしあなたが魔法を使うことが出来て世界中で一番美しい女の人になるとすればどんな女の人になりますか。8、世界一美しい男の人になるとすればどんな男の人になりますか。9、もしあなたが魔法を使うことが出来て世界中で一番みにくい女の人になるとすればどんな女の人になりますか。10、世界中で一番醜い男になるとすればどんな男になりますか。11、あなたは反逆に美しい子と醜い子とどちらを選びますか。12、もしあなたが魔法を使うことが出来て今好きな友達をもつとすればその友達はどんな人ですか。

今回においては普通児と特異児(不良児)との美の概念形成において大きな細があるか、という問題を取り挙げてみたのである。又視覚作用を失った児童について前者との間にどんな差があるか研究してみた。

その結果、特異児の美の概念には權威というものが強く結びついてをり、社会的成熟が早いために美しい女の人として女優を多く挙げていた。少年院に入る前に親切にしてくれた人々も多くあげている。十一歳以後になると人格概念、道德概念が美の概念に入ってくる。盲児についてみると感覺的観念的に美の概念が形成されてきている様である。醜い人として他の児童と同じく乏食、氣狂いをあげ、年齢が加わるにつれ、人格問題が美の概念に強調されてきている。

シンポジウム(1) 小保内虎夫司会

視空間の場・視空間のトロポジ

小保内 虎夫
 阿部 孫四郎

これまで同心円の対比は、第一に表面色 Surface color のみについ行われ、面色 Film color については

実験されなかった。また第二に刺戟の連続的变化を手掛とする操作は工夫されずに比較刺戟が機械的に与えられた。

図の描かれる白い紙は曲者で、この表面色のもつ特異な力が、contrastの本来の力動性を凝固させ、おおい隠してはいないとはいえない。わたくしはセロファンに描いた図をガラス板に挿んで机に立て、これを通して背後の白いスクリーンを見させる方法によって、面色についての実験をやった。同心円は半径二〇耗、一五耗、一〇耗、五耗の二つずつの組合せで、比較刺戟はそれぞれその中の単一の円で、観察距離を調整法によって変化させ、標準刺戟としての同心円は観察距離が常に五〇耗である。この際両眼は共に被験者の眼の高さに置かれ、両方は同時に自由に観察され、一方を凝視しつづけるのではない。また机の表面とガラス板の脚とが被験者の眼にさらされないように、被験者の眼の前に板の仕切が立ててある。これは大きな恒常 size-constancy を与えて、これの起らぬ状態で、刺戟を非恒常な、透視的な見えに於て、被験者に現象せしめる為にとられた措置である。この方法によれば、すでに明るい部屋の中で恒常現象を崩潰せしめることができるが、それは次の理由にもとづく。元来恒常現象は傍にある物とその物との間に作られるすがた Gestalt が一定のものにもとづく。ここに二つのものがあるとき、それぞれの傍にあって、そのひとつひとつと特異な姿を作るべき、その傍のものが、互に異なるものであったならば、恒常現象は崩潰する——Robert Ogden はこのことを「質の異なる空間では恒常現象が崩潰する」といっている。

尚セロファンおよびガラス面が光らないように照明は刺戟の背後からあたえられる。こうして恒常現象を崩潰させるような条件のもとに、面色について同心円対比の実験をやる。これが基本実験であるが、そこにすでに驚くべき事実が現れた。

(1)、ほとんどすべての被験者(五名中四名)は常に對比は類化の向きに現れ、外円は過小視され、内円は過大視される。これは面色実験の表面色実験に対する特異性というべきである。

(2)、恒常現象がくずれて透視面的遠近法の見え方になっているこの事態にもとづいて推算すると、外円は類化によって内円よりも少く見え、内円もまた類化によって外円よりも大きく見えている。つまり物理的に大(小)なるものが物理的に小(大)なるものよりも、現象的には小(大)である。この驚くべき矛盾は Ogden の空間の異質性を手がかりにしていると、この量的矛盾は空間の質的相違にもとづくものだから、正に空間のトポロジ性を示すといえる。

シンボリアム (2)

形の場のヴェクトル量

横 瀬 善 正

Köhler の知覚対象の電流説の仮設に基き、視覚図形の種々なる箇所における場の方向の差異を吟味する目的を以て、それ自体としては極めて弱き力しかもたず、従ってその定位も不安定な小点を図形に接近して提示すると、それぞれの図形の固有結構の影響をうけて、投入せる箇所の場所的相違によって、小点が種々なる方向にずれる(変位する)ことを実験的に確かめることが出来る。而して、小点の変位の最大の方向とその大きさ μ を、図形からの距離、図形の大きさ、輪廓図形の内外の種々なる箇所等につき詳細に調べて見た。

其等の結果によれば、図形の近くに投入した小点のずれ(変位)の最大の方向は、先きに筆者の報告した「形の場強を算出する理論式」に依り求めた等強線に大体直交すること。及び、小点の変位の大きさは場強の勾配の急なところ程変位量が大きい事等を明らかにすることが出来た。

この実験的事実は、図形の近くに投入した小点のずれと云う心理的現象が、図形の心理物理的領域に於いて醸し出す力の場——従ってヴェクトル場として考へねばならぬ——に直接関連のあることを予想することが可能になって来た。知覚に於けるヴェクトル場の構想は既に L.F. Brown や W.D. Orbison 又吾国では小笠原氏等により仮想されている。然し、それ等は未だ大まかな外廓を示した過ぎない。肝心なことは、ヴェクトル場の定量化と云うことであらう。

そこで、筆者は吾々の実験結果に基き、種々なる形の周りの任意の点に於けるヴェクトル量を求める理論式を構成して見た。その原理は任意の点に於ける場強(MP)を分ヴェクトルとしてヴェクトル解析に於ける平行四辺形の法則により、その合成ヴェクトル(V)を求めるわけである(理論式は省略)

この様にして構成した方程式により任意の形の任意の位置に於ける場の力の向き及び大きさを求めることが可能となった。それに基づき、任意の図形の近くに置かれた任意の大きさの小点のずれの方向と大きさを単に方程式からの計算により求めることが可能となった。斯くして、小点のずれの心理学的実験結果と、理論式からの計算による予測値とを、種々なる刺戟布置条件につき比較検討して見た結果、実験値と予測値とのカーブの性質が本質的に極めてよく一致することを検証することが出来た。斯くして、形のヴェクトル場の構想が実証されたのである。

更にこの理論式の展開により、例へば従来の多くの幾何光学的錯視や、図形残効(Figural After-effect)に於ける distance paradox 現象等の解明の端緒が開かれたことを附言して置くこととする。

錯視と図形残効

盛 永 四 郎

一、一つの円を持続視し、そのあとにそれと同心的な位置にそれより小さな円を呈示すると、この小円は持続視のない場合よりも小さく見える。しかるに大小の両円を同時に同心的に呈示すると、小円は大きく見える。前者はいわゆる残効による偏位であり、後者は通常の錯視である。両者の偏位の方向は、一は小なる方向へ、他は大なる方向へと正に正反対である。角の錯視は一見残効による偏位と同じ傾向を示すように見えるが、これもやはり正反対の偏位による現象と見なすことができる。要するに、これらの錯視の場合は何れも関係し合う図形の線が互に近づいて現われる如き現象を呈し、残効は後の図形の線をしりぞける或は引きはなす如き結果を呈している。Köhler や Wallach は彼等の図形電流説に基いて、視覚的距離の大小の度は皮質対件間の図形電流によって作られる機能的相互関係の強度に対応するという公理を以て残効による偏位を説明しているのであるが、同時的知覚においては、大なる電気抵抗を残した場所には逆に強い電流が流れていた筈であるから、電流による相互関係の強さは残効の事態とは逆であるべきで、従ってこの場合は近づいて見えることとなる。このように電流説によれば残効と同時知覚における普通の錯視とは反対の結果を呈すべきであり、従って電流説により残効と錯視に見られる反対の現象は一応一元的に説明され得ることとなる。

錯視と残効とは果して常に反対の関係にあるか否かを もっと詳細に実験的に検証するために、Müller-Lyer 錯視図形を用い、図形の内外のいろいろな位置におかれた二つの点の間の距離の大小を、残効の場合と同時的知

覚の場合とについて比較して見たところ、大体において常にほど反対の結果を得た。

二、視野中の二点や二線の距離が大きく見えたり小さく見えたりすることは、Köhler の如く電流による相互関係の強度に対応させるにしろ、或は吸引力や反撥力の如きを仮定するにしろ、それらの程度は単純に距離と比例するというようなものではないようである。同心円の錯視において両円の大きさの関係が約三対二の時に最大の偏位量を示すことが知られているし、大谷氏の研究によれば引く場合(過小視)とはなれる場合(過大視)とが交互に波状的に現われることが示されている。

三、錯視や残効の実験の多くにおいて、図形或は図形間の距離の大小を比較し、その結果から図形の線が互に近づいたりはなれたりするというように、その位置をそれらを含む空間上の一方に移動させて考え、そこから図形や距離の大小の知覚を理解しようとするやり方が行われているが、大小の知覚がすべてかゝる空間的な一方における移動ということに帰せられるか否かは疑問である。

空間的な一方における移動の他に、大小、高低、傾斜などの如き知覚においては何らかの別な水準からの別な dimension における移動ということがあり得るようになっている。多くの錯視はかゝる別な方向における移動に關係しているのではなからうかと考えられる。大山氏の残効に関する実験結果について見てもこのように考えられる。

疲労と表象像の關係について

中 村 弘

一八才より二五才までの男女大学生(男一九四名、女子四六名、計二三〇名)を被験者として、閉眼してから一分間に眼前に浮ぶ模様注目させ又記憶させて、後

で色彩をつけて白紙に模様とその連続的变化を出来得る限り正確に記入させた。記録の時間は午前九時、一時、午後一時、三時、五時、九時に夫々させた。(なお他の疲労視象との關係を見る為に打点検査、クレペリン加算検査、フクツッカー値測定、P・G・R測定を同時にした。)

上述の方法によって記録された表象像は種々雑多であるが、此を本研究では次の諸見地から眺めた。

(1) 表象像の模様の種類——模様は a、大きな円図形 b、小さい円図形。c、線図形。d、渦巻図形。e、放射図形。f、格子図形。g、混合図形。h、其他となっている。

(2) 出現頻度——此等の諸図形は夫々 a 七%。b 一四%。c 一五%。d 一九%。e 六%。f 二〇%。g 一三%。h 四%となり、あとは表象像を見ない者四%となっている。

(3) 一分間の出現像数——多い者にあつては一五位から少い、者にあつては〇の間に分布している。

(4) 色彩——出現表象像の色彩は黄緑・黄・緑・赤色・青色・桃色・紫色・灰色となつて居て概して此の順序で出現する。そしてそれ等は大部分輝いた色の性質を持っている。

(5) 像の変化——常態時では像は意志的努力の持続と概ね正比例的な關係を持つ、即ち見ようとする意志的努力が大きければ大きい程明確に数多く現われ一つの図形から次の図形までの変化が滑らかである。

(6) 疲労に伴う表象像の変化並びにその性質。

a 出現像の模様は疲労時には大柄な模様となり、黄色、赤色又は暗紫色、灰色が多くなつて来る。

b 疲労時の像の出現数は減少して来て常態時の二分の一になる。しかも何も見えぬと云うものが多くなつて来る。前述の分類で a は八%、b 一〇%、c 一六%

d、二〇%、e 六%、f 六%、g 三%、h 二三%、と

なり見えぬ者は八%に増加する。

c 像の変化は断続的に見える時と見えぬ時が交代して出る。見える時でも像が突発的に出現する。

d 疲労に伴う表象像の変化の特色は打点法による変化クレペリン法による変化と同じ傾向を示すがその一般的特質はクレペリン法の変化に類似しているようである。

上述の研究によって、我々は疲労の影響が、かゝる表象像にも強く現われることを知り得るのである。即ち疲労に伴い表象像の数の減少像の構造の単純化、色彩の豊富さの減少、輝きの消失、変化のためらかさの消失等にそれ等の影響が多いことを知り得るのである。

災害と疲労について

太 城 藤 吉
藤 原 元 一

坑内夫については、被検者九名。

触弁別検査(スピアマン触覚計による右頬上のヒフ空間距離弁別法)、反応時間測定(落下式瞬発反応時間測定法)、フリッカー・テスト(梶原式閃光融合法)、クロナキシー測定(視神経の電氣的閃光法)、ヒフ反射量測定(反応検査時に於ける最大、ヒフ反射量の測定法)、握力検査、運動能検査(サイクルグラフ法を用いて、空間に円を描かせて、図形の崩れを見る)

その結果によると、終日勤務前後で、むしろその機能が良好しているものは握力・反応時間・フリッカー値で、影響のないのは触弁別・サイクルグラフ法による運動能、悪化しているものクロナキシー値・ヒフ反射量となる。

操車転轍工については、被検者一三名。

握力検査、跳躍能検査、柔軟度検査(上体の屈折度を測定)、フリッカー・テスト、反応時間測定、ヒフ抵抗値

測定、ヒフ反射量測定、基電圧測定、クロナキシー測定、サイクルグラフによる運動能検査。

その結果、最も災害の多い夜番に併もその前半シフトに多くの検査について悪化の傾向が見られた。但しこの場合でもフリッカーテスト以上の検査及びサイクルグラフによる運動能検査の如き体力・運動能については、むしろ良好する傾向を示している。

以上の二つの結果から見ると、極めて多い災害の原因として、これらの所謂疲労検査から見た疲労は関係がないか、或は関係ありとせばヒフ抵抗・反射等に見られる情意的緊張の消夫の面であろうと考えられる。特に後者の考方をとると、屢々惹起されしかも何時もその解釈に苦しむ多くの實際災害の例を解くことが出来る。恐らく災害に関係する疲労は、これらの場合に見た如く、感覚能・運動能の如き末梢的機能の悪化としてあるのではなく、中枢的な能力の変化に基き一種のプロッキングとされているのではないかと考えられる。

この考を検討するために最近某セロハン工場女子仕上工での疲労検査の際、ウツ発見法(実験的にウツをつかせ、これをヒフ反射量によって発見する)によって作業の影響を見た処、作業によって工員のウツ発見率は低まり、休憩によって上昇する結果を得た。

自動車運転免許試験についての

一考察

青 木 孝 雄
佐 伯 藤 雄

昭和二十七年七月十七日総理府令第四十号道路交通取締令、第四章、自動車の運転免許、第四十三条によると試験項目は次の二つとなっている。

一、自動車の運転についての身体検査及び技能試験(聴力、視力、弁色力、側面視力、及び遠近知覚力を含む。)

二、自動車及び道路の交通に関する取締法令についての筆記試験。

われわれの目的は、自動車の運転に関する心理的適性の重要性を明かにし、心理検査を、前二項目に附加するところにある。

そこで、内田、クレペリン精神作業検査を、事故運転者のグループ、違反運転者のグループ、無事故運転者のグループと、それらに施行し、その結果を比較する方法をとって出発した。

事故運転者としては、その事故が、自動車の前面に於いてなされ、被害者に重傷、(全治二十日以上)以上死亡にいたる損害を与えたものという規定をもうけ、任意招致したのである。

違反運転者としては、昭和二十六年七月以後、同年十二月までに、二回以上、交通違反によって送致されたものという規定をもうけ、任意招致した。

無事故運転者は、K株式会社の二十七名は、平均経過年数十五年、無事故という線で規定されているが、他の二社の三十八名、七十名は、種々の理由から、最近二カ年間無事故、経過年数五年以上という線で、一応、無事故のものという規定をした。完全な見本では、ないかもしれない。

判定は、国鉄労働科学研究所、相馬氏の数量的な、減点法により、直観的な判定をさけることにした。

結果は、表Iのとおりである。

心理検査の必要性が証明されている。

不合格者の機能分析によると、N(常態指数)の成績不良が目立っている。ついで、目立つのは、E(誤謬率)である。表II。

表IIIに、群別累加曲線を掲げた。精神病者、国鉄優良機関士の曲線は、前掲、相馬氏の手になるものである。

職業に関する興味調査(一)

——職業興味の分化について——

増田幸一
高橋省己

職業興味調査は今までいろいろの形でなされてきた。シニプランガーの如き人間の個性研究を基盤として興味の種類を類別するのは一つの方法であり、ジャイメンの如き職業の類別を基盤として調査をするのも一つの方法である。私どものものは後者の部類に属するが、職業の類別を中学校に於ける職業家庭科で生徒に一応経験せしむべき仕事の分類を利用した。

調査地域として、兵庫県下を七地区に分った。即ち、大都市(人口八五万の神戸市)、中都市(古い都市、人口大体二〇万前後)、小都市(最近新しく市制を施したものの)、農村、山村、漁村、それから何れの領域とも判別つかぬ境界領域の町村、これらの最も代表的な位置にあるものと思う中学一三校、高校五校、各校約一五〇名宛、計約二七〇〇名の調査をなしたが、この発表に用いた資料は一九四九名分である。

(1) 生徒はどんな職業に対して興味を持つ傾向があるか、それは男女別、学年別、地域別により異なるか。(2) 職業に関する興味は家庭の職業、即ち父母の職業とどんな関係があるか。(3) それは生育地、居住地、とどんな関係があるか。(4) それには学校の職業指導はどんな影響を与えているか。(5) 職業に関する見聞に地域差、学校差があるか、それは何が原因しているか。(6) 高校の普通課程と職業課程の生徒の間に差異はみられるか。(7) 希望職業と職業興味とはどんな関係にあるか。(8) 生徒の体験或は見聞と興味とはどんな関係にあるか。(9) 質問に対し「何の事かわからない」と答えたものは如何なる理由によるのであろうか。(10) 実際に選択した職業又は進路と興味調査の結果とはどんな関係にあるか。等

調査は諸否法によったが、結果は

(1) 中学生、高校生はどんな職業に対し興味を持つか
i 中学に於ても高校に於ても、興味の一般的傾向は殆ど変りはない。即ち似たような職業に対し興味を持つ。

ii 男女性別によって異った傾向はあるが、一般的傾向は男子は男子として、女子は女子として同じである。

iii 中学は三年生、高校も三年生がこの一般的傾向を端的に表現している。男女共に同じである。こゝに成長と共に興味の分化が明瞭となり、固定化の傾向があるといえる。

iv 男女に対して何れの年令に於ても対蹠的なものがある。同時に近似しているものがある。

v 中学生と高校生とは、高校生の方が僅かに興味が多方面にわたる傾向を示す。

(2) 家庭の職業と職業興味との関係(図表により説明)

i 家庭の職業の類別は昭和二二年の臨時国勢調査に用いた産業分類表によったが、この相関は必ずしも高いとはいえない。

ii 見本を抽出したが極く僅かなものが特殊な例を示すが、それを除くと各出身家庭によって僅かに興味の差異がある等。

肢体不自由児施設に於ける生活指導

永 丘 智 郎

肢体不自由児施設に於ける生活指導の基礎として児童たちの自己の病気に對する意識の問題を考察して見たいと云う目的のもとに行つた。

この調査は一九五二年二月一日に行つたものである。対象は東京都北多摩郡小平町にある財団法人多摩緑成会整育園児童五四名である。実施は調査票を各クラス毎に

配布して担任教員を通じて回収してもらつた。なんらかの事情によって調査出来なかつた者もいるが調査出来た右の五四名は当時の園としては殆ど全員と見なしてよい。

調査結果は年令別、男女別、病名別にわけて関東学院大学心理学研究室にて集計した。

調査項目その一「自分の病氣の名前を知っていたら書いて下さい」

右に對しては「知っている」三六名、「不完全に知っている」四名、「誤って知っている」二名、「知らない」九名、「記入なし」三名と云う結果が出て来た。

その内容を病類別に見ると股関節結核の一五名中、不完全に知っている三名、誤って知っている二名、知らない三名が一番問題となるようである。外の病氣は膝強直を除けば殆どが「知っている」部類に属している。

調査項目その二「日常することでも最も不便を感じていることはどんなことですか」

右に對する結果としては「歩くこと」一名、「しゃがむこと」九名、「坐ること」六名「別に感じない」五名、「体をまげること」三名、其他(省略)であつた。

調査項目その三「自分が病氣のためにいやな思いをしたことがありますか」

右の結果は「ビッコと云われた」一六名、「石をなげられた」三名、「セムシと云われた」三名、「振りかえつて見られた」三名、「変な目で見られた」二名、「手術をさせられた」二名、「記入なし」一五名、其他(省略)であつた。

右の外、「自分は将来世の中に出て働けるような身体になると思いますか」「こんな遊びがしたいと思つたらあげて下さい」その他について調査を行ったが、結果は省略する。

職業相談実施後における 被相談者の状況調査について

渡 辺 正
島 田 尚 志

調査の目的

大阪府職業適性相談所に於いて個別職業相談を受けた被相談者のその後の就職状況及び就業状況を確認すると共に、実施した職業適性検査並びに職業相談に関する被相談者の意見を蒐集することによって検査相談実施方法並びに相談効果の検討をするためにこの調査は本月五月以来継続的に実施されている。

調査の総括として我々は凡そ次の様な事実を指摘し得るものと考ええる。

- (1) 職業相談実施後三七%の人が新らしく就職しそして二四%の人が自ら適職であると判断される職業に就いていること。
- (2) 自ら不適職に就職したと判断した者が抱いている不適理由についてはこの小さな資料から早急に結論することは出来ないが性格、適性、能力、体力等大個人人の職業適性の範囲に属せしめ得ると考えられる条件の不適応を訴えているものが比較的多く認められる。
- (3) 自ら適職であると判断している者と不適職であると判断している者の職業に対する意見及び感想は前者が積極的肯定的な反応を多く示すのに対して後者は消極的否定的な態度を示すものが多く両者の間には比較的顕著な相異を認め得ること。
- (4) 我々が行った職業相談に対する意見及び感想は總括的に謂ってその意義が認められている様である。又職業適性検査については積極的な意見が殆んどなくむしろ逆に小敷ながら懐疑的、批判的な意見が示されたことは注意されなければならないと思う。

(5) 我々の相談の結果として導き出される個々の被相談者の適職の範囲は我々が一方的に推論したものでなく被相談者が我々と相談することによって自ら推論し或は少くともそれは被相談者がよき了解のもとに一致した意見として推論されたものである。この様にして為された結論が被相談者の職業適性に対して比較的大きな意義を有するものであることが認められること。

疲労測定法としてのフリッカー 値測定法と色名呼称検査法との 比較研究

豊 原 恒 男

本研究の目的

一、筆者が国鉄職員の疲労調査の際、労研式FI二型のフリッカー測定器を使用した所、視野の明るさを恒常に保つのに苦労した事と、被験者がフリッカー融合閾の判断に甚だ不安定性を示した事とによって、この方法に代る何か信頼できる疲労測定法を見出そうと考へ、古く使用され、又現今、運尾氏が良好な結果を示した色名呼称検査法を取上げ、フリッカー法と比べて見る事とした。

二、近年、大島正光氏が打叩とフリッカーとを用い疲労経過を考察した結果に、疲労の微弱なる時期には両検査成績の変化方向が不一致であるが、疲労が著明になるに従い、両者の変化方向が一致してくる事実が述べられて居る事は、疲労的事象の解明上、重要な一項と考へられるので、フリッカーと色名呼称とは如何なる関係が示されるかを実験的に考察しようと思ひ、比較することにした。

本研究の方法

フリッカーの測定は、労研式FI II型使用、各測定時刻には視野の明るさは計器示度二〇〇 μ v を保持、刺戟

変化の方向は、フリッカーの現われている状態から消失の方向と、その逆とを交互に五回ずつとし、資料としては後者の変化系列の場合の五個の値の平均値を用いた。色名呼称法は、赤青黄緑黒の五種の色紙(縦二センチメートル横一センチメートル)を等間隔に、デタラメに(但し同色が並ばぬようにする)、十行十列に白紙上に貼ったもの二種類を作り、毎測定時刻に、三〇秒間隔で二枚ともよむ。その誤と所要時間をとり平均値を求め。毎測定時刻には、二行だけウォーミングアップの意味で読んでから本検査に移る。(本研究前に三日で十回練習をしておく)。

被験者は筆者一名、測定助手は妻。実験期間は昭和二七年七月及び八月。

第一実験は、一日中に時刻の経過に応じて蓄積的になる疲労状況と関連させて考察する。

第二実験は、色々な日に、色々な心身負荷を五分間与え、その前後におけるフリッカー値と色名呼称成績とを比較考察する。

研究結果

第一実験結果

(A) 特に終日、心身の負荷が少い状態にした日(家族と雑談や、庭散步程度)においては、フリッカー値と色名呼称時間との時刻的変動経過の互の関係は、平行的でなく、喰い違ひが大きい。

(B) 時々、心身の負荷を与えたり、或は、二〇時間起き続けたり、睡眠時間を極少にしたり、深夜に起床したりするような異常負荷を加えたりした実験日の場合には、フリッカー値と色名呼称時間との、時刻的変動は非常に平行的な関係を示す。

右(A)(B)の結果から、心身に作業負荷がやや明瞭な事象での疲労的事象を探求する一方策としては、色名呼称法はフリッカー法の代用になりそうに思われる。第二実験結果。

異った日、異った時刻に、ある時は抹消、ある時は身体運動（重量あげ、駆足し、ボンブ漕ぎ等）、又ある時は暗算を夫々五分間ずつ課して、その前後のフリッカー値と色名呼称時間の変化を調べた所が、色名呼称の方が敏感に変化を示す結果が示された。即ち急性的な疲労的事象に対しては、フリッカーは大した変動が示されず、色名呼称時間には著明な延長が認められた。

以上、第一、第二実験を総括して見ると、
(1) 心身負荷の稍大なる悪条件下の場合には、フリッカー法で知りうる程度の疲労的事象の概要は、色名呼称法でも大体知りうる。

(2) 然し、色名呼称が、急性の疲労的事態に敏感であるので、現場での調査の場合には、被験者が測定直前にとのような状態であったかを検討し、測定条件の調整を充分考慮する必要がある。

(3) 悪条件の少い状況では、フリッカーの変動と色名呼称時間の変動とが平行的でなく、悪条件が強化されると平行的になるといふ事は、前述大島氏の事実が一層確認された事になるが、疲労的事象の解義の上の一つの参考となるものと思う。

災害頻発性発見の一方法

岸 戸 護

一、災害が産業能率を低下させる点において、亦従業員保護の立場から軽視出来ない事は云う迄もない。吾々は人間擁護と生産維持の立場から災害発生の原因を探り、その対策を立てる事を目的として災害回数比較的多い従業員と対象として種々の実験、調査を試みた。その一実験の概要である。

二、吾々の産業界には最近しきりに災害頻発者と云う言葉や災害頻発性なる言葉が用いられているが、此の二つの言葉は厳密な区別をしなければならない。災害頻発

者と云う場合は、現実に頻繁に災害を引起した処の従業員を意味し、災害頻発性と云う場合は、その可能性を問題にしているのである。凡そ災害が現実に引起される為には、一方において災害頻発性——精神的行動的に何等かの欠陥をもっている人間と、他方において此れ等欠陥暴露に対して好条件を提供する人間的諸条件——機械設備の不備不完全、労働環境労働条件の不良等が存在しなければならぬ。此れ等両条件の累加され併存する処に災害は生起し易いのである。従って単に何れか一方の条件が存在するからと云って直ちに災害が起るとは限らない。従って災害頻発者と云う言葉によって呼ばれていない人達の中には災害頻発的傾向をもった人間が多い事は事実であるが、かゝる傾向の少い人達も含まれている。

同様に無災害者の中にも頻発性をもっている若干の人達もいるのである。此の意味において吾々は単に災害頻発者を問題にするのではなく災害頻発性或は災害自体を問題にしなければならない。たゞ実験の手がかりはかゝる災害頻発者の中に求めるのが便宜であると云うにすぎない。

三、実験は二六年四月—九月にわたって行われた。被験者は二五名である。方法は尖光融合閾法によって、連続一〇回上昇(S₁)及び下降(S₂)の値をとり比較する。

四、結果及び考察の概要、(定位指数を算定し、その安定度確実度及び疲労性によって判定する)災害の人的条件として下記三つの Type に分類した。

a、疲労型、疲労度の高いものでその為災害を引起すと見られるもの、即ち疲労と心的飽和現象との重なる頃に災害を引起し易いもの、一般に一〇時と午後三時に災害の Peak のあるものもその現れである。

b、定位、不確型、人間行動は、対象に対する反応行動であるから、対象の認知の正確と迅速とが必要を条件となる。此の点において何等かの欠陥をもつもの、或

は劣るものが本質的に災害性をもつ事は理解出来る。吾々は此の対象認知の程度を表すものとして定位指数(O・Q)を用いる。

c、定位不安定型 O・Q 曲線から判定するもので曲線が複雑で変化の多いものは、定位が不安定である事を意味している。即ち対象認知の不安定を示すもので、それ丈反応行動は不正確不安定とならざるを得ない。此処に災害の原因があると云えるのであろう。

僻村における職業指導の問題

——特に職業選択の態度について——

熊 倉 弘

問題 文部統計(昭和三六年度)によつて、義務教育を終つて高等学校に進学した者と進学しない者とを比較すると、高校進学者は卒業生総数の四三・八%で、就職者は四六・三%、無職者は八・五%、計五四・八%の者が進学しないことになっている。そして就職者のうち農林水産業に従事する者はその五〇%となっている。

これを岩手県についてみても、進学者は卒業生徒総数の四一・七%、不進学者はその五七・八%である。そしてそのうち農林水産従事者は六三・五%の高率を示している。

ここで問題になるものは、農林水産業従事者というのは、自家就職のすなわち家事従事の形態をとっているという事で、特に農村漁村にあってはほとんど全部といつても過言でない状態である。全国的にやかましく叫ばれている農村の二、三男対策の問題も、これに連つている問題であると思う。

これを職業指導の見地からすると、農村漁村におけるかかる不進学者は家事の手伝いとして、勉学の機会から閉め出されてしまわなければならない必然性があるかどうかを一応検討されなければならないと考える。

筆者は特に岩手県でも僻地といわれる県北の二郡について職業選択の態度について調査を試みたものであつて、本報告はその第一報である。

調査 調査対象は岩手県の北部の二戸郡と九戸郡の僻村の中学校一三校。調査方法は当該中学校の教員に質問紙により回答を求めた。質問項目は、(1)親はわが子の将来の職業選択に対してどのような態度をとっているか。(2)生徒は自己の将来の職業選択に対してどのような態度であるか。(3)以上の二項目に対する教師の意見。

調査時期は昭和二十七年七月下旬より八月中旬。

結果 まず中学校卒業後の進路状況をみると、不進学者が卒業生総数の約七〇—八〇%を占めていること。第二表から、農林水産従事者として、不進学者の約五〇—七〇%の者が労働に従事していることがわかる。この点には特に注目されるべきことであつて、こういう結果を生ずる有力な原因の一つとして、親のわが子の職業選択の態度が考えられる。

親がわが子の職業選択に対する態度を規定する主観的条件と考えられる農民の性情を分析すると、(1)無関心、(2)因習的態度、(3)日和見的態度があげられる。客観的条件としては、(4)経済事情、(5)労働力不足ということである。

以上の五つが職業選択の態度に大きく且つ有力に影響していると考えられる。

これらは農村社会の前近代的な性格から来るもので、家族的身分と主従的身分とが合体した封建的家族主義の結果、個人は家という一つの殻の中に閉じこもっていることからすべてに消極的になつていゝことが、その原因である。

生徒自身の職業選択の態度をみても、極めて消極的であるか、無関心であるか、依頼心が強かつたりして、積極性を示すもの日極く少数にすぎない。これは農村における市民社会の未発達ということから来ることであると

考えられる。親子の権力関係、上下支配の関係によつて義理と人情との関係の中に閉じこもつて、子供は親の仰せのままにならうとする傾向が強くなつていゝことが原因となつていゝのではないであらうか。

要するに、マックス・ウェバー (Max Weber) の指摘した如く、農村社会は有情的、伝統的な支配の下に導かれていゝので、個人の利害はすべて退けられ、家の權威の前に個人生活をぎせいにして暮すことが理想の生活としていゝことに基因するものと考えられる。

考課表に現われるハロー効果の分析

安藤 端 夫

一、問題

いわゆる評定法におけるバイアスの因子の一つとして、ハロー効果が存在することは、衆知の事実であるが、この効果の定量的な検出方法には、未だ適切なものが見当らない。この研究は、ハロー効果の測定法について一つの示唆を提起することを目的とする。

二、資料

昭和二十六年九月、某庁勤務の一般職員六五九名(以下X群といふ)、同監督的職員一六二名(以下Y群といふ)につき、人事院規則一〇—二に基づいて実施された考課表の成績を計量的に処理したものである。

三、処理の方法

(1)、X群およびY群の職員は、それぞれ別個の十二の各特性について、a、b、c、dの四段階に評価され、更に、この各特性についての分析的評定に拘束されることなく、その勤務実績を別個に総合評価された。

(2)、X群、Y群の別に各特性相互間の評定の Inter-

Correlation を計算した。

なお、こゝで適用された特性は、次の通りである。

X群……「1、仕事の正確さ」、「2、責任感」、「3、

勤勉」、「4、研究心」、「5、積立性」、「6、知識」、「7、企画力」、「8、理解力」、「9、判断力」、「10、報告のし方」、「11、規律」、「12、協調性」。

Y群……「1、企画力」、「2、責任感」、「3、知識」、「4、指導力」、「5、判断力」、「6、研究心」、「7、検閲力」、「8、仕事の正確さ」、「9、交渉力」、「10、積極性」、「11、仕事の割当能力」、「12、勤勉」。

(3)、前項の Inter-Correlation のマトリックスについて、重因子分析を行い、両群とも第三因子まで検出した。

(4)、別に、各特性についての分析的評定と勤務実績の総合評価との相関係数を算出した。

四、結果の解釈

(1)、総合評価との相関の高い特性の内容、その因子負荷量及び各因子行列の組成を吟味し、X群については、第II因子を、Y群については、第I因子をそれぞれハロー因子と解釈した。

この解釈の根柢をなす主たる事実は、次の三点である。

(a) ハローと推定される因子についての各特性の因子負荷量は、おゝむね、高からず、且つ低からざる値を示している。

(b) したがつて、その因子負荷量の変域が小である。

(c) 総合評価との相関の顕著な特性が、他の因子における負荷量の著しく優勢な特性の中には見出されな

い。

(2)、前項の二つの因子について、それぞれ $\sum X_i^2 / \sum Y_i^2$ を計算し、X群については、〇・〇七六、Y群については〇・二四五を得た。

(3)これらの数値は、あらゆる因子の機能の総和をひとした場合におけるハロー因子の効果の範囲を示すものと解し得るであろうから、因子の解釈を誤らない限りにおいて、ハロー効果の間接測定量の一つと見做し得る。

類型についての考察

松坂 未三

被験者 小学校六年生男子三〇名。

I ロールシャハテスト

一〇枚の無意味な図形を一枚づつ被験者に示してそれから有意的解釈を求めんとする。

解釈数は被験者に依って著しい差がある。即或る被験者は図形を解釈するに当って図形中の極めて小部分と雖も既有的表象と僅でも一致した場合に解釈が下されるので、時には他の人々には殆ど考えられない様な解釈をする場合があり、これが臨床診断に用いられる所以であるとも考えられる。被験者一、四、一〇、一二等にその例を見る。之に反して或る被験者に於ては既有的表象と確実に対応する場合のみ解釈を下している。従って解釈数は一般に少いのであるが、然し解釈された内容は一般妥当性を有し、他の被験者にも共通な解釈が多い。而してこの種の被験者は図形を全体として解釈する傾向が強い様である。被験者一五、二三、二八等にその例を見る。前者はイエンスの類型的分類の「J」型に近く、後者は「L」型に近いと考えられる。

II エクスネルの渦巻廻転による運動残像実験。

白黒より成る渦巻の図板を一分間に七〇回の割合で廻転させて被験者はそれを凝視する。廻転の方向は遠心的及求心的の両方向とし凝視時間は一五秒とし廻転休止後凝視を続け、その残像の持続する時間を測定する。

各被験者の残像持続時間を見ると個人に依って相当の差が見られる。外界と最も強く統合する「I」型に於ては主観と客観との緊密性の故に廻転運動に影響される割合が大きく、従って残像持続時間も長い事が予想される。

III 色の残像実験。

残像実験装置を用いて赤色ガラスを電光を通じて一五秒間凝視し薄暗くした背景に投射させてその残像を見、

その持続時間を測定する。全被験者を通じて唯一回丈の残像に終わった者はなく、少くとも三回、多くて八回の断続を示している。

以上Rテスト、E実験、C実験は互に積極的關係にある。

RとEの相関 $\rho = 0.523$ RとCの相関 $\rho = 0.488$

N検査に於ける Group Effect 及び Audience Effect の測定

浅井 憲
松原 慶太郎

実験は予備実験と本実験に分ち、先づ予備実験に於て比較的多数の被験者(中学三年生男一四一名女七八名)について個人別検査を行い、その結果に基づいて男女各六〇名を抽出した上で実験目的に従って Grouping をした。抽出の基準は Deviation の少い集団を得ることを目的として平均値前後より必要数を選んだ。この如き実験計画をたてた理由は、第一に実験条件上等質的小集団を多数必要とするためと、第二に極度に成績の勝れたものと劣ったものは特殊な例であって、実験目的以外の個人的要因がより多く影響し易く、この如き一般的実験には棄却しておく方が望ましい事、第三に本実験に際し実験予定者の欠席のあった場合すぐ Grouping の変更等の操作を容易にしておく為などである。

本実験は予備実験後約四八時間後に行った。Vpには検査の意図を知らせない。実験当日も Vp により条件の異なるのを実験前に察知するのを防止するため細心の注意を払い、この意図は完全に成功したと思われる。

本実験に参加した人数は男五〇名、女五二名であり、この Vp を実験条件により次の如き四つの実験群に分類した。各群の予備実験成績の A・M 及び S・D は殆んど同一にしている。

(1) Control Group (男一三名、女一四名)。Vp. 一名に対し VI. 一名のみで個人検査を行う。

(2) Audience Effect Group (男一〇名、女一一名) Vp. 一名に対し VI. 一名。Audience を一〇名にける。

(3) Group Effect Group (男女三名づつ計六名づつ)の組を五組計三〇名) Vp. 六名、VI. 一名づつ一斉検査を行う。

(4) Group & Audience Effect Group (四組計二四名) Group E. G. 下同一の条件で Audience を一〇名にける。

結果 増加率は実験値を予備実験値で除した商に一〇〇を乗じて示している。この結果によれば Control G. に対し最も差の大きいものは Group & Aud. G. であり以下 Group, Audience の順である。しかし Group & Aud. 々 Group との差は有意な結果を得られなかった。しかし、男と女では結果の分散が異なり、男子のみを検定した結果は全体よりも有意な差を示している。

また成績の上位群(+1S.D.以上)、中位群(±1S.D.)、下位群(-1S.D.以下)を比較した結果によれば平均して上位の者程増加率が少く下位の者程多い。但しこれは個人検査と集団検査とに共通した現象であって、その間に有意な差はない。また Sherif 等は Audience Effect に於て Personality による偏差が大きく、その平均に相殺される傾向のあることを述べているが、この実験では増加率の分散はほとんど同様かまたは減少しているのが見られた。

作業曲線型の一一致度(横加算)

縦加算の場合)

板倉 善高

先づ正常N、上昇U、下降D、突出O、陥没I平坦Sの各型の出現の割合は第一回目の横書ではI-I-Iの一四

%が最も多く、以下I—O、N—N、D—I、I—N、I—Sの順で、逆にU—Dは皆無、N—U、D—U、O—U、S—U、N—D、O—D、S—Dは各一回のみである。

第二回目の縦書では、やはりI—Iの一四%が最も多く、以下I—O、N—N、I—S、D—I、N—O、N—Sの順で、逆にN—D、U—D、O—D、S—Dは皆無、U—D、S—U、U—O、U—Sは何れも一回に過ぎない。

〔曲線型の一致度〕 最も高いのはN—Nの九一%、次はS—Sの七七%、D—Oの六九%、N—S、D—Iがこれに次いでいる。

一致度の低いのはI—Nの一八%で次はN—I、S—I、O—Iの順である。

更に休前のみでは、高いのはIの七八%、次はN、D、O、Sで、Uは最も一致しない。これは第二回目は学習された後なので、初頭量突出する場面が多い結果と見られる。

又休後のみでは高いのはOの八五%次はU、S、I、Nの順で、Dは最も低い。ここでN型の低いのは注目に値する。

なお誤脱の場合は作業量CD級に多く、Pの異常型は殆ど一致している。

即ち一般にPは勿論、N型及OI等の作業のむらを示す型は第一回目と三ヵ月後の第二回目と殆ど一致していると言ふことができる。

〔曲線型の変化〕 以上から如何なる曲線型は一致の傾向あり、如何なる型は一致し難いか概ね判明したのであるが次に一致しないとすれば、如何なる型に変化してゆくかを調べよう。然しここで6×6=36型の主なもの先づ第一回目にN—Nを示した場合についてみよう。

最も集中的に変化してゆく型はN—S、次はS—S、I—S即ちS（平坦型）へ移る傾向が多分にある。然し

これを第一回目が加算で第二回目が例えばカナ書換の如く作業が筋肉的に複雑化してくると、二回目と雖もU型即ち学習曲線を示してくる。なおこの外I—Iも現れているが、これは女子の生理期間の結果である。

次に第一回目が、I—Iの場合は、I—Oへの変化が最も多く、次はO—O、D—Iの順である。又加算書換の場合はI—S、O—I、I—Oの順である。即ちI・O・D等作業のむらを示す型へ変化する傾向が強い。要するに曲線型不一致の原因は主として学習効果、心身状態乃至作業態度の変化に因ることが窺われる。

診断テストとしてのウエクス

ラーヴェルビュー法（第一報告）

上 英 治
星 野 命

分裂症四〇例につき検討する

I 分裂症の患者にみられるウエクスラー・ヴェルビュー改訂法の所見。

- (1) 言語テストは動作テストよりもよい成績を示す。
- (2) 絵の配列テストと一般理解との成績の和は常識問題と積木のデザインとの成績の和よりも低い値を示す。
- (3) 組み合わせの成績にしらべると積木のデザインの成績は非常に良好である。
- (4) 各テスト間の分散度、即ちscattergramの動揺の大きさが顕著である。
- (5) 共通点の問題は割合に高い値を示し、ウエクスラーの述べる所と違っているが、この改訂版におけるこのテストが、はたして、原法のねらいとした極念形成をつかみえているかどうか疑問である。

破瓜病型と妄想型とを類別するウエクスラー・ヴェルビュー改訂法の所見

(1) 一般理解（判断力）の欠陥は妄想型では他の型にくらべて、それ程おとっていない、むしろ言葉の理解と同じように一番高い値を示している。

(2) 常識問題では、破瓜病型の方が妄想型より高い値を示す。

(3) どちらの型にも、注意集中の欠陥にもとづいて、絵の完成、算術推理、記号合わせの落ち込みがあり、又計画能力の欠陥を証するものとして、絵の配列に落ち込みが示される。このことは、更にロボトミー施行前の減退した患者の場合に顕著にみられたが、破瓜病型では、絵の完成は少しく例外となつて割に高い値が示される。

(4) 妄想型で記号合わせにめだつて落ちこむものが多いのはこれからの患者にみられる depressive 状態を示すものとみてもよいであろう。

III 知能減退率の問題に関して。

ウエクスラー原法の特徴の一つは、たしかにこの知能減退率の問題である。われわれはこれを扱う際、特に妄想型の患者に negative なマイナス・パーセントが生じてくるのが、しばしばあるのを見てとつた。このことからいく多の疑問につき当るのである。すなわちはたしてこの持久する機能、減退する機能と分けられたサブ・テストは、その実証性をもつものであろうか。この改訂版における減退率の標準化は妥当なものといえるであろうか。減退機能の方が持久機能より高くなるのはどのような理由からであろうか。これらの疑問を解決すべく、分裂症の患者によってえられた減退率を検討し、総合的に研究をすすめてみたのであるが、この点に関しては、なお例数がすくなく、われわれの結果だけからは何とも云えない。

再検査法によるSCT

高橋 雅春
白井 九一

SCTの reliability の測定を目的とする。被験者は奈良少年刑務所、特別少年院の収容男子少年一〇〇名であり、年齢平均一九才三月、偏差八、四月、知能指数B式IQ一〇二、偏差一四・二である。実施方法は第一回は入所時、第二回は四ヶ月をへて実施した。

四〇項目の反応を社会適応性あるものと不適応のものに分類して相関をとった。最初のテスト時の不適応反応個数と retest 時の不適応項目の相関係数は、・九一で高い一致度を示す。

尙項目毎に適応、不適応反応の変化について tetrach-
olic correlation をとった処、・五以上のものは四〇項目中三四項目で相当高い一致度を示した。

次に分類を単に表面的一致度において、変化をみた処五〇%以上の一致を示す項目は一四項目、三〇%以下の一致度を示すものは五項目である。

これらを参照としてSCTの問題自身の改訂が考えられるが、この実験の結果はSCTが相当高い reliability をもつことを示した。(尤も之には、被験者の環境が流動性のない外界から隔離されたものであることの考慮は言うまでもない。)

幼児精神作業検査の試み(一)

岡山 超
村山 順子

クレペリン、内田精神作業検査が診断用として用いられているが、この検査は、幼児に対して用いる事は困難であるため、簡単な方法で診断に用いられる様な幼児の

ためのテストを作成しようと試みた。

今回の実験は、図形を使って、或る時間、作業をさせると、どの様な曲線が得られるか、という事をみようとした。

作業は○及び×を交互に書かせる事にし、一行三〇秒、それで、休憩前一五行(七分三〇秒)、五分休憩、休憩後一五行(七分三〇秒)をさせた。小学校一、二年生各一五〇名、幼稚園児五〇名について実験をした結果、幼稚園児では、あまりはつきりしないが、小学校一、二年生では、クレペリン、内田精神作業検査と同じ様な作業曲線が得られた。

ラポールの重要性と作成条件の吟味

——臨床心理の場合について——

津 島 忠

(一)、ラポールの重要性は次の諸点に於て特に明瞭である

(A) テストの施行条件として

プロジェクトテストの場合にはラポールの有無によってクランメントの答の量と質に影響する。例へば、ロールシャッハ・テストに於ける性的反応の現れ方にこれがみられる。このことは情緒的な問題を持つ適応異常のクライエントに於て著しい。

智能テストの場合には、団体智能検査を施行する場合に現れ易い。特にネガティブイジム傾向の児童が含まれている時にこのことが著しく、筆者の経験の内、最も著しい事例は智能指数で二八の差を示した。

(B) 心理療法の必須条件として

心理療法の場合にはラポールの成就是単に治療の前提条件であるばかりでなく、ラポールを巧に作成してゆくことは同時に治療の段階に進んでいるのである。これは、ロジャースの「非指示的療法」についても云い得ることであるし又、「精神分析療法」に於て「催

眠術」をその手段として用いて来たことによつても明かに示されている。

(二)、作成条件の吟味

ラポールは臨床という特殊な場に於ける意図的な人間関係の創造的な産物である。従つて臨床の操作の行われる場所の物理的・心理的環境条件の整備(部屋の明度、壁の色彩、椅子、調度品等の好適条件)、ラポール作成に好適な臨床家のパーソナリティの面の条件の具備(精神衛生的に健全であること。自他に対する客観的態度。及び愛情深さ・忍耐力等の道徳性)更に臨床家とクライエントとの間に用いられるコミュニケーションの諸技術、即ち質問の仕方、用いられる言葉、臨床家の声、服装、その他の好適性が研究されねばならない。質問法についてはギャレット、ロジャース及びキンゼイ報告書の「面接」の項等が参考になる。筆者はラポールメイキングに適した「声」と「言葉」についての究明を志している。

方眼紙 Gestalt 検査の研究・第二報

成人受刑者の成績

佐 竹 隆 三

方眼紙 Gestalt 検査法は Berlin 大学の Haus Rupp 教授によつて創始され、G. Bloch, Willy Schönfeld によつて発展した Visual Motor Test の一種であるが、原法にかなりの改訂を加へて独自の立場から標準化を試み、その概略の紹介は第四九回日本精神神経学会の異常児のシンポジウム及び第五回臨床心理学会に於て述べた。

我々は現在本法を諸種の集団(正常人群、精神疾患者群、工員群、成人受刑者群、行動異常児群等)に施行中であるが、今回の発表は時間の関係で成人受刑者群の成績に就いて述べる。

被験者は現在金沢刑務所に服役中の成人受刑者二〇名

である。

対照正常人群の平均得点八四・八に比較して、成人受刑者群のそれは五四・八で著しく低いことが知られる。行動異常児群の成績五四・〇と極めて近似していることは注目に値する。

成人受刑者群の得点を更に詳細に検討すると、累犯数の増加と共に得点が低下するという事実が見出される。初犯者、再犯者群七四・六、三―五犯者六八・八、六犯以上累犯者群三六・二である。即ち、このことは、累犯者又は再犯者に比して、その犯罪行為がその本人の生来性の人格の障害や欠陥に主として基くと考へられるが、かゝる者の得点が極めて低いことは本検査の結果が、人格障害を反映していることを証明している訳である。

又同時に施行した Wechsler-Bellevue 知能診断テスト所見、特に Digit Span 及び Digit-Symbol の得点との密接な関係があるという事実から、我々の施行した方眼紙 Gestalt 検査なるものは、機械的記憶の把持能力、注意集中力、自己統制力、関係把握能力の柔軟性及び情緒安定性等の障害若くは欠陥を発見するに少くとも役立つものと考えたい。

各症例の詳細な検討は時間の都合上、第八例UM及び第一二例TSの二例を選び、分析考察を加えた。尙本研究は現在我々の教室で行っている、成人受刑者の犯罪予後に関する犯罪生物学的研究の一部をなすものである。

精神薄弱児に於ける色と形の問題

中 川 大 倫

実験材料と方法 ① 青色四角形（四センチメートル厚紙）と赤色円形（直径四センチメートル）の二刺戟より、赤色四角形（四センチメートルに）似たもの（同じもの）を選択させる。② 赤色三角形（一辺四センチメ

トル）と黄色の四角形より黄色三角形を。③ 黄色四角形と青色四角形から赤色四角形を。④ 青色円形と黄色円形から緑色円形を。⑤ 赤色四角形三ヶと青色三角形三ヶより青色四角形を。⑥ 黄色三角形三ヶと緑色円形三ヶより黄色円形を。⑦ 円形、三角形、四角形、菱形の夫々色々異にする二枚ずつのカードを合せる。⑧ 帽子、湯呑、自動車、長靴の夫々異にする二枚ずつのカードを合せる。⑨ ①の図形に巾一ミリメートルの黒線をつけ形態性を明瞭にしたカードを用い同様に選択させる。⑩ ②、③、④、⑤、⑥、⑦、⑧、⑨を夫々同様に黒線をつけ選択させる。⑪ ①から⑭迄各対象につき一回ずつ行う。⑫ 迄に色々と形に明瞭な区別をつけて選択した者には更に⑬⑭を第一回選択を異る立場から選択させる。

以上一四種の選択判断に於て常に色を選択する場合をC、常に形を選択する場合をF、色と形を明瞭に区別して選択する場合をD、でたらめでC、F、混合する場合をM、事物の絵は必ずFを選択し他はC又はMである場合は(M)問題の意味を解しない者をFの各クラスに分けて整理をする。

精神薄弱児、長野県S学院、東京都T学園、千葉県Y学園、の園児（IQ三〇―六九―鈴木ビネー式）の者、年令的には七才から一九才にわたるが精神薄弱の特性に一九才迄を含める。一一五名、略任意標本と云う事が出来る。対照例、松本市M幼稚園（市内中心地区）K保育園（市内周辺地区）の園児三〇四名、（精神薄弱を含まず）計画的に抽出したものではない為、任意標本としては不適当であるが大体近いものとして用いる。

精神薄弱児の色と形の選択は正常児（四才―六才）の選択の仕方と同じ傾向ではない。特に著明な相異はD(M)、Fのクラスに見られる。即ち精神薄弱児が正常児に比して、大体Dクラスが少く、(M)、Fクラスが多く見られる。之は精神薄弱児の心性（抽象作用と知覚の分節過程を含めて）が原始的であり具体的即物的である

事を物語るものである。精神薄弱児に於ては大体IQの高い者にC、F、D、選択が多く、低い者にFのクラスが見られる。之は色と形の選択判断に於て無関係でない事を示す。又FC・A'の上の者にF選択の者が比較的多く見られるが、正常児の場合には大体Dが増し、Cは減少する傾向にある。FクラスはD+Fとすれば大体増加の傾向にある事が認められる。そしてFがCを凌駕すると考えられる時期は大体五才―六才と推定される。形に黒線をつけてその形態性を強調したが、之によってC選択がF選択に移行したと見られる例はなかった。之は刺戟の迫力に選択判断の有力な基礎をおこうとする見解を支持しないものと考えられる。

適性検査法に関する実験的研究(3)

武 田 正 信
緒 方 利 則

中学校三年生徒、男子五七九名、女子三九〇名、計九六九名につき形態知覚及び運動速度を調べた。

形態知覚検査——被験者数男女六三四名。

男子・女子の各結果が分布の検定で同じ母集団に属していると考えられたので、この検査では男子、女子を区別していない。

器具テストとペーパーテストの関係——各テストの有意性は認められた。即ち、

上・中・下群に分けた場合は $\chi^2=27.26$ $p=4.0.01 > p$

中群を除いて上・下群を見た場合は $\chi^2=23.4$ $p=1.0.0$

$I > p$

運動速度検査——被験者数、男子五七九名、女子三九〇名。器具テストとペーパーテストとの関係

各テストの有意性は

上・中・下群に分けた場合

男子: $\chi^2=19.49$ $p=4.0.01 > p$

女子: $\chi^2=19.49$ $p=4.0.01 > p$

女子 $\chi^2=13.57$ $p=4$ $0.01>p$

中群を除いた上下群を見た場合

男子 $\chi^2=10.90$ $p=1$ $0.01>p$

女子 $\chi^2=9.72$ $p=1$ $0.01>p$

で、ともに有意性が認められた。

知能とA・B群との関係

形態知覚及び運動速度の両検査において、器具テストとペーパーテストとの間に有意性が認められたのであるが、この場合、器具テストの結果が下で、ペーパーテストの結果が上の群(A群)にある者と、これが逆の場合の群(B群)にある者とを、それ／＼分析する事によってこの両テストの関係を一步詳しく見る資料になし得ると考えられる。

知能段階の中央にある者を除いて、知能上群と下群とに分つてA群とB群との関係を見ると形態知覚は有意性が認められる。

運動速度は有意性が認められない。

男子は $\chi^2=0.46$ $p=1$ $0.50>p>0.20$

女子は $\chi^2=1.23$ $p=1$ $0.50>p>0.20$

形態知覚、運動速度ともに、器具テストとペーパーテストとの間に有意性が認められ、器具テストの代りとしてペーパーテストによる集団検査が行えるものと考えられる。

しかし、ペーパーテストが上で器具テストが下の群(A群)は知能上の者を多く含んでいる事、及び形態知覚においてはA群とB群との間に知能に関しての有意性が認められた事から知能の普通以下の多い集団に対しては器具テストとペーパーテストと同様に取り扱う事は避けるべきであつて、器具テストに重点をおくべきであると考えられる。

ステノタイプピスト適性検査の研究(第三報)

八田 卯一郎
波 辺 徹
安 藤 公 平
松 浦 健 児

最高裁書記官研修所において昭和二十六年十一月に実施されたステノタイプピスト(第二期速記研修生)の選抜試験の実施および結果についての報告。

第一次試験……全国各高等裁判所および各地方裁判所において、総受験者四五一名に実施した。

一、検査の種類

① 検査A(学力)——国語、社会、数学、理科の四科目について学力の程度を調べた。

② 検査B(知能)——一般知能の程度を調べるため、乱文、図形系列、命令、空間関係、計算の五検査を使用した。

③ 検査C(書取)——書字能力を見るため次の三問題を用いた。(イ)、漢字の「よみかた」をローマ字に直す問題。(ロ)、法廷用語をローマ字で与え、それを当用漢字に書き直す問題。(ハ)、同音異義の法廷用語と一般用語とがローマ字で文の間に挿入されているのを当用漢字に書き直す問題。

二、検査の結果

検査A・B・C毎にQ(全数の四分の一)以下の者は不合格とする標準によって二六五名が残った。次に検査A・B・CをTスコアに換算して、おのおのを二倍して加え、それに検査CのTスコアを加えて合計点を算出、その合計点で順位を決め、上位から六四名を第二次試験に残した。

第二次試験……書記官研修所(東京)において、次の諸検査を六四名に実施した。

一、検査の種類

① 検査D(適性)——ステノタイプピストに必要な性能を検出するため照合、速度、置換、語彙の四検査を用いた。

② 検査E(聴取)——聴取能力を見るため、次の二種を用いた。(イ)、かな二〇〇字からなる長文をテープレコーダー(N・H・Kアナウンス課員吹込)によって三回「よみかかせ」を行い、平かな新かなずついで書きあらわす。(ロ)、単語の系列を読みあげて、直接記憶により書かせた。

③ 検査F(学習)——ローマ字タイプライターを五時間学習させてテストを行った。

④ 性度検査——日本大学心理学研究室編「性度検査」を用いて男性・女性の程度を調べた。

⑤ 聴能検査——東京大学耳鼻科医務室で聴力、明瞭度および骨伝導の三方面から検査した。

⑥ 作文——口述試験の資料および能力判定のため、「趣味」について随意的な文体で書かせた。

⑦ 口述試験——面接法によって、法廷速記者として適しているかどうかの人物評価を行った。

二、検査の結果

検査Dの各サブテストの粗点および検査Eの各粗点をTスコアに換算し、それぞれ合計点を算出する。次に検査Dの二分の一と検査Eとの合計点で順位を決め検査Fの結果を勘案して二四名を不適者と判定し、四十名を残す。最後に聴能検査、口述試験などの諸条件を勘案して二十名の採用者を決定した。

——各検査の頻数分配・M・Oおよび内部相関など図表省略——

ステノタイプピスト適性検査の

研究(第四報)

第二期生の熟達度と適性との
関係について

八田卯一郎
渡辺公微
安藤健児
松浦健児

一、ステノタイプピスト訓練方法。二、熟達の経過。
三、熟達度と適性との関係

基本的訓練の一通り終った第四ヶ月目以後の毎月の熟達度検査における成績順位と、入所選抜試験における成績順位との関係を示すものが第一表である。本表における第一次試験とは(A)学力(B)知能(C)書取の三検査の総合点、第二次試験とは(D)適性(E)聴取の両検査の総合点であり、タイプ学習試験とは欧文タイプの打ち方を五時間実習した後テストした成績を示す。

四ヶ月目の検査の欄の順位はステノタイプ教官による訓練開始以来の総合的な成績評価によるものであり、五ヶ月目検査から九ヶ月目検査までは、それぞれの一ヶ月間に実施された数回のテストの総合成績による順位である。第一表にもとずき選抜試験の成績と入所後の熟達度試験の成績との相関々係を列位差法によって算出した ρ の値が第二表である。これによると第一次試験との相関が 0.6 以上でかなり高く第二次試験とは 0.3 程度であまり高くはないか、ともかく積極的相関が得られた。タイプ学習試験の試みは入所後の熟達度と逆相関を示し、選抜試験としては好ましくないことがわかった。

なお、第四ヶ月目の教官による熟達度成績評価と五ヶ月目以後の毎月の熟達度テストの相関は第二表の示す如く 0.9 以上で、訓練初期における順位がそのままほとんど変化しないことを表わしている。そこで第四ヶ月目

の成績評価と選抜試験に用いた各検査との相関を算出してみると、第三表の通りで学力検査が最も高い。第二次試験に用いた適性検査とは 0.26 の相関であるが、その下位検査毎との相関を見ると、第四表の示す如く検査2(速度検査)を除いてみな積極的相関を示し、これらが適性検査に対して有効であることがわかる。

ステノタイプ作業と最も密接な関係のありそうに考えられるものとして試みた聴取検査と入所後の成績とは第五表の示す如く、予期に反しほとんど相関がみられなかった。第一期生の場合には選抜試験に試みた文章聴取検査と入所後の成績はかなり高い相関を示した点からみて、今回の文章聴取検査は読上げの速度その他の条件において欠陥があったとも考えられる。

以上、われわれは最高裁判所書記官研修所における第二期速記研修生の選抜試験の成績と入所後の熟達度との相関を検討したが、第一次及び第二次試験を通じて実施した各種の検査は、ステノタイプピストの適性検出にそれぞれ有効であることが明かとなった。今後の選抜試験実施に際しては、第二次試験に実施する適性検査と聴取検査の精度を更に高めることと、第一次試験と第二次試験の成績とを総合して、入所後の熟達度に対する最も高い予測的価値を得る方法の考案が必要であると考える次第である。

集団の性格検査

補填緊張法とあべ・クレペリン法

柳川光章

I 補填緊張法

二五対の反対概念の性格評語五〇を示し、被験者に好きな人三名、きらいな人三名をあげさせ夫々の性格をこの五〇の評語の中から五つ乃至一〇えらばせて番号を書かせる。同一評語が二つ以上重なったものをとりだし、

三つの重なりはアンダライン一本を引く。四つなら二本である。この評語番号を外向性評語と内向性評語に分けて、アンダラインを一評語と数えながらV・Qを求め、V・Q一五〇をこえるものを強外向性、五〇以下のものを強内向性となづける、又、両向性指数A・Qは対になってくる反対概念が出て来た場合、その組の数によって求め、性格の単純複雑及び転換期がどうかをしらべ

る。高校六二五名、中学一六二〇名、小学校六年一五五〇名小学校四年二七五名中より、夫々男女五〇名を random sampling によって抽出した結果は次の如くである。

V・Q(向性指数)は各学年共平均値が女子の方が高い様に見受けられるが検定の結果は有意な差は認められない。又、各学年相互においても同様認められない。V・Qは高校——小学校四年を通じて強外向性は男子五〇%女子五〇%、強内向性は男子六〇%女子三〇%である。

A・Q(両向性指数)は高校をのぞき、他の学年は五〇% level で性差が認められるが、年齢差は高校女子と小学校四年女子との間に同様五〇% level で認められる以外どの場合にも認め得ない。

II あべ・クレペリン法

A、B、C、D、E、Fは作業量段階であり、Oについている数字は正常の規定に該当した項目を、Pについている数字は異常の規定に該当した項目を示すわけである。一は誤謬の有無、二は休憩前後の第一行作業量が第一段階を最高とするか最低とするかであり、三は同じく第三段階を最高とするか最低とするかであり、四は各段階の第一行が第二行以下に対し最高となっているものだけか、最低となっているものだけかの規定であり、五は作業陥没の有無である。Oにつく数字がPにつく数字の数より多くつければ(O一二三P五の如く)正常の度合が高いことになりにつく数字が多ければ異常の度合が高いこと

とにするとしている。

又、各項目について正常異常の頻数をみると正常項目では各学年、男女を通じてO五が最高であり、異常項目では高男P二、高女P三、中男P三、四、中女P四、小六男P二、三、女P五、小四男P三、女P二、三が最高となっている。

Ⅲ 学籍簿記入の場合には次のような形式をとる。

佐藤たか子 Eo13p5 V.Q. = 123% A.Q. = 15%
いやばりだがむしやらできむづかしくていつく、しかもぬけめがないがいんせつでもある。
検点の数は確実さの度合を示す。

高校用C式知能検査の作成について

小 保内 虎夫
辰 野 千 寿
青 木 孝 瀬
浅 見 千 鶴 子

〔作成の目的〕 高等学校生徒を対象とする一般知能検査は現在までに数種類しか作成されておらず、それらの問題内容、結果の考察等において適切なものが乏しい実状を考慮し、先に作成された中学用C式知能検査が好結果を示しているところから、それと同様の特質を与えた高校用C式知能検査を作成することを目的とする。

〔特質〕 C式知能検査の特質としては、A式(言語を主とする形式)とB式(言語を用いず、数や図形を主とする形式)との長所を生かし、欠点を補うように工夫したところの複合形式(compound)であることが第一に挙げられる。更に時間制限法(time limit)と作業制限法(work limit)とを併用した点や、多方面の心的因子の測定が可能であるように工夫した点などが挙げられる。

〔構成〕 本検査の問題構成は次のようになっている。テスト一、文章構成(A)、テスト二、置換(B)テスト

三、直接推理(A)、テスト四、記憶(A・B)テスト五算術推理(B)テスト六、文章完成(A)テスト七、空間関係(B)。

〔作成経過〕 予備テストには、東京都及び浦和市の高校生男女約一〇〇名を被験者に選び、その結果についてitem analysis をはじめとして厳密な検討を行った後に、標準化用の問題を選んだ。

標準化のための被験者には、各種の地域文化の水準を考慮し、更に昭和年度全国進学適性検査結果の全国平均を基準にして被験校を選定した。すなわち、東京都四、神奈川県二、埼玉県二、千葉県二、静岡県二、茨城県二の計一四校、約一五〇〇名を用いた。年令は満一五才から一九才までの範囲、実施は昭和二七年一月から月末にかけて行った。

〔結果〕 標準化実施の結果について、詳しいことを述べる余祐はないので省略する。各テスト毎に年令別、男女別で平均点と標準偏差値を算出した結果も年令に応じた妥当な発達が見られ、男女間には有意差は認められなかった。更にこれらの結果から換算率を定め、知能点を算出し、標準得点を決定し、最後に、各年令集団について知能偏差値に換算する。この結果求められた知能偏差値の分配状況は大体正規分配をなし、検査結果はそれを確めた($Total \chi^2 = 15.29 \quad df = 9 \quad \therefore 0.1 > p > 0.05$ non-significant)従って、予期通りの結果を得たと云える。

なお、テスト相互の間の相関について検討するため、相関係数を求めたところ、いづれも非常に低くあらわれまた因子分析を行った結果も、大体予期通りの望ましい結果を得ることができた。

昭和二七年度進学適性検査 追検査問題の分析と検討

斎藤 寛 治 郎

Ⅰ 目的

昭和二七年度進学適性検査追検査は出題型式を異にした三つの問題種別より構成されている。すなわち

問題甲 spiral 型式 六問題 60 Items
問題乙 自由型式 一八問題 20 Items
問題丙 長文型式 三問題 15 Items

である。検査実施の結果この三つの問題型式が辨別力という点で如何なる結果を示すか検討するためである。

Ⅱ 方法

(A) 標本は昭和二七年度進学適性検査追検査受検者総数四九六〇名より Systematic Sampling によって四〇〇枚を抽出した。

(B) 四〇〇枚標本について、問題別得点分布、および相関係数を求めた。

(C) 総得点によって Good, Middle, Poor の三つの群を作り、Good-poor Analysis Method の Item Analysis を行った。

Ⅲ 結果

(a) 問題種別の得点分布は問題甲は分布が右に片寄り、問題丙の分布は左に片寄り。また問題乙は中央に低く分布する。

(b) Good-poor Analysis の結果は問題甲はG群M群の間に有意差が認められるものが少く、問題丙はM群P群の間に有意差の認められるものが少い。また、問題乙はその中間に位するが、むしろ問題丙の傾向に近い。

(c) 相関係数は問題甲問題乙問題丙相互について求め、かつ相関係数の差の検定をすると、甲・乙と甲・丙、および甲・乙と乙・丙の相関係数には有意差が認め

められるが、甲・乙と乙・丙の相関係数の間には有意差は認められない。

以上のことから辨別力を考えると、長文型式をとる問題は上位の辨別力が強く、Spiral型式をとる問題は下位の辨別力が強い傾向をもつといえよう。さらに問題作成の立場を合せ考えると問題に含まれる機能的内容は出題の形式によっても影響を受けるように思われる。

団体知能検査における都会と

田舎の成績の比較

榊 原 清

最近作成した主として小学校用の高学年A式およびB式団体知能検査と中学校、高等学校用の新型A式およびB式団体知能検査の標準化の際に実施した都会と田舎の成績を比較考慮してみようとするのが本課題である。高学年A式の低位検査は反対、同義、分析、分類、類比、数系列、算数および間接記憶の八種類を用い、高学年B式の低位検査は順序関係、迷路、直接記憶、置換、立方体数分析、図形分割の六種類を用いた。また新型A式は同義、類比、分類、規則、推理、間接記憶の六種、新型B式は直接記憶、同関係、図形結合、型合せ、置換、直立方体数分析の六種の低位検査となっている。

実施場所は高学年新型検査とも、都会は東京都内に実施し、田舎は高学年は愛知、千葉、茨城小さい農山漁村および農山漁村、新型は新潟、石川、愛知の小都市、農山漁村に実施した。

その成績は都会と田舎では、かなりの開きがあり、高学年A式においては、平均して男十八点、女十五点の差があり、高学年B式は男十二点、女九点の差がある。新型A式においても男二十三点、女十八点、新型B式は男十一点、女五点の差がある。それでどの検査も男子が女子にや

や優れているのである。

なおここで注目すべきことは、文字によるA式において、都会と田舎の成績のずれが一層はなはだしく、B式の方は比較的差が小さいようである。

これらの成績のずれは何に原因するのであろうかといふことが問題になるであろう。一つは知識人が多く都会に集る傾向があるところから、その子孫である子弟の知能は当然田舎の子供達よりも優秀なものが多くであろうと予想されることである。他の一つの原因はこうした知能検査で測定する知能は、過去の経験すなわち彼等の環境の影響が成績を大きく左右するものであると考えることも可能である。われわれの性能には素質的な可容的性と経験も加わってできた現実性能とが考えられる。元来素質だけをとり出して考えることはできない。かならず環境が加わっている。しかしもし環境すなわち経験が等しく与えられたときは現実性能にあらわれる成績の差異は、可容的性能の差異と比例すると考えて差支ない。この原理に立って知能検査における知能を評価することは可能である。知能検査は現実性能を通して可容的性能である知能を測定しようとするのである。A式検査が都会に優れていて、B式検査の方には差異が少くあらわれるのも、この原理で説明できよう。

A式B式とも性的差異に関しては、本検査の結果では優劣何れともつかなかった。しかし低位検査については、優劣の差のあるものがある。

精神薄弱者と子供の知能の比較

Test Pattern 及び探索実験の報告

高 橋 太 郎

操作的に知能年令を等しくする精神薄弱成人と正常児童との間で、種々の知的能力を測定比較し、具体的に報告するのが本報告の目的である。被験者は精神薄弱成人

として、京都医療少年院者(C・A一五二〇)、精神薄弱児童として近江学園児童(C・A九一八、主として一五才以下)、正常児童としては、京都市衣笠小学校一、二年児童(I・Q九〇—一一〇)、修道保育園及び大谷保育園園児を用いた。Test Patternの追求としては、現在本院で施行中の鈴木 Binet および Wechsler-Bellevue 法改訂をとりあげたが、これはすでに標準化されたものである。知能検査以外に、次の四種目九種類の測定を行なった。動作知能をみるものとして、山越式職業適性検査のうち、狙準検査、棒指し検査、球拾い検査、速度検査、及び形盤検査(都合により二分間)を行なって、両群の結果を並べた。特に空間知覚を調べるものとして、碁石並べの問題、記号化能力として仮名読解能力検査問題を独自に作成実施して、両群をM、A、ごとに並べた最後に言語に関する能力をためすものとして、次の二種類の実験を行ない、三種類の項目を測定した。第一は言語場面において話し手、聞き手、素材の關係の把握能力を見るための指示代名詞正確検査、第二は会話語の適正を調べるために、質問に対する応答文の長さおよび適確さを調べた。

以上各種の分析及び探索実験は、精神薄弱成人の数が限られていて、標本数が非常に少いので、探索実験という性質に照らして、できる限り、統計的処理を避け、データをそのまま並べた。それは別に六表(図)にして、附す。これらの結果は統計的処理を欠くことは欠くが、たゞ次のような傾向を示すとはいえないだろうか。

一般に数に関するもの、記憶、關係に関するものにおいて、精神薄弱者の方が劣っている。また生活に直接關係のある具体的なもの、または言語を使用するある種のものについては精神薄弱者の方が優れている。このことはいつもいわれていることであるが、もう少し発展させると、精神薄弱者の方が子供より劣るに至る年令の低い

方から、記号化能力、記憶能力、空間知覚能力、リズム感覚、運動能力の順になつているといふのである。そしてその研究は全身的発達と呼応して、「成熟」の概念でとらえるべきであろう。また知能の中の社会的なものは精神薄弱者の方が優れているが、これは第六にあげた言語能力検査などから、経験的要因としてとりあげられでもよいであろう。

結局、知能を捉える捉え方として、身体的発達と社会的な獲得と関係を調べることが大切だということが分つたのである。

豊中市にて行いたる小学校生徒の知能検査の結果について

中 沢 和 彦
橋 覚 勝

知能診断テストについて、本テストは知能因子の種類は範をカリフォルニア精神成熟度テストに取っている。下位テストの問題については Guttman の尺度分析即ち夫々内容分析と選択法の場合は反応分析をなし、各下位テスト内部の等質性検討を行い問題を決定し構成してある。

○偏差値の分布——被験者総数(三、三一五名)

偏差値平均 男子 五〇・六八 平均 五〇・三五

女子 五〇・〇一 $\sigma=9.72$

○再検査の相関〇・八一

○クーパー、リチャードソンの公式による信頼度係数

因子別信頼度

空間関係 〇・七九 数的推理 〇・七四

記 憶 〇・八六 言 語 〇・七七

論理的推理 〇・七六 全 体 〇・九二

豊中市小学校児童八七五八人(男四五二五人女四二二三三人)一年生を除き全学年に実施した。

全市知能分布をと理論上分布比較すると

標準平均 47.22 $\sigma=10.92$

全市知能分布男女の比較は

男標準平均 47.34 $\sigma=11.11$

女標準平均 47.10 $\sigma=10.73$

学年別知能分布比較は

二年四四、一一、三年四四、一一、四年四七、一一、

五年四八、一一、六年四八、一一。

全市平均知能因子別パーセントイルプロフィールより見るに、一般的傾向として、言語、記憶が他因子に比して著しく発達し、空間関係は劣る。これは住宅地としての豊中市の環境条件からくる知的傾向の一端を現わしているのではないだろうか、試みに地域別の知能因子別パーセントイルプロフィールを見ると住宅地と工業農業地域ではかなり異なったプロフィールを描いており、市の中央部と周囲部の知能因子発達の差も明かに認め得る、特に工業地域では言語、論理的推理に劣る点指導上留意すべき点ではないだろうか。又男子は女子に比し空間関係、数的推理に優れ、女子は記憶、言語に優れる。次に学年平均知能因子パーセントイルプロフィールを見ると、知能偏差値平均では六・五・四年の順になっているが、因子別に此を見ると五年と六年では可成りの差を認める事が出来る。例えば五年では他因子に比し記憶が最高六年では言語が最高の位置を占め推理能力と言語能力との差が著しいが、五年では推理と言語との差はほとんど認められない。いずれにしても四・五・六年を通じて記憶が非常に発達している点、誤解された新教育が記憶力発達の時期を有意義に生かしていない事を反省し今後の教育の在り方を示唆するものとして注意する必要がある。

小学校児童の手掌骨の形成と知能の関係について

今井欣悦・小林哲朗
村尾能成・茨木芳美

演者等は年令七年から一二年に至る小学校児童二〇二名(内訳、男子九二名、女子一一〇名)の手掌のレントゲン撮影を実施し、撮影されたる手骨及び、尺、撓骨遠位端核の面積を測定した。その測定されたる面積の総和を全骨化領域とした。

その結果、一、豆骨の出現率は、女子で八年では六%、九年では一五%、一〇年では五〇%、一一年では七八%で、これを Flory の結果に比すれば約一年遅延している。

二、頭骨の面積と I・Q、との相関係数を求めた所、その結果は動揺著しく一義的結論を下すことは出来ない。

三、身長、年令を同一条件にとり、I・Q、の差二〇以上に及ぶ二群を作り各群の全骨化領域について比較検定をしたのが、有意ある差は認められなかった。

以上二、三、より、I・Q、と骨化との間には、吾々が骨化現象を統計量として取扱う限り、有意なる関係は認められなかった。

四、然し、これを形態学的に取扱った場合、即ち小多角骨が大多角骨より大きい児童の I・Q、は、優秀か低劣の何れかに偏していることが見出された。この意味は不明である。

五、夜尿症児の全骨化領域は正常者のそれに比して、有意な差があることが明らかとなった。又、第二掌骨の近位端に、仮性骨端の形成を見た例が二例発見された。これらは何れも夜尿症児であった。

六、同一条件にとった、骨形成不全児と骨形成正常児にロールシャッハ・テストを施行した所前者には、運動型が多く、後者には色彩型が多いことが分つた。この意

味は不明である。

以上を総合して手掌骨の形成は一般には、知能との関係はないと思われる。むしろこれはパーソナリティと関係があると思われる。又この方法は W. H. Sheldon の中胚葉型の決定には最良の方法である。

少年犯罪者の職業適応

——適応類型をたてるについで——

牛 窪 浩

Parople に附された保護少年がその仮釈放の期間中出所後一カ月、六カ月、一カ年の三時期に、職業にどのよう
に適応あるいは不適応したかの向きの変化の類型は、適
応→不適応→適応、不適応→不適応→適応等が考えられ
る。仮釈放後一カ年の二〇〇 Case についてみると次の
七つの型がある。MMM型(欠損家庭数四、非欠損家庭
数二)、AAA型(〇、二)、AMM型(五、二)、MAA型
(〇、二)、MMA型(一、〇)、AAM型(一、〇)、A
MA型(一、〇)。不適応型AMMは人夫、土工、店員等
Maladjust であり、適応型MAAはSkilful な仕事があ
定であることを示し、自己中心のえらび方は不安定で、親
の Advice によるのが結果がよく、安定所や保護司によ
るものが悪い——暫定的仕事であったり、前歴が問題と
なっているのによる。MMMとAMMの両群の通性とし
ては、努力、健康、和合、興味に大いに努めたのが成功
の Element としてあげられている。

保護少年に於ける向性検査の 信頼性について

広 田 実

大阪少年鑑別所式向性検査を四五名にやり、内三五名

に価値判断させた。

初めの向性検査の instruction は、「これは君達の審判の材料になるのであるから正直に書いてください。そしてこのテストは君達の性情(たち)について聞いているのである。……」

次の価値判断を伴うテストの instruction は、「君達が次の様に人から問われた時、君達は自分の印象を人に良く与えたいだろう。君達が考えて良い性情(たち)と思われる方に答えをしなさい」という様に鑑別所のテスト室で大体テストした。

テストの項目の通過率についてしらべたいのであるが、保護少年の中にはデータラメな反応をするので、三回とも一致した項目を以って、通過した項目とする。ケリ1によれば被験者の二七%の上位群と下位群に分けて通過率をしらべればよいので私の場合は上位群一三名下位群一三名について考察した。然し向性検査の様な異質的テストは内的緊密性の信頼度をおくと、信頼係数による分析的妥当性とは背反する事があるのを、Tucker の研究に従って、item の相関が、〇・一〇から〇・六〇の間だと信頼度も妥当性も同時に高く保つ事が出来る。項目六、一三、一四、一六、二七、三〇、三一、四九はφ係数が〇・五以上であり信頼度の高すぎる傾向がある。それ故妥当性が問題になる。項目八、二八、三七、四一は〇・一以下で信頼度が少い。これ等の項目は改めなければならぬ。第一回と第二回、第三回と夫々の信頼係数を出しその差を検定したが、 $(r_{12}=0.54, r_{13}=0.64, r_{23}=0.77, x^2=3.716, df=2, 0.20 > p > 0.10)$

有意な差が見られず、テストに他の Factor が加わったという積極的な証拠はない。

一致した頻数によって、データラメに反応したか否かをしらべて見た。一定の方向を持って反応するのと、データラメに反応するのは理論的にも五〇%づつである。これで x^2 検定すると、一致した頻数が三二の場合、 x^2

$= 3.38, p > 0.10 > p > 0.05$ で、一方だけの確率は $0.05 > p > 0.025$ で、彼はデータラメに反応したと云われな
い。故に頻数が三二以上は一定の反応があるが、三二未
満は一定の傾向があると積極的に云えない。(頻数の平
均=三二)

次に価値判断した項目と、三回の検査で一致度の高い項目との一致したものと反対であるものとわからないものとを比較して見た。この中で価値判断と反対にある項目は大変特徴のあるもので、この項目によって、価値判断をしない傾向があり、項目を正しく解釈した規準とした。反対であるものの頻数の平均が九で、九以下と一〇以上の二つのグループにわけて x^2 検定すると $x^2=131.2, df=2, 0.01 > p$ という大きな差が見られた。即ち一致度の高いものには、価値判断が多く、わからないという項目にはデータラメな反応が多いと思われる。

以上総合して見ると性格検査としての向性検査は信頼度の面からも多くの危険をはらんでいると思われる。

保護少年に於ける向性検査の 妥当性に就いて

——項目分析による——

池 川 三 郎

大阪少年保護鑑別所の少年男子一六才以上二九七人に
つき向性検査を行い、外向性群、内向性群、両向性群の
各項目の反応を調べ、その妥当性を検討した。

問題のある項目は大半が向性指数を表す項目に含まれており、且つその質問の内容が道徳的問題が多い事が保護少年の反応態度を常ならざる方向に向けたのかも知れない。そこで本実験は上表の項目の結果由来を項目の表現によるのか、或いは防禦手段としての価値判断の結果なのかそれとも無理解によるものなのかを検討するために第二の段階に入った。妥当とは言えない項目の表

現を少し変えてみた所——成可く平易に——二—三を除いて宜い結果をもたらした。

次にこれらの価値判断したものと同一少年の先に施行したものとを比べてみる時著しく両方の反応が一致したものがあつた。価値判断と反応が一致するものは前半に於て内向反応が多く後半に於ては外向反応が多い。

結論 これら実験結果としていえることは次の事柄である。

一、本少年群は自己防禦の手段としての価値判断が行われ易い。

二、平易な言葉。明確性を持たない価値判断しにくい表現をもちうることにより妥当性を高めうる可能性が残されている。

三、「デタラメ」反応はI・Qの低い(五〇—六〇)少年で項目の理解出来ないもの以外はあまり見当らない。

小児神経症に関する臨床心理学的研究

隠岐忠彦
江草安彦

従来神経症は、純心理学的、生理学的、体質、性格学的に説明がなされてきたが、結局社会心理学的生物学的な基礎的研究が必要で、特に人格形成期に於ける小児の欲求不満、葛藤に対して感情的困乱を示さない防衛体制の解明がなされなければならぬのではなからうか。その防衛体制は素質を主とする先天的因子と対人関係を中心とする後天的因子との相互関係によって決定されるものである。

本演題では対人関係を中心としてみた防衛体制薄弱な小児神経症二例を報告した。

症例一 小児ヒステリー

① 患児が両親の精神変質的基盤をうけて居り更に又患児の母に対する同一視が強く働いている結果先天的に防衛体制が薄弱である。

② 一家が外地の豊かな生活に比し、敗戦、引揚、その後の耐乏生活という一連の社会的混乱に対して、破局が到来し、相互間に不安自己中心のケワシイ雰囲気のみなぎって居り、唯一の男子である患児が心理的収斂の的となり特に患児の母は自己の不安定ヒステリー性格からくる、フラストレーションに対する代償としてひどく溺愛を行い、更に、祖母、叔母、父からも同様な不安定な溺愛を受け自から心的防衛体制を養う機会も必要もなかった。

③ 躰の非一貫性について不当な幼児扱いの反面バイオリン、ピアノを天才教育的に強いて習わす溺愛する反面甚だしい折檻をする等により心的防衛体制薄弱な患児が、妹の出生、保育園入園で心理的緊張が高まっていたところへ附属幼稚園の受験に失敗という機会から破局へと導かれた。

症例二 小児神経症

① 父が病的感情家であり、母が分裂気質である、そして患児は生来非常に刺戟に対して過敏であるところから先天的防衛体制薄弱であろうと思われる。

② 家庭内が成人間の心的葛藤で緊張の捌け口のないまゝで高まり、患児は放任の状態に感情的緊張が高まっている。かゝる患児が家庭より幼稚園大都会より農村へと異った社会集団への適応に失敗し、そのため、学業不振、不安を呈するに至った。

(以上二症は岡山大学小児科に小児神経症で入院せるものである)

これらはいずれも変質的素質はあるが、家族関係或は患児と家庭の対人関係には防衛体制薄弱となった大きな原因が、症例一は親の溺愛を中心に、症例二は親の無関心を中心に考えられる。

家出少年の臨床的研究(一)

中西昇
小西勝一郎

本研究の家出少年の出身地は殆んど全国に分布しており、その平均年齢は一六・三一年(S、D、±一・八四年)である。

なお、対象としての大阪市内の一夜間高校生徒三十名に対して、同様な面接質問を行い、作文を書かせた。この対照群の平均年齢は一六・八三年(S、D、±一・〇八年)である。

(A) 質問調査によつて得られた結果

(一) 家出期間と家出回数に関係がある。家出回数が多くなるにつれて、家出期間は長期になる傾向が見られる。

(二) 家出と犯罪との関係。家出少年八十二名中四十三名が犯罪又は虞犯行為を行っている。(自家持出、窃盗など)又は犯行の有無は家出期間に関係がある。尙家出回数増加は、犯行発生に関係する。

(三) 家出の動機の大部分は、職業に関するものと、保護者の本人に対する悪関係(しかるなど)に関するものによつて占められて居り、若年者に於いては保護者との悪関係に基づく家出が、年長者に於ては職業に動機づけられたそれが多い。家出回数も動機と関係し、初回者に比し二回以上の者は保護者との悪関係に基づくものが多い。

(四) 家出少年の家族関係 家庭欠損は家出少年群においては五七%、対照群三〇%で明かに家出群の方が悪い人的配置条件におかれている。家庭欠損の有無は家出動機の性質に関係するといえない。欠損有る者は保護者との悪関係を動機として叙述することが多いとはいえない。父を失った年齢は家出群七・六

八年(S、D、土四・〇五)母六・五年(土三・七

八)対照群は父六・一三年(土四・六九)母一二・一六年(土三・三六)親の本人に対する態度は、実

父母の場合は可愛がるが圧倒的に多く、この傾向は家出群も対照群も共通していた。継父母に対しては

可愛がるという叙言は甚だ少ない。本人が親を好くか嫌うかの質問に対しては、明かに実父母の方が継

父母よりも多く好かれる。平均同胞数は家出少年は(本人も含めて)三・七一人、対照少年は四・二三人である。一人子、長子、中間子、末子など同胞中

にしめる位置に関しては、家出対照両群に明かな差は見出されない。兄弟姉妹と仲の良い理由は家出群の方が多くの訴えを示している。

(B) 父及び母を主題とする作文の分析

それぞれ私のお父さん、私のお母さんと主題のみ印刷した紙を与え、自由作文を書かせた。内容的には健康、職歴、性格趣味、家出の詫び事、愛情に関するもの、尊敬、服従、反抗などに関するものの六範疇に区分せられた。

保護少年指導に関する一調査報告

芦 田 昇

少年達の要求を短時間の個人的面接によって調査することは困難に思われたが、物及び物について、興味・遊び及び生活一般にわたって反応をみることできた。好きな所は東京を一位にあげる者が最も高い。島によきも東京に持って行きたいと云うのが真情である。ほんとうに島が他の土地よりもよいと云う者はいない。

将来の職業について考えている者は比較的少い。その半ばは父兄の職業をあげているが、「僧侶」及び「農業の手伝い」の外は実現の可能性は全く未知数と云ってよ

いだろう。

以上の資料より不良化の原因をさぐれば次のものをあげることができる。

一、家庭環境の好ましくない諸条件(不和・無理解・愛の欠除・貧困等)

二、戦争の犠牲その他による家庭喪失——浮浪。

三、余暇の使用を誤る(未就学・中退・懈怠等)

四、友人の影響

保護少年の矯正指導は不良化の原因及び要求調査により「一般生活」「遊び」「学科及び作業」及び「職業」の指導を通して行うべきものであることが示唆される。

実際の保護指導がどのように行われているかを保護指導についてみれば、矯正面・伸張面・職業面に区別して記録する欄はあるが記述は綿密でない。記述内容は性格欄と混同し概して要を得ず又記録のないものが多い。記録の代表的なものを拾えば次の通りである。

一、環境をかえて指導せば性向上の悪は矯正ができると思われる。

二、享樂的環境から全く遮断する必要がある。

三、生活訓練により性格を矯正することにより知能は伸び得ると考えられる。性格は放逸、今後の観察指導は特に注意を要す。

四、非行を自覚させるとともに性向の矯正のために厳格なる教育指導が望ましい。

五、不断の監視を怠らず又逃亡などのないように留意し徐々に善導矯正教育を願いたい。

六、農業等の簡易作業を課し十分逃亡等を監督したい。このように矯正指導の必要を抽象的に述べるか嚴重な監督を強調しているだけで建設的意見は殆どない。六さ

え例外的なものである。

保護指導の実際を観察するとこのような指針によって効果を期待することは不可能であることがはっきりする。職員は十名いるが必要な心理学及び指導法の素養あ

る者皆無。二名の女性は我が子の世話で手一杯の「奥さん」と炊事以外にはできない「おばさん」であるから彼等によってよい家庭的雰囲気を作られるわけでもない。

少年達は抽象的な授業に只静粛を守り、遊び時間には単調なビー玉遊びと喧嘩を繰返している。そして頻繁に集団逃走する。

保護指導の実際及びそれに対する意見を詳細に述べる余裕はないが、予算面に制約を受けるとは云え、矯正指導は根本的に科学化しなければ、少年達は唯一時隔離されていると云うだけに止るだろう。

故中村古峽氏の異常心理学の研究

小熊 虎之助

本年九月一七日、七一才で千葉市で永眠した中村古峽(本名翁 Sigeru)氏は、戦前の我国の異常心理学、変態心理学の発展に大いに尽した人であると考えたので、この際この方面での氏の生前の業績をまとめてみた。

日本応用心理学会としては、昭和二三年五月明治大学主催の第五回大会上で、特別講演として催眠術の氏の達技を公開してもらった関係がある。しかもこの時の実演は、戦後のアメリカで催眠術が、単に精神療法としてだけでなく、(その昔の W. Wundt の否定説を裏切っ

て)心理学の実験法としても利用されている事実と対照されて、列席会員に有益な参考となった。

中村氏は明治一四年、この奈良市の近く、生駒山のフモトの有里村に生れ、父君は大坂府会議員、奈良県会議員であった。第一高等学校をへて、明治四〇年東京帝国

大学英文科卒業、杉村楚人冠の世話で、直ちに東京朝日新聞社編集部に入り、小説「穀」を紙上に発表した。これは、父を亡くした零落の旧家と、主人公の苦学と、その弟の精神病の経過とを描いた自叙伝風のもので、著者が変態心理学の研究に志したのも、この小説の内容から

当然同感されうる。しかもその志は大正六年ようやく実現された。同年東京品川御殿山の自宅に、当時の我国の有力な心理学者、精神病学者、法学者その他を援助者とした日本精神医学会を創立。まず機関雑誌「変態心理」を月刊、大正一六年まで続行した。これは一般社会にも相当広く読まれ、この方面の啓発に大きな効果をあげた。さらに各方面の異常心理に關しての自分や他人の研究書や翻譯書を出版。また特に注目すべきは、催眠術を主にした精神治療所を開設した事である。(4)その当時まで我国で行われていた精神療法心理療法は大体催眠術によつたものであるが、(5)しかも大正二年東大心理学助教をやめられた福来友吉博士の学位論文は「催眠心理学」(明治三九年出版)であつたにも拘らず、同氏はただ余暇に治療を試みられるだけであり、(6)その後文学士村上辰午郎氏が、注意術の名のもとで主として学童の悪癖矯正などに従事されていた程度のものであり、(7)また日本精神医学会の有力な援助者であり、また変態心理の連続の執筆者であつた森田正馬博士の、かの神経質の精神療法、すなわち催眠療法に對立した作業療法加味の悟得療法やその治療所がまだ完成されていなかった時代であつたので、中村氏のこの心理療所は、我国最初の専門的な学問的なものであつた。しかし文学士には、自宅に患者を収容する本格の治療所は公許されなかつた事も原因となつて、昭和三年東京医学専門学校を卒業。直ちに千葉医大の精神科に勤務。翌四年に千葉市に中村古峽療養所を開設、ここに初て専門精神医として診療に従事、終生変らなかつた。一方御殿山の旧宅は東京出張所とした。昭和一六年、名古屋医大の杉田教授に提出の論文「精神病質者に実験的に施したる諸種作業の治療的効果」を名古屋医学雑誌第五卷第二号に発表、同時に医学博士の学位をえた。

著述の方面では、諸家の執筆になる近世変態心理学大観と総称した翻譯叢書を精神医学会から出版することを

私と二人で企画。Ribotの「記憶意志人格の変態」、B. Sidisの「暗示の心理」、Bernard Hartの「狂人の心理」、Jungの「連想実験法その他の論文集」まで刊行したが、予約者が少数のため中止。しかし森田正馬の「精神療法」、寺田精一の「犯罪心理」、その他の「変態心理学講義録」の叢書は完成。その中で中村氏自身は「催眠術講義」を書き、初めてその研究を公表した。その他の著述としては、「変態心理の研究」、「変態心理と犯罪」、「少年不良化の経路」、「自殺及び情死の研究」、「グーエ式自己暗示法」、「フロイト精神分析法」、「神経衰弱はどうすれば全治するか」、「神経衰弱の正体」、「強迫観念の全治法」、「ヒステリーの療法」、「精神分析学と現代文学」(岩波講座、世界文学)、「大本教の解剖」、「二重人格の女」その他がある。氏の催眠学説の特色としては、それを注意の固定状態と考へ、睡眠と區別し、また暗示実現の程度に従つて催眠の深度を五段に分けた事などがあげられる。二重人格の女は、ヒステリ性の家出 Fugue で上京、偶然氏の家に住みこんだ女中に氏が発見したもの。平生は無学愚鈍であるにも拘らず、催眠状態に入ると、文学的教養をもち、潤達な性格と機智を示す特定の男子の人格に代わり、しかも両状態の間に意識の分裂をもつもので、かの James の Bourne 牧師、Binet 引用の Tejada, Sidis の Hanna, M. Prince の Beauchamp, Goddard の Norma など十分匹敵すべき興味深い人格変換者であり、中村氏も当時学会その他で、また私も日本女子大学と明治大学とで公開実験したものであるが、今日の我国の学界で、この我国の代表的二重人格者について知る人の少ないのは残念である。

交友關係の発達心理学的考察

年令的、性的、環境的、日時的変化

木村俊夫
安蔵和子

(1) 日時的経過による好悪關係のずれの考察——(年令的、性的、環境的变化)——

農村の場合——(年令的、性的、及び好悪兩關係の比較の考察)

好悪兩關係とも学年発達に伴つては何等の傾向も見出すことは出来ない。高学年兒童に於いて情緒の不安定を示す者が多いということが、或は原因の一つになりはしないだろうか。好きな關係では男のずれが大きく嫌いな關係では女のずれが大きい。兩關係の比較では男女共好きな關係より嫌いな關係のずれが大きい。

都會の場合——(年令的、性的及び好悪兩關係の比較の考察)

好悪兩關係とも年令発達に伴いずれば漸次減少している。男女の比較では総合的にみて男より女のずれが大きい。好悪兩關係の比較では男女共、好きな關係より嫌いな關係のずれが大きい。

農村兒と都會兒の比較

好悪兩關係とも都會兒に於いては年令発達に伴う一つの傾向を見出すことが出来たが、農村兒に於いてはそれが認められない。好きな關係より嫌いな關係のずれの大きいことは、農村兒都會兒に共通である。

(2) 質問のし方の相違による調査結果の変化の考察——(年令的、性的、好悪兩關係の比較)——

年令発達に伴う傾向としては何も見出すことは出来ない。性的には好きな關係に於いて男の相違率が大きく、嫌いな關係に於いては女の相違率が大きく、好悪兩關係の比較で、嫌いな關係の相違率の大きいことは、日時的経過によるずれと同じである。

(3)、異性間の好悪関係の変化の考察——(年令的、性的環境的、及び好悪両関係の変化の比較)

結合関係に於いては農村児童都会児共に、年令発達に伴って異性を選ぶ率が漸次減少する一つの傾向を見出せるが、拒否関係に於いてはそうした傾向は見出せない。農村児童都会児とも結合関係では女が男を選ぶ率より男が女を選ぶ率が大きく、拒否関係では逆に女が男を選ぶ率が大きい。

農村児と都会児の比較では、結合拒否両関係とも異性を選ぶ率は都会児が大きく、又農村都会両児童とも結合関係より拒否関係に於いて異性を対象に選ぶ率が大きい。

交友人間における人気について

長谷川 貢

ここで人気というのは人から仲よしと思われることを意味する。このような人気は学級内の生徒間にどのような存在し、またどのような条件によって決定されるか。それについて次のような調査を試みた。

被験者は中学生と高校生。特に仲のよい友人一〇名を拵り出させ、それらを最も仲のよいものから順に列記させる。その一〇名は必ずしも自分と同一の学級に所属しないものでもよいとする。同一被験者群に対して昭和二七年の五月下旬と十月中旬との二回施行して比較した。結果の概要は次の如くである。

(一)、仲よしとされたもののうち、被験者と同一学級に属するものの人数を見ると、(1)中学生は平均五・七人、高校生は三・五人ぐらいと自分の同級生から仲よしを選んでいる。(2)五月より十月における方が同級生より人数が多い。四ヵ月あまりを経過するうちに学級内の結合関係が多くなったと見ることが出来る。(3)五月にも十月にも同一被験者から仲よしとされた同級友人

数は被験者一人について、中学生においては平均三・五人、高校生においては平均二・三人しかない。四ヵ月あまりのうちに仲よし関係の相手はかなり変動したわけである。

(二)、各学校の被験者が一〇名の仲よしを全部同級生のうちから拵る場合を一〇〇%とし、各学級において何%のものが同級生から指名されたかを数えて見ると、各学級とも五月より十月の場合の方が仲よし友人中における同級生の割合が多い。

(三)、記名の順位に従って学級内における人気の多少を示す人気点を(第一位一〇点、第二位九点……第十位一点という風に)数え上げて見ると、次のような事実を認めることができる。(1)人気点は個人によって差異がある。この場合の最高は八〇点以上、最低は零点。平均点は四〇—一〇点の間である。(2)人気点の平均は五月よりも十月における方が多い。(これらの差は中学三年女生のほか、みな〇・五%以下の危険率をもって有意である。)

(四)、人気点に基づいて算出した五月と十月における結果の相関係数は中学生において、 $r=+0.66$ 高校生において $r=+0.42$ である。学級内友人間の人気が四ヵ月あまりの間に相当に変動したわけである。

遊びの研究

遊戯集団におけるルールの発生について

大西 誠 一 郎
浅井 浅 一

第一セット ゴールおよび場面に制限を与えず、行動を自由ならしめる。したがって、ゴール(バケツ二個)とボール一個とを与え、「二組にわかれ、このボールをバケツに入れて遊びなさい」との教示を与える。
第二セット ゴールの距離を二〇米に固定し、行動に

制限を与える。

第三セットは $11m \times 22m$ のコートラインを設け、ゴールの周りには半径一・五米の円をえがき、「このコートの中で遊びなさい」と教示する。

観察時間は各十五分、被験者は、小学六年生児童十名ずつ二組。

結果は次のようになった。遊びの行われる運動は、その行動に関して一様な緊張場面を形成するのではなく、場面にはおのずから緊張の高い場面と、緊張度の低い場面とがある。

集団には、成員間および集団間に共同心情の安定を保持しようとの努力がみられる。さらに、センターボールに対しては、両チームははっきりわかれず、入り交って集合している上にボールを投げ上げること。

つきに、ルールは形式的なものと非形式的なものにわけることができるが、ルールはつねに一定の規定性をもつものではない。ルールは力動的な性格をもち、同一行動も緊張の高い領域では厳重に実施が要請されるのに対し、緊張の低い領域では別に禁止され、抗議されないものである。

さらに、ルールは、たとえ破られても、集団のバランスを破らないならば抗議されないが、集団のバランスを破るような方向においては、きびしく抗議される性質をもっている。

第三セットにおいて、ゴールの周囲に円を描いた場合、その円内にはいってはいけないというルールは多く実行されたけれども、これも、攻める側(優位群)にはそれを守ることが厳重に要請されるが、守る側(劣位群)に対しては寛大であって、ルールの実施はバランスを保持する方向において遂行される性質をもっている。

以上、われわれは遊戯集団の観察において、ルールは集団内におけるバランスを維持し、さらに集団間のバランスを保持して共通目標を追求しようとする方向に即し

て発生するということをみることができた。

そして、遊戯集団は、その遊戯が継続される限り、勝敗のみを追求するのでなく、競争の要素をふくみつつより大きい共通目標に向かって統一される協同集団としての性格をもつて集団であるということが出来る。

家族の発達段階 (要旨)

津 留 宏

家族は一つの社会集団として、その発達段階は個人の
その場合とは必ずしも等しくはない。そこでその発達
段階を規定する条件を、1、発達概念上、2、社会的条
件上、3、構成的条件上の三点から吟味した上、一般的
に家族の発達段階を次の如く設定してみた。

- 第一期、結婚してから第一子誕生まで
- 第二期、子供(達)が青年期に達するまで
- I、子供(達)が学令に達するまで
- II、子供(達)が青年期に達するまで
- 第三期、子供(達)が社会的に独立するまで
- 第四期、再び夫婦二人だけに戻ってから一方が欠けるまで

ホスピタリズム(Hospitalism)の

研究(第一報)

斎 藤 義 夫

ホスピタリズムとは、元来小児科用語であって、乳幼児を長期間施設に収容し、養育している中に現われる身心の(身体的、知的、情緒的、社会的)異常状態を指す。その内容については Goldfarb その他によって色々あげられているが、主なものには栄養障害、知的遅滞、言語遅滞、Social contact の障害、依存傾向、四肢が短い、意志薄弱、消極的、非個性的(平均人)等がある

といわれている。

発生の機制については、ロレッタ・ベンダのいう自他同一化プロセスの欠如(Lack of identification process)が主要な要因であると考えられる。その他では運動不足、個人差に依る取扱いの欠如、行動の評価と指導の欠如等が考えられる。

被調査者は、A施設二六名、B施設四四名である。養護児童が対象である。施設の条件を比較すると、Aは私立、経済条件よし食糧費、教育費潤沢、職員は献身的であるが、Bは公立、経済条件は最低線、職員は勤務的である。

調査法は普通学級に通学している施設の児童について、担任が普通児と比較して七段階法によって評定してもらった。

- (イ) 施設条件のよいA施設の方が殆んどすべての特徴において、ホスピタリズムの性格が弱く、普通児と変りないが若干良好となっている。
- (ロ) A、B両施設ともそのプロフィールの凸凹おおむね平行関係になっている。
- (ハ) A、Bとも凸部をなして、ホスピタリズムの性格の弱い特徴は、一応、施設の如何を問わず、児童の集団生活において現われるホスピタリズムと考えてよいであろう。それには次のものが主たる特徴である。
たくましさの感がない。行動が衝動的である。注意力散漫、時間の観念が乏しい。
- (ニ) A、Bとが反対の凸凹をしている特徴は施設条件、従って養護技術の如何によるものと考えられる。その主なものは次のようになる。
積極的であるか消極的であるか。自発的か模倣的(他動的)か、学習意欲が旺盛か欠如しているか、感受性は鋭敏か鈍感か。
要するに、今までホスピタリズムとして一括されていた特徴の中には集団生活につきまとう好ましからざるも

のもあれば、養護技術の如何に依存しているものもあって、一概には断定できない。

農繁期における農村児童の生活実態

中 野 佐 三

これは、昭和二十六年秋の農繁休業の直後(十一月五—十日)、質問紙法と作文法とを用いて、香川県東郡の一農村、Y村小学校五年生一二四名、六年生一〇九名、計二三三名に試みた農繁休業中の生活実態調査の結果の一部である。彼らの家庭は五年生では純農家七七、半農家二三、非農家二四、六年生ではそれぞれ六九、一三、二七に分配されたが、これと男女に分けて、農繁休業中の毎日をもっとも多く費したかを、家の雑事、炊事、子守、田畑の仕事、その他に分類してみると、

- (A) (1)児童の生活は農家と非農家とは全くその実態を異にしている。非農家の児童は走使い、掃除など家の雑事としているが農家の児童は五、六年ともに田畑の仕事をしている。これは当然のことであるが、これは農家の児童の生活の農繁期と農繁期でない時期とで異なるであろうことを察せしめる。(2)この期間の男女児の生活は五年生と六年生とで異り、それが農家において著しい。農家の男児は五、六年ともに田畑の仕事をしているが、女児は田畑の仕事もするが、五年生では子守が多く、炊事をするものが少いのに、六年生では炊事をするものが非常に多い。女児は五年生と六年生とでその生活が急変している。
- (B) 右のように農繁期の農村は、小学生の労働をも必要としているが、この調査では、被調査児童の兄弟が農繁期においても現金収入のある仕事に従事して田畑の仕事をしていないことが知られた。純農家総数一四六のうち、兄弟を他に出しているもの五四を数え得た。かくて、農繁期は農村のもっともらしい姿を呈す

る時であるが、この時期の児童の生活は農家と非農家とで異り、同じ農家であっても家族の誰かは田畑の仕事をしていないでいる、といった断層のある環境の中で農村の児童は生活しているといえる。

共通目標の探求——方法の一つの試み

佐藤 幸治

方法 先ず戦争の可避不可避、戦争肯定、否定、日本の独立過程、軍備反対、必要論の根拠に対する検討について調査紙を作成して、答をチェックさせ、更に無抵抗の抵抗、軍備に伴う危険防止の方策について自由に所見を記述させた。

その結果に基づき第二調査紙を作成した。対外国関係、完全自主への道程、戦争に対する態度、警察力と軍備の程度、抵抗の方法、軍備に伴う危険防止の処置に関して四乃至一項目の答を用意して、答を選択させた。被調査者数は京大、京都工芸繊維大、西京大学生計四四五名、一九五二年九月一〇月に調査を進めた。

結果 (1) 対外国関係は第三勢力を形成せんとするもの六七%、中立的第三勢力及び米ソ両国に同様の態度をとらうとするもの、計五六%向米一辺倒のもの及び向ソ一辺倒のもの各々六%、親米第三勢力六・五%親ソ第三勢力二・一%となっている。

(2) 完全自主への道程は第三勢力の形成で完全自主を求めものが五七・五%、アメリカと友好関係を結びつつ自主に到らんとするもの二三・二%、ソ連圏に入ることにより自主に進まんとするもの二%となっている。

(3) 戦争に対する態度、(4) 警察力と軍備の程度

これは学生の間においては一般社会におけるほど意見が分散しない。前者では戦争絶対否定が、後者では現在程度又は警察力のみというものが約六〇%を占めてい

る。

(5) 抵抗の方法。(6) 軍備に伴う危険防止の方法。

第一調査では前者は一名平均一項目、後者は〇・五項目の記載があったのみで、明快な回答を与えたものは極めて少数であったが、第二調査においては前者は一名平均四項目、後者は三項目となつて、相当 feedback の行われたことが覗かれた。項目について云えば前者は現在のアメリカ支配よりの自主性の獲得を目標とするものが最も多く、戦争に利用されぬための抵抗、経済力の自主等がこれに次ぎ多数であった。後者においては軍人の政治参与禁止が最も多く、アメリカの援助政策拒否、文官の優位性堅持がこれに次いでいる。

世論調査における質問文構成に関する一考察

兼子 宙
牧田 稔
斎藤 定良

世論調査技術のうちの、質問法の答の形式には(1)二者択一法 Dichotomous Choice (2)多項選択法 Multiple Choice (3)自由選択法 Open End の三種があるが、この答の提出の形がどのような影響を与えるか、またこの答をいかに整理すべきかという問題についての研究はまだ足りない。

最初に、二者択一法としても、実際には、ハイ、イイエ、のどちらかというわけに行かず、そこに、ドチラトモイエヌという中間項が入り、更に、ワカラナイ、考エテナイ、などという、いわゆる「不答」の項があり、このように、二者択一法に、インテンシブな段階尺度を入れることは、かえって応答の上の無理をのぞく効果があることになる。こうした中間項はいくつもあっても、いずれも One Dimension の上に問題であるので、多項選択法とは異なるのである。

さて、多項目については、多くの問題があるが、今日は、その項の配列順序と順位との二つだけをとりあげ

る。

回答配列の順位が、結果に影響することは今次の最高裁判官の適否投票の結果にも明かに出たところである。こうした影響がどの位強く、かつ一般的であるかを検討するために(1)政党支持、(2)外国に対する好悪(3)鳩山、吉田両氏の選択、の三問について、回答配列(4)に於ては質問の順序)を逆にしたものを用いて実際調査を行った。結果は、(1)について、やゝ影響の傾向は認められるが、決定的な程度でなく、(2)については、やゝ明かな影響が見られ、(3)については、殆んど影響が認められなかった。この結果は極めて常識的に、裁判官の適否や(4)の問題のように、回答者の関心のうすい問題については、このような回答順位の影響が認められるが、回答者の積極的な態度の強い問題になるほど、このような形式的事項の影響は弱くなることを示したものと見えよう。

最後に、昨年度に報告したように、「奨学金附与資格の規準について」の意見調査に附属して、多項方式によって得た意見と整理する場合、多項の中から、一項のみを選ばせるか、幾つかを選んだ場合、その集計をどうすべきか、た、幾つかを選んだ場合に、その集計をどうすべきか、が問題となる。昨年度の報告では、このやり方を幾通りか行った結果、そのいずれによるも結果として実用上に差異がない。(順位に変化が生じない)として取扱ったのであるが、この問題は、選挙法に於ける、単記式と連記式の優劣の問題にも通じるもので、古くから色々の議論がある問題で、更に実験的検討の価値の大きい問題である。前述の(4)の外国好悪順位なども、その一位のみをとれば配列順位の差が認められるが、好悪順位に加重算の点数を以てすれば、その差は全く認められなくなるのであって、このような順位換算の整理法にも幾多の問題が蔵されていることがわかる。

期待にみられる自我関与の 形態分析についての一つの試み

原 谷 達 夫

Ego-involvement の研究は態度に於ける自我の因子を数的に扱う上に可能性を与えた。本研究では、必然的に自我が関与する期待判断を、直前に被験者が遂行した二つのテスト課題の結果の上に投ぜしめ、その場合にみられる自我関与の形態を成熟度の観点から分析し、実際の結果との関係を配分表の上に考察しようとした。

被験者は大学生一九三名（合一一七、女七六）であり表一に示した如く、自己の期待を積極的に肯定する四六%の者について更に詳しい資料を追究した。被験者が示した期待の段階及び積極性の比率については男女間に有意の差をみない。

表二：三に於いては、期待がより不明瞭な領域（課題のうち第二課題の客観テストよりも第一課題の論文テスト）に寄せられることの大きいことが明かにされる。

表四に於いては、全般の結果に対する期待に男女の差がみられないかを検討し、女子の一部に必要以上に自我を過少評価するもの、あることを指摘した。

表五においては、如上の三表（表二、三、四）を裏書きする資料を客観テストと期待された段階との間に配分係数を男女別に算出して確めている。

表六に於いて、主題の自我関与の形態分析を成熟度の上で試み、「客観的」「自己中心的」「被暗示的」という三段階を設定し、これと期待された成績段階との関係（C110・三四五）及び、査定結果との関係（C110・三五八）を検討した。

結論としては、必ずしも明瞭な相関関係を、態度の成熟度に表明されるところの自我関与の強さ乃至は質と、成績の査定結果との間に発見することは困難であった。即ち成績は自我関与の質、量によって直接変動するもの

ではないが、何らかの関係があることは、配分表の諸条件（被験者の数、階級の分け方、分布の状態）が必ずしも7に換算することの不可能なほど粗雑な配分係数を産み出してない限りにおいて有意性を主張しようようである。

成功・失敗の影響に関する研究（続）

——精神作業能力に及ぼす

事態差・条件差の測定——

横 山 雅 臣

一、作業速度

一、成功群が失敗群より進歩を示すとの仮定の下に四つの条件及び四つの事態を設定し、その効果を 1st session と 2nd session との作業量の相対的比較における上昇、下降を indicator として測定した場合に、分散分析の結果成功群に明かな上昇が、失敗群には明らかな減退がみられた。

二、条件間にも同様に有意な差がみられ、特に「成功+賞讃」が一番積極的効果を現わすことと、「失敗+叱責」が最も消極的効果を示すことが明かになった。

三、事態間には、全体的には有意差が見出されなかったが、六人による競争事態が最も積極的効果を有し、単独事態及び二人による競争事態における失敗群に消極的効果がみられた。

四、外向、内向両群の間には、作業速度における有意な差はみられない。

五、優秀児童に比して、劣等児童はより多くの減退を示した。

二、正確度

一、分散分析によれば、全体を通じての成功群、失敗群間の差はみられない。

二、X-test の結果、失敗群において正確度の減退を

みたと言いうる。

三、賞讃・叱責が消極的な効果を示した以外各条件間の差はみられない。

四、全体を通じての事態間の差は、認められぬが、六人による競争事態における成功群が正確度最も高く、協力競争事態における失敗群が最も低い正確度を示す。

五、内向性児童においては、外向性児童に比し判然とした形ではないが、かなりの正確度の減退を示すと考えられる。

六、正確度に関しては、学力・知性上下の差異は認められない。

三、要求水準の変動

一、失敗群において G. D. score の減少がみられる。

二、条件としては、叱責の加わった場合が最も大きな減退を示したが。

三、事態差は認められない。

四、要求水準の変動を測定することによって、成功・失敗とフラストレーションの関係がみることが出来た。

五、失敗群における G. D. score の減少は外向性児童に比して内向性児童に大きく、優秀児に比して劣等児に大きい。

四、成功・普通・失敗言明との関係

一、先行せる失敗経験による失敗言明の増加は、認められなかった。それ故、VP（特に児童である場合）の判断による成功・失敗言明をもって、成功・失敗・フラストレーションの効果を測定することは妥当でないと思われる。但し、結果処理の方法に問題点がある。

思考過程の一特性

小 口 忠 彦

いままでの思考研究は、主として、個体の単独場面においてのものであった。集団的にあつかうような場合に

も、相互間に Communication が成立していないのが大凡の傾向であった。ヒントの効果を問題にした研究もあつたが、しかし大部分は、単なる共存としての集団や、競争相手としての集団などあつて来た。従つて、広義における「迂廻」、即ち言語や記号などをふくめての障害除去・道具使用・道具製作などは、個体とそれにあたえられている問題との連関内における Prägnanz への傾向として規定され、素地的過程の下位過程である迂廻の方向がもっている方向と素地的過程の方向とは「直線的」なつながりをもっていた。下位過程の方向は、素地的過程の方向を抑制するのではなく、場の動きとして必然的にそうならざるをえない方向であつたのである。このいみで、個体の単独場面における迂廻は、代償的ではなくて「即事的」といえる。そして、この迂廻が成立しない場合に、思考過程は「極限」(ゆきづまり)に達して、Duncker, K. の *Gravitationsfeld* (慣れた機能) と *F_z* (慣れない機能) とが分極化し、代償行動の発生する可能性があるわけである。

では、ヒントが与えられるような集団場面における思考過程は、どんな様相をしめすのであろうか。

この実験では、思考過程の「極限」を手がかりとして、この問題についての一応の見通しをえようとする。結果の考察

(1) 「心理的極限」には、次の三種類がある。(A) 一時的極限、(B) 永続的極限、(C) 永続可能的極限。

これらに対して、「客観的極限」がある。

(2) 永続可能的極限に於て、「他者依存」が現れる。

(3) 「他者依存」の力学

(i) 他者依存は「自発的抑制」 Spontaneous Control である。つまり、思考の実在度を低下させる。

(ii) 他者依存は「自発的使用」 Spontaneous Use である。他者のヒントを道具として使用することによって、素地的過程を進捗させる。

(iii) 上記 (i) と (ii) とのまとめ。素地的過程が「永続可能的極限」になると、その過程の進捗を抑制する下位過程が自発的に発生し、その抑制効果によつて素地的過程の進捗が促進される。「代償的迂廻」といえる。この特性は、単独場面では顕現しない。

映画観客調査 (9) 「山びこ学校」について

乾 孝
鈴木 幹人

綴方教育・映画教室・演劇指導等に特別の重点を置いている学級 (B) と、そうしたことを特に導入して学習していない学級 (A) とで、その各々の児童生徒が映画「山びこ学校」をいかに見たかを比較検討する。

まず、この映画の全体的感想として、(A) では、「しめっぽい」、「暗い」という感想がまま現われたが、(B) ではむしろ「つよい」、「明るい」と見たものが多かった。山元村の貧困については、両グループとも、よく描かれていたのを認め、驚きを一つにしているが、しかも、その貧困に対する見方には相当顕著な差異が見られる。たとえば、(A) の方では「生活水準が低いので驚いた」、「かわいそうだった」などで、せいぜい「貧乏なことについて考えさせるものであった」というに止まるが、(B) では、都会の生徒ですら、「なぜ働いても貧乏なのか」と疑い、「もっと農業を改良して農民が自分の時間を作ることが望ましい」と考え、「農村の貧乏の原因を追求し、山元村の少年たちが「封建的な大人にかわつて、民主主義に育つて行くための勉強をしている」のを認め「世の中の問題を明るくするのは我々だ」と責任を感じている。

従つて、映画の随所に現われる協力の姿を見ても、

(A) では、自治会の運営に感心し、たすけ合う美しい「友情」とのみ眺めているのに反して、(B) では、屢々映画の表現を越えて、この協力が、ただ苦しみをわけ合つて忍ぶ協力ではなく、苦しみの原因をきわめこれと闘うための協力であることを汲み取っている。「キカンシャ」(文集の名) は黙々として働く者たちの中から貧困と無知をなくすために黙々と走っている」(中学一年男)

この相違は、地域差、年齢差を越えている。ここに引用した (B) はすべて綴方教育の学級であるが、これは数量的処理の結果から推して、必ずしも無着教室と同じ綴方教育の学級であつた親近感のみでないと思われる。つまり、ここに分析した限りでも、綴方教育というものが、単に表現力の問題のみにはとどまらず、生活への見方を深め得るものであることが推測される。また、視覚教育の学級が思った程の効果を示さなかつたことは、映画観賞指導 (ここは特に映画教室に重点) のあり方に対する反省の資ともなるが、この材料のみで確言するのは危険である。今後の研究をまつて考察を進めることにしたい。

新聞広告のスペースの大きさとして 反復に関する一研究

朝 倉 利 景

一、方法 九種の異なる大きさの広告二〇ヶから成る新聞広告面を二組作つた。一組は二紙面に互つてスペースを組み、比較的大きい広告群から成り (材料イ)、他は一紙面中にスペースを組んで比較的小さい広告群から成る (材料ロ)、位置の影響を吟味するために材料イとロでは位置と大きさとの関係を略々逆にした。広告は全て模倣広告を作り、仮想の商品名を用いた。特定広告の機構的影響及び特定商品名の記憶難易度の影響を相殺させるために各大きさに全ての商品の広告があらわれるように

rotate して被験者群列に割当てた。従つて材料イ、ロ各々一〇の模擬広告面を準備した。大きさの効果については被験者一六三名に群列に割当てられた広告面を配り、一分間見せた後で最も印象に残った広告を一つ挙げさせた。集計に当つては挙げられた広告を大きさに分類してその回答率を算出し、その数値に基いて、材料イでは一段×二〇〇ミリメートルの大きさを基準とし、材料ロでは一段×一〇〇ミリメートルの大きさを基準として大きさの整数倍における印象効果の倍数を算出した。反復の効果については被験者八四名に対し、材料ロを二回見る群と六回見る群とに別けて夫々 rotate させて一カ月の期間に略々等間隔に一分間ずつ見せて最終回に商品名を再生、再認せしめた。集計に当つては二回見た群と六回見た群の夫々につき大きさ別に再生、再認合成記憶率を求め、各大きさについて両群の記憶率の比を算出した。更に前述同様の方法で一段×一〇〇ミリメートルの大きさを基準とした効果倍数を算出した。

二、結果の考察 大きさの印象効果についてみると、材料イ、ロ共に効果倍数は略々一致しており、アメリカでいわれるような平方根乗比例よりはむしろ正比例に近い上昇率を示している。二回反復した結果の大きさの記憶効果についても同様なことがいえる。所が六回反復した結果の大きさの記憶効果については略々平方根乗に比例して効果が上昇している。このことから新聞広告のようにに大小の差の著しい広告が沢山掲載されている場合には大きさの効果は著しくあらわれるといえよう。しかし幾度も反復して可成り印象に残った広告の間では、また雑誌の四分の一頁丈或はそれ以上の広告のように一回でも可成強い印象を残すような広告の間では平方根乗比例の理論が可成り立つようである。次に反復効果については新聞広告面にあるどんな小さな広告でもそれが見られる以上は反復したゞけの効果が認められる。そして反復効果と大きさとの関係は、大きい広告より小さい広

告の方が反復したゞめに増す効果の倍数は大きい。これは大きい広告は一回で可成り強い印象を与えるのでそれ以上反復しても反復した割合に効果は増えないのに対し、小さい広告は最初の印象が弱い丈に反復すればそれ丈の効果があらわれるということに帰せられよう。

英語学習の心理学的研究(4)

—前置詞用法の心理学的考察—

小保内 虎夫
永 沢 幸 七
村 石 昭 三

本研究は英語学習の心理学的研究の一考察として前置詞用法に関するテストを高校、大学生に対して行い、諸種の誤謬に心理学的考察を試みた。この結果、誤謬因を以下の如く認めることが出来た。

I、表現法の相違による誤謬

① 動的表现(英語)と静的表現(日本語) He climbed over the wall の文で要求語 over を on と誤答する。英語 climbed over は動的表现だが日本人は on を用い静的に表現する。

② 主体的表現(英語)と客体的表現(日本語) I live a long way from the school の文で要求語 from を for と誤答する。英語は動作的意味を含む前置詞を用い、主体的意識を表わすが日本人は for を用い、学校と家とを幾何学的平面的に位置づけて客体的に表現する。

③ 擬人的表現(英語) The rumour spread through the City の文で要求語 through を in と誤答する。through を用い文主を擬人化する表現は日本語では試みられない。

上記、表現法の特徴は必ずしも前置詞のみにおうものではない。

II、語法の相違による誤謬

④ 前置詞の分化性(英語)と助詞の未分化性(日本語) — 思考の分化度を含む —
I have a book in my hand の文で要求語 in を on と誤答する。日本語は本を手の上に持つか、手中に持つかは区別されないが、英語は両者の on と in と分化させて区別する。これは他面日英両国人の思考の分化度に関係する。

⑤ 意味の上における近接語の適用 — 未分化性・易しいもの —
I am going to translate this sentence into Japanese の文で要求語 into を in と誤答する。これは意味の上における近接語 into と in との未分化的把握と、より易しいもの in の適用による。

⑥ 語法の相違 — 英語法の照応性を含む —
I have lived here for the past ten years の文で要求語 for を in と誤答する。英語は動詞が文の中心にあり、日本語は動詞が文の最後にあるという語順的相違、並びに英語は動詞と前置詞との tense の照応性を含むに對し、日本語はかかる意味の照応性を含まない事による。

III、学習法による誤謬
⑦ 既習前置詞結合の固執
There is a town two miles up the river. の文で要求語 up を on と誤答する。平易な既習前置詞に固執する結果である。

⑧ 辞書の暗記法
He came out of the room の文で要求語 out of を from と誤答する。日本語訳「カラ」は from とする辞書の暗記法の結果である。学習者はかかる誤謬因に留意することにより英語学習を一層効果的たらしめることが可能である。

国字に関する心理学的研究

——文字の読み易さに及ぼす

縦劃・横劃の影響——

小保内 虎夫
佐藤 泰正

国語国字問題の心理学的研究はこれまでは主として刺戟配置としての文字の配列面に重点が置かれた。しかし、こうした研究は現在行き詰りの状態にありこれを打開するには文字の視覚構造を明かにすることが重要な一方法と考えられる。本研究はこうした考え方から出発して、どんな文字構造が最も読み易いか（書き易いかも考慮する）を探究することにある。その方法に大体二つある。一つは様々な構造の文字を作って実験心理的に読み易さの法則を見出す行き方である。その二は文字構造の歴史的変遷は読み易さ（知覚）の法則に従うものとし、この変遷から読み易さの法則を把握せんとする行き方である。本研究では片仮名、平仮名、漢字、英字の文字構造の比較をなし、又、文字のどのような要素が見易さに影響するかを調査した。

一、文字構造の要素的特質。(A)字劃要素の数。各種の文字が字劃に関連してどのような特質を有するかを調べた。結果は英字(二・七三劃)片仮名(二・八八)で一字平均の劃要素が最も少なく、平仮名は(三・七三)二位、漢字(一〇・四八)当用漢字八八一字)は最も多い。日本語をローマ字で書いた場合、平均五・七七劃要素を必要とし、これも劃要素が多くなる。(B)字劃要素の線方向。つぎに各文字に含まれる劃の種類(縦線、横線、斜線、点、曲線)を比較した。その結果からいろいろのことがいえるが、その一つとして、英字は縦線が多く、漢字は横線が多いこと、仮名はどちらもその中間にあることがあげられる。(C)文字を構成する縦横の長さの割合。つぎに各文字の線の長さを総合して縦が多

いか、横が多いか等について調べた。(斜線については角度によって優劣をきめた。例えば四五度は縦横同じ位七五度は縦がかなり多いの如し)一般的について、どの文字も縦が多いといえる。特に英字において著しい。英字の場合、縦が優位になったのは経済的要因もあるかも知れないが、読み易さに対する要求がこのような結果に導いたものと思われる。英字の特質から推して、国字を横書にする場合、縦を多くするのがよく、縦書にするにしても、この点に何らかの考慮を払うことが妥当と考える。

二、仮名の構造と見やすさ。稲葉六郎、近藤忠雄氏が仮名の見易さの順位を見出したが、それに基づき文字構造のどの要因が見易さに影響するかを調べた。〔結果〕①劃要素の数の影響は著しい。劃要素の少いほど見易い。(一劃一位、二劃二位、三劃四劃三位、五劃、六劃、四位)②劃要素の線方向について、直線が読み易さに貢献し、曲線や点は不良である。③縦横の長さの割合から眺めると、縦横の長さのどちらか一方が優位であるほど見易く、文字構成の縦横の長さが半々になるにつれて見にくくなる。漢字の読みにくいのはこのためである。④習慣的影響を調べるために、新聞に現れた仮名の頻度数との関係を考察したが、見易さとの間に関係は見出されなかった。

読書傾向の調査報告

中島 智恵子

(1) 幼稚園では、どの園児も絵本に興味を抱いているということが云い得られる。
(2) 小学校に於いても、第一学年、第二学年は絵本を主体としているが、高学年は男女とも総合雑誌が上位で、男子は冒険小説、女子は童話、少女小説に興味をもちはじめている。

(3) 中学生は男子がスポーツ、冒険、科学に興味をもち、女子は少女小説、文学的小説に興味をもち、斯る綜合判定が統計によって、判然とされた事が段階的収獲といえよう。

なお、低学年及び女子に読書の集中傾向が強く、換言すれば、読書分野の狭路を指向してゐるものとして、やゝ寒心を抱かざるを得ぬ。

反面、高学年になるに従い、女子よりも男子に平均化の傾向が認められ、読物の種類も、その数を増している。又、男子のスポーツ雑誌は高率を示している。最近読んだ本及び希望書は、
(イ)、自然科学書が多く、これに比して、女子は文化科学書(文芸書)が多い。

(ロ)、男子の漫画、冒険小説、大衆小説への志向は調査した数より数倍化されている事が分明となり、図書が自由に入手出来ず総合雑誌で、まにあわせているが、図書館利用に依り、漸次興味要求が得られているが、希望要求はまだ充分に得られていない。

(ハ)、読書希望の図書のない者が男女共に相当な役割を占めているところから、適切な読書指導余地が十分に残されていることが示されている。

図書の入手経路を調査すると経済的、社会的様相の多種多様な因子が働いて、一般的傾向を捉えることは難かしいが、注目すべき問題は、
(イ)、小遣で買うものは男子に多い。

(ロ)、友人間でタライ廻しに回覧されている流行傾向が特色である。

(ハ)、学校の図書館を利用して読むものは、自然科学(理科)がトップを示している。学校では高学年になるほど女子の借り出しが多くなっている。

(ニ)、更に父母に与えられる本は男女とも雑誌、童話が高く、他に一般に低い。
(4) 高等学校では文学書が頭を抜き、その次ぎに自然

科学、理科が多く、次は社会、歴史地理、哲学、宗教、語学、工業、芸術、産業等で産業方面については、殆んど興味を有していない。

新入児童の国語学習について

大西 誠 一郎
小笠原 ミチ雄

実験対象 名古屋市に外接する小学校一年児童男女各四十人、学級の在籍者の約五分の二を無為抽出する。

実験(一)、単語を読む能力の調査

問題は検定国語教科書の入門書五種について頻度を調べ、多いものを取り、二字、三字、四字、五字、六字の語をえらんだ。

結果 読語調査得点分布表は全くU字形を示した。これが今後どのように移動するかが課題である。

実験(二)、教師の評価

実験(三)、単語あつめ

実験(四)、アチーブメント・テスト

① アチーブメント・テストにみる成績の移動

○単語の読みの結果によって、中央平均値から○・八五σ左の位置は得点者がいないから、ここと、右へ○・六五σの位置で上と中を区切ることによって、上中下三つの成績群とした。

○アチーブメント・テストの成績についても平均値から左へ○・八五σ、右へ○・六五σをとって上中下三つの成績群をつくり、その移動状態をみた。

○x²検定により、両者の関係をみるに
連合係数はテスト全体においては、○・二八を示した。

アチーブメント・テストの問題中、最も単語の読みに近い(1)の有意語の選択では、連合係数は○・三六となる。やや程度の高い短文の読みでは、連合係数は○・二

六となる。

成績移動の事例。

上群から下群への二児

A、入学前家庭養育、入学後病弱(女)

B、幼稚園の経験がある。注意散漫(男)

下群から上群への二児

C、入学前家庭養育、母が家庭学習をさせる(男)

D、幼稚園の経験がある。一人で家庭学習をする(女)

数学に於ける問題理解と

解決との関係

四方 実 一

(1) 調査児童は綾部市K小学校第六学年A組、男子一〇名、女子一〇名、B組、男子一〇名、女子一〇名を選んだ、この選出は第一回テストで平均及び標準偏差がA B組ほぼ等しいように選んだ。分布も相似するようにした。

(2) 調査問題は次の一〇問からなっている。(1)、円の直径が与えられ、半径を求める。(2)、乗法、減法、除法の組み合った事実問題。(3)、除法に関する事実問題。(4)時間と距離の問題。(5)、手紙の社会問題。(6)、分数の差を求める事実問題。(7)、立方体の体積、縦、横が与えられ、高さを求める問題。(8)、立方体の容積を求める問題(9)、除法二回を要する事実問題。(10)、分母を異にする分数の差を求める事実問題。

第一テストはA、B組共に同一問題を同一条件にて課し、第二回テストはA組を統制組とし、B組を実験組とした。A組には第一回テスト問題のうち数値のみ異なり内容を同一形式として課し、B組にはA組に与えた問題に、更に問題理解の程度をみるべく、簡単な誘導問題を附加した。例えば第九問で、

(9)、子供会るとき、費用が一二〇〇円かかりました。学校から半分だけ出してもらい。のこりを生徒から集め

ることにしました。一人あたり幾ら集めたらよいでしょう。生徒数は一五〇人です(A、B組共通)

B組には次の四問が附加してある。

- (1)、何を求める問題ですか。
- (2)、学校から出してもらうのは幾円ですか。
- (3)、生徒から集めるのは皆で幾円ですか。
- (4)、一〇〇円を四人で集めるに、一人当たり幾ら集めたらよいか。

三、結 果

統制組は第二回目の平均は一二点の上昇でこの差は極めて有意である。この主な原因は問題(5)の郵便料金の規約から来ている。又実験組では一・七点の上昇で、この差は有意である。この主たる原因は全体的に上昇した上に更に問題(1)の直径と半径の関係理解及び統制組同様問題(5)が原因となっている。

第一回テストから、第二回テストの上昇は両組共に問題理解の程度に依存している。第二回テストで実験組が統制組より平均に於て優れているが、有意な差ではない。附加問題がどの程度に問題理解に役立ったかはこれだけでは結論づけられない。更に研究を進める必要がある。

たゞ実験組の問題解決不能者の補助問題に対する答は明らかに問題条件の理解に不十分か、資料の意味がつかめないか、条件の間の関係が全体に対する位置づけが理解されないためである。

算数レディネス・テスト

神 沢 良 輔
塩 田 芳 久

I、数学的側面(四〇項目)(1)、数えること(一三項目)問一、機械的に数える(二項目)問二、かん定、数詞と数の一致、数の再生、数の比較(三項目)問

三、数の系列(一)(二項目)問四、数の系列(二)

(四項目)問五、位どりの概念(二項目)(2)、読むことと書くこと(四項目)問六、数を読むこと(二項目)

問七、数を書くこと(二項目)(3)、計算の基礎(一二項目)問八、加法の基礎(四項目)問九、減法の基礎

(四項目)問一〇、乗法の基礎(二項目)問一一、除法の基礎(二項目)(4)、分数の基礎(三項目)問一

二、分数の概念(三項目)(5)、五問題解決(八項目)問一三、問題解決における加、減(四項目)問一四、問題解決における乗、除、其他(四項目)

II、社会的側面(四〇項目)(6)、測定(二三項目)問一五、測定用具の使用(七項目)問一六、月、日の知識

(三項目)問一七、時刻、時間の知識(三項目)問一八、対とダースの知識(二項目)問一九、金銭の理解

(四項目)問二〇、方向の理解(二項目)問二一、速さの経験(二項目)(7)、表とグラフ(四項目)問二

二、グラフの読みと理解(四項目)(8)、物の形と図形(五項目)問二三、物の形を知る(三項目)問二四、

図形の理解(二項目)(9)、数の一般的使用(八項目)問二五、日常生活における数の使用(曜日、誕生日、

順番、量数、買物、昨日と今日、右と左)(八項目)二側面、九部、二五問、八〇項目からなるテストの他

に、観察項目は次の七項目とし、記録には三段階の評定尺度法を採用した。なお重要な行動については精細な記述的記録をとる。

(1) 小学校の一、二年児童、とくに新人児童に対する算数の学習指導に通用すべきレディネス・テストである。

(2) 武政びねー式知能検査との相関は、数学的側面の得点とは $r=0.63$ 、社会的側面の得点とは $r=0.64$ 、総得点とは $r=0.65$ であった。

(3) 教師の評価との相関は、算数の理解とこのテストの総得点とは $r=0.72$ 、同技能とは $r=0.51$ 、

同態度とは $r=0.39$ 、なお国語のよみとりは $r=0.61$ であった。

(4) キューダー・リチャードソンによる信頼度係数は 0.9455 。

(5) 折半法による信頼度係数(スピアマン、ブラウン公式)は 0.914 。

聴覚的理解と表現の発達について

山本真市

所謂実験室的なものでなく教室で一斉に行う学習指導の場合、それを効果的、能率的ならしめるにはどんな点に考慮すればよいかという問題の一つとして、児童の聞き方と同時に理解の発達を明らかにしそれに応じた学習指導が考えられねばならないと思つてこの問題をとらえたのである。

方法。

最も単純な内容を実験者が言葉で示し、被験者はそれを聞きその通り表現する。即ち、児童に矩形(洋紙の四つ切り)の紙を一枚づつ配布し、

『これからこの紙に面白いものを書いてもらいます。よく聞いて思つた通り書いて下さい。問題は一回しか言いません。途中で質問は言いません。相談したり隣の人のを見てはいけません。』

と言つて次の問題を継続的に提示する。

(1) 紙のまん中に横に一本線を引いて下さい。(少し間をおいて)

(2) その線のまん中にあまり大きくなく丸を一つ書いて下さい。(間をおいて)

(3) 今かいた丸の両側に同じ位離して同じ大きさの丸を一つづつ書いて下さい。

これを芦屋市の小学校(二校)、と姫路市の小学校(一校)一年より六年まで合計七六〇名について実施した。

(昭和二六年一二月中旬に実施)

結果の考察

一、各学年における正解率(正解率の発達曲線)各学校の正解率の平均を学年別に見ると、発達曲線にリズム(段階)のあることが見られる。即ち、二年と三年との間及び四年と五年との間には著しい進歩が見られる二、答(表現)の種類

前述した問題に対して児童はいろいろな解答(表現)をなしているが学年別にその種類率の平均を算出してみると前述した正解率の発達曲線と直交する曲線となり逆の関係があり、低学年ほど種類が多いようである。

三、Error の分析

問題の提示順に Error を分析してみると、

(1) 一、二年では第二問、第三問に断然が多いが、第一問においてもかなり Error が見られる。即ち、まん中という言葉をいろいろに解釈しているようであり、更に横を縦としたものもかなり見られた。

(2) 三、四年生では第二問、第三問に、五、六年生では第三問に Error が多いようである。即ち両側という言葉と、一つづつという言葉をいろいろに解釈し表現しているのではないだろうかと思われる。

音楽才能検査の吟味

玉岡忍

従来の音楽才能検査を大別すると、音感的分析的なものと、音楽的具体的なものに二大別することが出来る。前者は、ギルバート、レヴェス、ブレイメル、エクセンプラルスキー、マルツェウ、等を初め、シーショアによつて有名になつたような音感のテストである。即ち sense of pitch, sense of time, sense of rhythm, sense of intensity, sense of consonance,

tone memory, 等の如く、音そのものに対するセンスの分析によつて音楽才能を検査しようとしたものである。それに対して、オレゴン大学で試みた Oregon musical discrimination test や、クリューゲルを中心とするザンデルやマルタ・ヴィドールなどの立場は具体的音楽を材料にして、その中からリズムやメロディやハーモニーの理解力を見ようとしたものであつて、全体的な立場をとるものである。例えば、オレゴン大学のテストを例にとると、バツハからラヴェルに至るまでの代表的な作曲家の曲の一片をとり、その曲の一部分をリズム・メロディ又はハーモニーの何れかにおいて改悪したものを作り、原曲と比較させてどちらがよいかを判断させるものである。又ヴィドールはリズムやメロディを具体的な曲の断片から再生させたり、途中までしかない曲の後を附加させて、その曲を簡単に終結させたりしている。私はこれら両方の立場に各々その意義を見出したが、それぞれ長所と短所がある。前者には音感としての一般性と、音楽的なセンスの中で最も重要なセンスを決定するためのテストになることなどに長所があるが、音楽としての具体性に乏しいために音楽の理解力テストにならない場合がある。後者は丁度その反対である。これらの各自の長短を補うべく両方面のテストを綜合して行かうか或は両者をうまく兼ね有するようなテストを作成するかの必要性を感じたのである。

この度は、ヴィドールの多くの実験の中でさきに例示したようなメロディの解決に関するテストを吟味する意味においての予備実験を行った。問題は次に示すような六個の音楽の断片で、この途中までしかない曲を銘々好きなように解決させた。ヴィドールは曲を演奏してきかせ、V.P. は口で報告をさせているが、私は、女子大学の合唱団の学生(四八名)をV.P. としたためにこのプリントを配つて自分で譜を書かせた。これは団体的に行つた故にこの方法をとつたが、やはり個人テ

トをすべきだと思つた。(楽譜の書き誤りがあつた) 結果は①大部分のものが解決しているが、その方法には個人差がかなり大であること。②解決の仕方が不自然であること。③与えられたメロディとよく合わないようなメロディを附加したものであること。④解決しないもの様子にもそれぞれ程度の差のあること。などが見られ、従つて、組織的に綿密に行うならばかなり信頼性のあるテストであると思われた。

大筋の力のテストに関する研究

松田岩男
柏原健三

活動的な作業又は体育的な各種の運動等の大筋運動の基礎的な因子は色々あげられるが、Cureton, T. K. は因子分析の結果、平衡性、柔軟性 (flexibility) 敏捷性、筋力、馬力 (power) 持久性の六つの因子をあげている。我々はこれらの大筋運動の基礎的な因子であり、距離疾走、跳躍運動、投てき運動の基礎となつて馬力のテストに關して幾つかの検討を加えた。

この馬力は筋力 (strength) と速さ (velocity) の因子が複合された、重力及び惰性に打ち勝つ身体的能力と考えられ、その代表的な検査として垂直跳が用いられているので、この垂直跳を選んで次の事柄を検討した。

- (1)、チョーク・ジャンプと Leap-Meter による測定との比較。
- (2)、垂直跳の練習効果及び練習曲線。
- (3)、垂直跳能力の曜日による差異。
- (4)、試技回数数の検討。

練習効果及び練習曲線に就ては、(1)の検討の結果 Leap-Meter による測定の有効性が確められたのでそれを使用し、一日二〇回(一〇回ずつ二系列に分け第一系列と第二系列の間に二分、各試技の間隔は一五秒にした)六月一二日より七月一七日まで三五日間(六月一日欠)体育学部体育心理学実験室で午後二時—三時の間

に行つた。(当時の気温は二五度C—二七度C位) 被験者は中学校一年生(男子)三名、小学校五年生(男子)一名及び相当に運動経験のある者として実験者の柏原を加えた計五名である。

曜日による差異はこの測定から得られた資料を曜日に分けて整理検討した。

試技回数に就ては、この資料及び高校男子二五八名に就て、第一系列六回、第二系列六回、計一二回の試技(一四一名)及び第一系列三回第二系列三回計六回の試技(一一七名)に就て実施し、その最大値の出現する回数によつて一応の検討を試みた。結果を考察すると——

垂直跳は簡単な運動であり、比較的素質的要因によつて規定されるところが大であるとされ、他の運動に比較すると練習効果が少いとされているが、三五日間継続的に合計七〇回ずつ練習した結果の最高値、最低値及びその範囲をみると、進歩は四—一〇センチメートルにすぎず、同型の種目である立幅跳でさえ一五日間約三〇センチメートルの進歩がみられる(松井)のと比較すれば、練習効果は、極めて少ないものと云うことが出来る。

前後二〇回三日間(六〇回)の平均と標準偏差をみると、一六日位までは凹状型の進歩を示すが後は進歩は緩慢になる。人によつては停滞期の後に更に進歩を示す中段休止型を示すものがある。

曜日による差異は、水、木がよくなり一般の作業能率の傾向と一致しているようだが、日曜日が最もよくなつてゐる。

文芸と色彩 (其の二)

——詩人北原白秋の色彩感覚——

木村俊夫

白秋の詩集を年代順に配列し、大体同時代の作品はその二—三を一まとめにして、その中に含まれる色彩語

(名詞、形容詞、副詞、動詞。但し熟語は除く)を拾い、色彩の系統によつて分類し、その%を算出し、これを年代順に配列する。

各時代の色彩語%は、当代の詩人の色彩関心の趣きを示すとも云えるし、詩集に於いて構成された色彩世界の構造を示すものとも云える。然るに各色彩語の%は年代によつて変化する。その変化を辿ると色彩関心とか色彩世界構造の変化には一定の方向があり、それを決定する要因としては年齢、境遇、詩風というようなものを発見することができる。

かくして詩集に就いて行つた結果を、先に行つた同じ白秋の歌集の方〔第九回日本応用心理定大会で発表。後「多磨」(Vol.34No.3,4,5,昭和二十七年に発表)〕と比較するに、大体年齢、境遇による変化は一致する。然し同じ製作年代毎に対応せしめた詩及び歌に於ける色彩語の%の間の差を検定すると殆ど有意の差である。

この差は思うに歌風と詩風の趣きの相違、遡つては短歌形式と詩形式との相違に基くものである。同じ作者の同年代の作品でも、斯くの如き差が存するのであるといふことは同じ作者でも詩人としてある場合と歌人としてある場合では自ら色彩関心も異なることを意味する。

妙好人の心理

岡 道 固

本願寺派の僧、仰誓が、真実の篤信心の美しき言行を選述して、妙好人伝と題し、之を天保年間、僧純が刊行した。後に僧純が続編を出し、妙好人伝全五篇十巻となり、その中に百二十六人の妙好人の言行を述べてある。其後、松前象王の続編二巻、明治三二年浜口惠璋の新妙好人伝二巻等が出たが、此等の妙好人伝は殆ど逸話を述べたもので、伝記としては非常に不完全である。

所で大谷大学から二つの良書が出た、一つは鈴木大拙

の「妙好人」昭和二十三年版で、浅原才市(昭和八年八十三才死)という妙好人の「口あい」を主としたもので、鈴木博士は之を、一大宗教詩と推している。今一つは柳宗悦氏の「妙好人因幡の源左」昭和二十五年版で、此は足利源左衛門(昭和五年八十九才死)の言行を記述したもので、この二書はよき資料となるが入信経験については、残念ながら探り得ない。

竜谷大学の学生の宿題として、次の如き調査をすることを要求した。「熱心な信者を一人選定すること。その人と度々面接して、自然な態度で雑談的に色々の話をすること。その話の中に次の如き項目を織込んで、その話を聞いて帰つては記録を重ねて行くこと。但し会談しつつ記録してはいけないこと。尚その信者について他の人を通じて知り得るだけ調査して行くこと。調査項目。(一)言行。(二)信条(仏、救済、安心、死後、実践その他)。(三)入信(動機、転機、経路、年令その他)。(四)略伝。(五)性格(現在及び信前)。(六)環境(家庭、交友、地域)。(七)篤信者氏名、性別、年令、住所、所屬等。調査報告二百五十六通の中、報告の不完全なもの、及び真宗以外の信仰者に関するもの六十一通を除き、百九十五通をこの研究の材料とし、次の如き結果が得られた。

(A) 真宗篤信者の年令的構成は青年期のものが非常に少数で、老年者が、青壯年者を含めたそのよりも多い。これは信仰へ志した初発の年令ではなく、篤信者の年令だから当然のことである。尙女子が男子に比して、四十才以後に於ける数に大差はないが、四十才以前に於て非常に少ないことが目立つ。

(B) 初発心の有無。家庭の近親その他の影響によつて、不知不識の間に自然に獲信して行き初発心の年令の意識なきものと、何等かの原因機会によつて、真宗信仰に触れ初めし年令の意識あるものとを比べれば、初発心経験を有しないものが非常に多く、全員の四五%を占めて居る。青年期に初発するものは全員の三分の一弱で、

男子三三%で対し女子一九%に過ぎぬ。スターバックの所謂「回心は青年期の現象である」には程遠い。

禅の心理(公安の意義とその機能)

森 大 光

公安とは自己の禅的体験の正否を験する所の手段であると共に、禅の第一要件たる見性に到達せんが為の方法であり、師が学僧をして自己の境地にまでに導く為、智的なものが自分自身の本性を徹見するの如何に障害となるかを知らしめ、そしてそれを排除せしめる為に与える処のものであつて、法身、機関、言詮、難透、難解の漸進的な学習段階に区分せられて組織体係づけられている。法身が体で機関、言論がその用であり、又法身が境涯で機関、言詮がその働き、即ち境涯の表現、活動であつて、難透難解は以上の難易によつて区分されているに過ぎない。而して此れらの公安は、

一、仏祖に関するもの、二、仏経、仏説法を取扱ったもの、三、一と多との問題、四、生死に関するもの、五、日常底に関するもの、六、その他自然に関するもの、等その内容は多岐に亘っている。

要するに公安は人為的に人間の意識上に疑問を生ぜしめ、それを動機として解決への決定的な方向づけをなせしめんとする技術的方法として用いられるものであり、(一)、智性の限界を知らしめること、(二)、禅意識の成熟をもたらし、禅体験の究極たる悟りに至らしめる機能をもっているものである。

夢窓国師が「総して情識のはからざる所なり、故に公安と名づく、これを鉄饅頭にたとえたり、唯情識の舌をつく事あたわざる所に向つて、咬み来り嚼みさらば、必ず咬み破る事あるべし」と云つて居る如く、公安は言語により表現されているにもかゝらず、その内容は経験的知識によつては推論されないので智性はその限界を認め

ざるを得ないのである。例えば、洞山守初の「如何なるか是れ仏」の問に対する「麻三斤」の答え、そこには何等の抽象的な人格神の匂すらなく、仏の定義が「麻三斤」でもないのであって、問と答えとの間には何らの論理的な聯関を見出すことができないのである。従ってそこには、仏は宇宙全体であると云うが如き、一般の汎神論的な解釈は成立しないのである。唯「麻三斤」と表現されるその場に於ける心理的な現象の事実として、相対的経験的知識によって推論されるのでなく、直視的に認知される処に仏が躍動しているのを把握することができのみである。答所は問所にあると云われる如く、問う者問われるものが一体であれば論理的な聯関がなくとも問に対する答えは具体的な全体の場として成立するのである。

かくして公案は悟りへ到達する一手段であると共に、その段階的方法の過程に於て学習される禅意識の蓄積によって、一定の禅的世界視、禅の人生視は獲得をうながし、悟る事によって変化せられた心的構造の新たな内部結構を通して、實際的に、具体的に、日常的に自由に「隨所に主となる」の生活を営み得さしめるものである。

八観六驗——呂氏春秋

木 森 重 樹

支那戦国時代の末から、秦の統一にかけての秦相、呂不韋（西紀前三世紀頃の人）の撰と云われる呂氏春秋、論人編に、人を論量するのに八観、六驗、六戚、四隠の弁があると申しています。現代我々の立場からも教えらるる点が多々あると存じます。

八観とは

- 一、通ずれば、其の礼する所を觀る。
- 二、貴ければ、其の進む所を觀る。
- 三、富めば、その養う所を觀る。

- 四、聴けば、その行う所を觀る。
- 五、止まれば、その好む所を觀る。
- 六、習えば、其の言う所を觀る。
- 七、窮すれば、そのうけざる所を觀る。
- 八、賤しければ、其の為さざる所を觀る。

六驗とは

- 一、之を喜ばしめて、以って其の守を驗す。
- 二、之を樂しましめて、以って其の僻を驗す。
- 三、之を怒らしめて、以って其の節を驗す。
- 四、之を懼れしめて、以って其の特を驗す。
- 五、之を哀しましめて、以って其の人を驗す。
- 六、之を苦しめしめて、以って其の志を驗す。

四隠とは、交友、故旧、邑里、門郭。

以上を總括して、内は則ち六戚四隠を用い、外は則ち八観、六驗を用うれば人の情偽、貧郭、美悪は失う所無からんと述べていますが、之の本の作られた時代と目的との相違はあつても、人間を生きた生活環境で具体的な生活場面を通じ、生活歴、家庭環境、交友関係までも考慮してダイナミカリーに評価する点は、我々としても余程の反省とヒントを与えられるものと思ひます。

宗教性の問題

本 宮 弥 兵 衛

人類学者及び宗教史家は原始民族の間に宗教が自発的に共通的に発生した事実を認め、人性には人を宗教的にならしめる或る自発的傾向があるとし、何らかの意味での宗教性を肯定する。

人間は有限で不完全であり、その住む世界も有限不完全であるのに、絶対完全という神の觀念をもつが、これは経験から得たものではない。即ち、先有觀念であつて、凡ての宗教経験の基礎となるという。しかし宗

教現象から見ると神の觀念は民族によつて又知識の発達程度によつて異なるもので實際に共通な宗教觀念は存在しないから先有觀念ではない。

宗教は人間の先天的傾向によるもので宗教的本能ともいわれるべきものが基礎になつていゝという。普通の本能は特殊目的に適合する特殊反応であるが、宗教は有害な発動的傾向ある衝動を統御し弱い有益な衝動を強め、かくして生活を調整する統御本能の一つであるという。然し宗教価値によつて生活を調整し構成する働きは本能ではない。

宗教経験に於て情的方面が最も顯著であり、且つ比較的早く発達するから、宗教性といわれるものは宗教的情緒であるという。しかし何ものかによつて組織された感情であつて純粹の情緒ではない。

宗教性は特殊な本能でも情緒でもなく、全体としての精神の態度であるという。宗教は根本的に人生に対し、又吾々の生活する世界に対する人間の態度であると見るのだが、一般に態度は主として経験の結果であり、第二次的のものである。

人間の精神の中には経験を組織するものがあつて、その周囲に他の価値を組織し、かくして其の一部分を自己に實現することによつて其の人の眞實の世界を見出すものである。而してこの理想的価値は人間以上の力即ち神仏に於て見出される。宗教性は部分的若くは方面的作用でなく全態としての精神に属する又精神が全態として或程度まで発達しないと宗教意識として現われないものである。全態としての精神を宗教的ならしめる根本的なものは「信ぜんとする衝動」と驚異否定的自己感情恐怖及び愛情等の感情の結合である。是等の衝動と感情の束が精神組織の中心となり、これに宗教的表象や価値が結合して宗教的になる傾向を示す。これが宗教性であると考へられる。

きているのは注目に値する。

宗教社会学は未開社会を研究対象にするとき、特に宗教の発生について考察してきた。現治としてはアニミズムの前段階にアニマティズム、あるいは原始一神教的觀念が存在していたと想定するよりも再びアニミズムを支持する者が多くなっている。

社会制度としての宗教の構造や機能についての組織的な理論が未だ展開されていないのは遺憾である。しかし未開社会のいわゆる呪術宗教的現象を取扱っている学者たちは次第に宗教現象の正しい理解のためには、単に社会組織との関連などを探求するに止らず、未開の各社会集団のもつ特定のイデオロギー、世界観、人生観などを深く究明しなければならぬことを痛感してきている。宗教社会学は認識社会学と密に提携しなければならぬとの結論に達しているわけである。

宗教社会学は近世の産業社会殊に資本主義と宗教との関連についても決して興味を失っていない。資本主義の発生とキリスト教との関係について「宗教と資本主義の衰頹」(デネット)の問題も取上げられている。

宗教心理学の問題

今 田 恵

科学的宗教心理学の問題は、宗教経験の現象的研究と、人格の宗教性の研究とに二大別される。そして初期の宗教心理学は、主として宗教経験の現象的研究に集中し、最近に至って人格の宗教性が強く表面に現れて来た。

宗教心理学は、心理学の一領域として認められていたとはいえず、それは特殊な人々によって研究されており、専門的心理学者によって研究されたことは極めて少く、一般に心理学者は宗教に対しては無頓着乃至は反感的でさへあったといえよう。

此の間の事情をよく示すものは American Council

of Education その他の協同の下に調査された College Reading and Religion の中にある心理学についての報告である。報告者はオールポートであるが、五十の最も広く用いられる概論書について見た結果、十四は全く宗教という文字さへなく、一は明かに反宗教的であり、十は単なる事実として記載し、五は利用的価値を説き、三は半ば体系的に敘述し、三は宗教を単なるフィクションとし、二は人生哲学の予備となる宗教的問題にふれている。全体としては宗教無視の状態、これを現代心理学の二次元的性格といっている。即ち平面的に現象の問題にのみ注意していることを指しているであろう。

最近に至って、一般心理学が、現象本位から、現象を通して到達された操作的概念として経験の主体を問題とするようになり、自我、人格等を科学的心理学の問題とするに至ったことに伴って、宗教心理学の問題も現象本位から、更に一層強く人間の宗教性の基礎づけへと移っていった。そして、心理学者の宗教無視の状態が変って、宗教を心理学の問題として取りあげねばならなくなったのである。

その具体的例証として、Knight Dunlap の Religion its Function in Human Life (1946) と G. W.

Allport の The individual and his Religion, a Psychological Interpretation (1951) とを挙げることでできよう。

前者は生理学的実験心理学者として知られていた著者の四十年來の研究の成果として、宗教を特殊な現象として見るのではなく、人間意識の正常なる所産として見、宗教が将来の文化の中に果すべき役割を明かにしようとしたものである。

後者は、彼の人格心理の自然の発展とも見るべきものであって、「人格における宗教的情操の自律的統一的性格と、人生における信仰への本質的依存を、相当正確に

示す所の心理学的科学に到達するであろうという確信」

に基づいて書かれたものであり、彼自身も、已にジェームズが五十年前に懐いていた見解であって、それにその後の動的心理学の発達による人格の理論が加えられたものであるといっている。

これは宗教心理学の発生当時に現れて、その後、現象本位の宗教心理学が全盛であった状態を過ぎて、人間の宗教性への問題が復活したものであるといつて差支えないであろう。

新興宗教の問題

乾

孝

新興宗教の持ちようをのべると、イ、混淆的であること。神、仏、基その他の教義が、甚だ自由にいりまじっている。たとえば、エホバも天帝もあみだも天照大神も、おなじものの別名であるとしたり、神道系でも無関係な幾種かが勝手に融合したりすることは普通であり、また或る教団群のごときは、その傘下に、神道宗教団五、仏教系二、儒教系(陰陽道)、禊教、木曾御嶽、大本愛善荘、その他各一を集めているものすらある。

□ 現世利益をうたうこと。これは信徒を集めるためでもあるが、最も多いのは病氣治癒を、あるいは正面にふりかざし、あるいは心の救いの結果として、ないしは信仰への導きのしるしとして挙げるなどの差異はあるが、これにふれぬものは稀である。

また、小市民、インテリ向きのものは、「哲学」、「応用心理学」、「新物理学」の理論に粉装をこらし、手の込んだ奇蹟(念言、透視)を行うし、もっと素朴なものには、旧式のマジック、予言などを行い、安心立命、夫婦和合、家庭円満、金もうけ、豊作など、ときには脱税すらを約束する。

「世なおし」予言も珍らしくないが、これは多く天皇制を支える基盤をむしろそのまま自分の方に肩がわりしようとするもので、不敬罪にとわれる心配がなくなつたとともにあからさまに公言されるようになった。だから、「神国日本」、「神民道実践」をうたうことが多く、ある教団の初期のポスターに「天照大神天降る」と大書して「マクアーサー司令部許可済」の印を押してあったなど、これらの本質を典型的に表現するものといえよう。

ハ、企業化されていること。多くのものは機関紙をもち、また手段をつくして金品を嘉納しているが、はなはだ近代的に企業化されてきたのも戦後新興宗教の大きな特ちょうである。丹羽文雄氏の「蛇と鳩」は、企業家が教祖を探すいきさつを、相当確実な資料に基づいて描出している。これらの企業家の背後にどんな勢力があるかは不明だが、国際色をもつたもの、また戦前取締る側で知識を集めた人物が、そのウンチクを傾けて企業家に乗り出した例などもある。紅卍会、台湾の道院などと連るものもあるし、内紛に占領国人が出動した例もあると聞いている。

二、国際的な色彩。これは既述の諸カ所にもあきらかであるが、その他、戦後とくにP・L（パーフェクト・リバイター）とか、メシアとかいう言葉をつかい、また大神をG・G（グランド・ゴッド）の符号で表したりする例は甚だ多い。事業にしても、国際美術館、外人向ホテルの経営、密貿易（の疑い）などにもこの傾向はあらわれている。内外神の混淆も、かつてのような民族的優越感によるものではなく、かえつて、国際的な力にたつたなるものと、自らの権威とを融合せしめることによる権威づけに傾いていることが目立つ。

これらの教団は、多くは中心に一名の本気で信じ込んだ修業者（ふつう分裂型人格が多いといわれる）をかこみ、まわりに、ヒステリー性夢想家の側近グループ、そ

してしばしば正常現実的な企業家をもっており、その教義にしたがって各層の正常な善男善女を集めている。新興宗教教団の数は四百に前後するといわれるが、それだけ、「信者」の数が、激増したとは断じ難い。教団の登録によって表面化したにすぎないものも多いに違いない。

広告宣伝と心理学

朝 倉 利 景

広告の心理学的機能には（一）注意を獲得する（二）興味をもたせる（三）商品について理解させる（四）商品及び商社に就いて記憶にとどめさせる（五）欲望に訴えて行動を触発させる。の五つがある。さらに広告効果の要素となるのが大別して次の三つである。（一）広告を構成する機能的要素——例えば活字の型、挿絵、色彩、枠、商標等並びにその大きさ配置（二）広告メッセージ——例えば文章の型、文章の内容、訴求の指向点等（三）広告の掲載法——例えば広告の大きさ、掲載の位置、反復の回数と間隔等。

これらの要素の夫々が一つ或はそれ以上の機能を果すのである。即ち広告の効果は諸要素を経とし、諸機能を緯として織り出されるものである。従つて要素の選択、配置を誤まると機能を分散させ或は相殺させる結果を導くことがある。そこで広告には効果の重点即ち山がなければならぬ。その山の持つて行き所によって広告の種類が三つに分かたれる。（一）感性的広告——注意効果、記憶効果を主とし、構成要素を大きく、数少くして商品名を目立たせる（二）感情的広告——興味効果、訴求効果を主とし、構成要素は挿絵、色刷に重点をおき、配置に妙をうる。（三）理性的広告——訴求効果、理解効果を主とし、構成要素は詳細な説明文を附し、写真、図による解説を加える。

では最後に効果的な広告を実施するにはどういう手続きをふむべきであるか。

（一）消費者を知ること——商品並びに商社の知名度、消費者層、購買動機、使用習慣、消費者の嗜好等に関して実態調査（主として標本調査）を行う。（二）消費者に広告を見せるように計画すること——広告媒体の性格、特徴、発行部数に関する資料を研究し、効果的な掲載法を心理学的実験によって究め、掲載すべき広告に就いて注意効果テストを行う。（三）買わせるための広告を作る——既存資料、実態調査、実験研究等による知識を基として広告目的に適った広告の種類を決定の上、重点的な広告レイアウトを構成し、記憶、興味、理解、訴求の諸効果に就き広告テストを行う。（四）以上の諸資料を総合して広告予算に合せて計画を具体化すること。（五）広告を掲載すること。（六）広告効果を評定すること——掲載された広告がどの程度読まれたか、或は憶えられているかに関して読者調査（主として標本調査）を行うとか、または返送クーポン、照会及び注文によって広告を評定する。更にまた計画的に予め諸条件を統一した上で販売量の変化を見て広告効果を評定する。

販売計画と市場調査

飯 井 寅 太 郎

サンプリングによらない市場調査は価値のないものであると考えられているが、こうしたガツチャリした調査方法のとれるのは極く一部に過ぎない。

この不安は一般消費者調査よりも小売店調査に、小売店調査よりも卸売業者の調査にといった風に調査事項が調査対象者にとって利害関係の複雑になつてくるに従つて甚だしく、同一店舗についての面接調査でも電通の行った結果とメーカー側から人を出して行った調査とは全

く異った数字を齎した場合すら少くない。こうした点になると調査に心理学的考慮と税務・営業関係の知識とを充分織込んでゆかねば到底実際の価値のある市場調査は行い得ない。

私企業においては販売計画といつても二つにわけられ、一つは販売すべき品目、数量金額を示す販売予算、他の一つは決定した販売予算を達成すべき販売方法の計画である。

市場調査の結果は無論この双方の計画に利用されるが、サンプリングを含む体系立った市場調査は多く「販売予算」の樹立にあたっての基礎資料として用いられる。

「販売方法」についての市場調査は、広告に関する大衆の嗜好、広告効果等の調査を除いては販売員、配給業者等のきき込みや体験を根拠とした余り科学的な基礎付のない方法によっているのが現状であるが、これは我国のみではなく米国においても各業界のヴェテランの意見をインフォームド・オピニオンといつて重要視すべきことが説かれている。

さて販売予算をたてるためには自社主要製品について①末端消化状況、②配給機関における在庫量、③競争品の売行状況、価格、訴求点等を少くとも把握しなければならぬがこれには普通パネル調査が利用される。

この調査結果と自社の生産能力、資金繰、自社品の訴求点、価格、自社の販売網、販売員の能力、地盤等を併せ考えて品目、数量を決定する。

新規発売品についてはこうしたパネル調査は使えないからもつと基礎的に

①人口、購買力、購買習慣、②同種または同一目的に使用される商品の売行状況、③業界及び使用者の代表と思われ人の意見等を調査しこれと前述の自社内部事情とを勘案して短期

予算を作る。

これを毎月はどう販売してゆくかという月次予算となると更に

①過去の販売季節変動、②配給機関における在庫の推移、③回収期における市場情勢

等を調査し、これと自社の生産、在庫、資金事情等を考慮して各月予定を立てる。

品目、数量がきまるとこれを実際販売、消化してゆくための方法を決定することとなるが、次には

①広告②接触宣伝③大口需要先④価格政策⑤特売等の具体的販売政策を決定してゆく。

日本上代建築について

浅野清

法隆寺の建築は重々しく、静かに落付いている。太い、胴張のある、ずんぐりした柱、長く差出される真直な種、これらを受けて支える雲形斗拱の強く、しつこくまがりくねった線、鋭い尖端を作つて聳える大屋根等、固く強く、鋭い表情である。

これに対し、薬師寺三重塔は、変化に富んだ、ふくらみを持った、軽快な装いを見せる。三重塔の各層毎に裳階をつけ、裳階は腰紐で支え出され、その上に細い角柱を立て、華奢な木組を用いているので、主体の木組ががちり堂々と組まれているのに拘らず、外観の装いを優美にし、深い軒出と相俟つて、建物に浮遊感をすら与えている。屋根にあげられた九輪上の水煙の如きも、飛天の舞い下る様を写してよにも軽快に作り出されている。

軒も一本の真直な種の代りに、丸い地樋を角の飛えん種と二重にされ、軽い反りまで附して、軒先に反転感を与える。又斗拱の上には小天井を張つて軒下の深く三角に入込む部分の暗い陰影をさけている。

唐招提寺の金堂はこの後の例に属する本格的な金堂建

築の唯一の遺構であるが、これを法隆寺金堂と比較することが出来る。法隆寺のは重層、これは単層、前者は入母屋、これは四注の屋根になるが、それらの相違に拘らず、両者の示す精神ははっきり區別し得られる。

法隆寺金堂の短大で胴張のある柱は隅の間のみこれをひどく狭く取るように配され、高く聳える屋根を戴いて厳しく冷たい構えを見せるのであるが、唐招提寺の柱は胴張を見せず、不要な緊張を除き去り、柱間は中央三間は広く、次の間から隅の間へは漸次縮少され、その間に有機的な、自然な変化をつけ、一隅に集る屋根の荷重にじさせている。斗拱は法隆寺のものより複雑な組合せになるのであるが、軒と共にふくらみを持つ穏やかな線の取合せ、小天井、支輪による軒下入隅の遮蔽によって、全体に温かな感を得ている。屋根は後世改造を受けて、ひどく高められているが、元はずっと緩やかな、東大寺三月堂に見るような勾配であったのであるから、今見る屋根のおゝいかぶさる重さはぬけて、一層の洗練を加えていたであろう。

八世紀の我が国の建築は七世紀のものに対し、このように対象的な性格を持つに至ったのであるが、日本建築のその後の伝統は、この八世紀に辿りついたものを母胎として発展して行く運命を持った。そして構造原理としては、その後中世に至って新しく中国の刺戟を受ける迄、一貫して変る所はなかった。然し徐々にはあったが、一つの傾向を持つに至った。それは、穏やかさを只管にまして行く方向であった。先ず軒の勾配が次第に緩くなつて行つた。然しこれには構造的な限度がある。それを克服するために考え出されたのは、二重屋根の構造であった。これは正に日本特有の発見であった。軒の深く垂れ下ることは、内部をうつ陶しくする。特に座居生活に終止した日本人に取つて建ちの高い建物は落付かないのであるから、この低い建物では、垂下る軒は事更目ざわりとなり気ふさぎとなった。二重屋根は、この思い

きり緩くし、その上に別に屋根をのせて、これによって雨水を取る方法であった。従って軒は無限に緩められ、(やがて殆ど水平に迄達した) 屋根は必要に応じて高められた。このことは又建ちをいやが上にも低くすることを可能にし、こゝに独特な平安朝風が成立した。そしてこの穏やかさは、更に他の細部の表情にも及び、建具の如き外袋によつてはあの優美な時には繊細な建築を完成する。これが我が上代建築の動きであった。

日本の彫刻

小林剛

奈良には、すぐれた彫刻がたぐさんある。まず法隆寺の百済観音像はわが国の仏像彫刻としてもっとも古いもので、この像の異様にも長身瘦躯な姿や、一種夢のような神秘的な表現などに、中国の古い漢や六朝におこなわれた備(土偶)にきわめて似通ったものが認められる。次に法隆寺金堂の釈迦三尊像は名匠止利仏師の作で、その頃の中国の北部に一時覇をとらえた北魏の様式を、朝鮮の高麗あたりを経て、学び伝えた、きわめて概念化された形をもつたものである。

次に、中宮寺の弥勒菩薩像は中国の中部に栄えた北齊或いは北周などの系統を追い、その概形はかなり人体の自然形態に近いものになっている。

以上の三つが、わが国の美術がはじめて造られるようになったと云われる飛鳥時代のもっとも代表的なものである。これにつづいて白鳳時代のもっとも典型的なものを上げてみると、薬師寺金堂の薬師三尊像はわが国の官営による造仏としてもっとも早い頃のもので、その頃中国を統一した唐を学び、写実を基として一種の理想型にまとめ上げてあり、その表現は、若々しい力に満ち、まったく張り切ったような力強さを感じる。

次の奈良時代になると、平城京の周辺に建てられた東

大寺、興福寺、西大寺、大安寺、唐招提寺等に、それぞれみなその創建当時の彫刻を幾つか伝えている。

東大寺三月堂の本尊の不空羅索観音様、脇侍の日光日光菩薩像、秘仏の執金剛神像はやはり唐の様式を学んだものであるが、そこにはまたわが国で発展したところもかなり見受けられ、後に大仏を造った有名な国中連公麻呂の指揮で天平年間に出来たものである。

また唐招提寺金堂の盧舎那仏像を中尊とする一具像は、唐僧鑑真の監督下で造られたもので、奈良のものとしてはもっとも唐に近く、やや粗奔なところもあるが、一種の大陸的な力強さをもっている。

奈良の彫刻には、この他になお、平安初期のものも、藤原時のもも、鎌倉時代のもも、更にそれ以後のものも、それぞれにかなり見るべきものがあり、殊に鎌倉のものには巨匠運慶の名作などがある。

日本の庭園

森 蘊

京都、奈良地方には全国の名園の九割に近いものが集中されている。西芳寺、天竜寺、金銀閣をはじめ、竜安寺、大仙院など五、六百年もの昔に足利將軍や禅僧の手になったものから、桂離宮や修学院離宮のような三百年程昔に八条宮智仁、智忠両親王、後水尾上皇の手によって営まれたものなど、社会的、経済的背景の異った様々の、しかも優れたものが沢山残っている。

京都の名園を見てもみると、山や川や海など自然風景を題材として、それを表わすのに、座石を用いているのを見受けるが、これは依頼者と作者が日本人であり、その鑑賞者が日本の自然風景のあり方を理解しているからである。従つて予備知識のない西洋人相手の場合にはちと理解が困難であろう。即ち古庭園にはこのような一種の「約束」みたいなものがあつた。石や木や苔など自然

物は勿論のこと、橋、燈籠、蹲踞、手水鉢、生垣といった如工された材料も又すべて約束を果す為の符ちようのような役割をしている。そこでこの符牒のよみ方を会得しておかないと庭園は理解しにくいし、うまく「約束」を呑込んでしまえば、一入興味を湧いて来る。あの有名な大仙院の庭園は、滝や橋や堰や舟が自然石から出来ており、誰でもが瀑流であると理解出来る。それは遠望した瀑流の風景で日本画の水墨に該当するものである。

又西芳寺の山腹の石組は遠望的景觀ではなく、ごつごつした山路に分け入った経験を物語っているようである。それは思い切つて接近した断片をとり、本質的でないものを取去つてしまった結果大きな山岳を象徴しているものである。ここまでは誰でも入り易いが、白い砂に石を立て並べた竜安寺や妙心寺靈雲院などはむつかしく妙心寺東海庵や妙蓮寺玉竜院などとなると一層困惑されるであろう。見る人は昔の作者の酔興に笑いを禁じ得ないかも知れない。竜安寺や靈雲院庭園などは、その題材にとらわれずに、その石の並び方と、緊張した空間的の釣合に目を見はつて下さればよい。東海庵の七個の石は水面をぐるぐる泳ぎまわるような動きを見せており、妙蓮寺、玉竜院では、頭をかかえ背を曲げ、寝そべり乍ら遊行している十六羅漢の姿を思い浮べて大声で哄笑したくなる。こういうことが庭園理解の第一歩である。この様に日本庭園には、鑑賞に際して、或る程度の予備知識を必要とするだから、昔から秘伝書のようなものを残し伝えたのは当然のことであろう。

日本庭園の意匠は大体石組を中心として、平安時代の昔から連続して伝わつたのであるが、例えば滝という題材と取組んで昔の庭作りの名人達が努力したのである。その題材は単に手がかりにすぎず、彼等の苦心する所は滝水の落ち方であり、その石組が極めて自然に近い姿乍ら、全体が落着のよい不等辺三角形におさまり、そのふところの深さがどの程度巧妙に現わされるかという

点が腕の見せ所だった。

文化の観光

黒田源次

観光と文化とはちがったことばのように思われるが、観光という文字の出典は古く、観光国ということばから来ている。従って此の中には国の文化をみるという意味が既に含まれておる。然し現在観光といえば文化を対象とするばかりでなく、自然の風致もはいつている。即ち観光には文化の観光と風致の観光の二つがある。勿論それを併せ持っていれば観光価値は一層大であるに相違ないが、わが奈良の如きは最も尤なものである。奈良が日本における観光都市として特異な位置をもつのは此の為である。

それできしあたり奈良市について具体的に考えてみると思う。現在の奈良の街は天平時代の平城京のおもかげを伝えたもののように考えられているが、事實はそうではなく、足利から徳川初期にかけて形づくられた興福寺の門前町が主体である。無論、近郊の諸部落が併合されており、そういう門前町が出来したのは平安中期頃からであろうが、簡易にいえば足利以降のものとしてさしつかえない。とにかく寺院経済に根拠を有つ門前町の発達したものとして極めて貴重な存在であるといえる。況んやその中に含まるる無比且つ無数の古代文化財と自然的風致とを併せて比類なき観光資源を形成するのである。然らばこれを如何に保存し、如何に現在の新しい観光価値でうらづけていくかは古文化財は自然風致と同様に新しい問題として研究に価するのである。

ただ古い都市を保護するにはどうしても一定の範囲を決めることが必要で、観光都市としての古い奈良の街はなるべくその儘に保存してそれによつては人をひきつけるだけの魅力を有たねばならぬ。これがヨーロッパの

古い観光都市の通則である。従つて奈良の場合においてもこれだけを *Alte Stadt* として保存又は復旧するかが第一の研究問題である。但し古いところを残すにしても衛生的見地から、風致を害さないような形において改善することは勿論必要である。如何に観光価値があつても、衛生的に不完全であれば、結局ゼロとなることは珍らしくない。

第二には *Alte Stadt* を保存する上においても、*Neue Stadt* をどのように建設していくかということが観光都市として課せられた共通の問題である。奈良市の性格からいえば、近くに京都、大阪があり、同時に優れた自然環境に恵まれた土地であるから、まずこれを利用して新しい文化都市としての在り方についての見当をつけることが肝要である。即ち学校、図書館、研究所、博物館など豊富な文化施設を有する都市としての新しい性格をもたせ、発展させていくことが最も望ましいことであると思う。ところで従来日本ではそのような計画性をもつた都市建設を研究したものが甚だ少い。都市の郊外に近いところは謂わゆる場末で最もきたない塵埃捨場である。此の点ヨーロッパの近代都市とは凡そ対蹠的である。

冷房内における寒冷および乾燥が触読の速度と精確度におよぼす影響の研究

日本大学 ○渡 辺 徹
同 松井新二郎

失明者の間に、「寒冷および乾燥が高度であると、触読が困難になる。もっとも好適な触読の心身状況は入浴後。」といわれている。

この伝承がどれだけ事実かを冷房内触読の速度、精確度において確かめようというのがこの実験である。

第一回実験。日時、昭二七年九月八日—同九日、前九時三〇—後一二時二二。場所、目黒恵比寿日本ビル会社冷房外休憩室(温二四—二五度C、湿八六—九二%)と房内酸造室回廊(温四—六度C、湿八四—一〇〇%)。被験者、東盲高等部二、三年先天金盲男女同数計一二名。実験者、日大心理学生六名(男四、女二)。問題、点字無意味一〇〇音節二組と有意味小学三年程度一〇〇文節(国語四、社会三、算数二、理科二)組。方法、各被験者に無意味問題、有意味問題を朗読させて、用意の墨字採点用紙に、一実験者は問題別に全所要時間(速度)を記録し、他実験者は三〇秒ごとの読果を鉛筆で区切り、音節・文節の誤を書き添え、脱を円で囲み、後、誤脱を総計して、精確度の変化を明にした。第二回実験。同年一〇月二五日(後一・二〇—二・二〇)、同二八日前一・三〇—後三・〇〇)。杉並馬橋中央気象台低温実験室、房外温二—一七度、湿不明、房内温六—三度、湿七六%。被験者、東盲専攻科高等部全盲男女同数計八名。実験者、被験一に二の割。問題、無意味二種、有意味困難(速度)一分四〇秒—一分四八秒八種。方法、前回と略同実施。結果。速度は

| 第1回 | 無意味 | 有意味 |
|-------|-------------|-------------|
| 房外 | 56"±4".07 | 1/41"±7".17 |
| 房内 | 59"±4".48 | 1/48"±11.9 |
| (第1回) | (外 1種12名) | (外1種12名) |
| | (内 1種12名平均) | (内5種12名平均) |
| 第2回 | 無意味 | 有意味 |
| (25日) | (1種4名) | (1種4名) |
| 房外 | 53"±4".97 | 1/56"±28".3 |
| 房内 | (1種4名) | (5種4名) |
| (28日) | 1/15±20".1 | 2/39"±57".2 |
| 房外 | (1種3名) | (2種3名) |
| 房内 | 52"±6".02 | 1/38"±9".15 |
| | (1種3名) | (5種3名) |
| 房外 | 1/51"±33".6 | 2/46"±31".5 |
| 房内 | | |

以上第一表、概して房内は房外より速度が遅い。これ

きり緩くし、その上これ判て屋長をのけて、これによつて、大寺、興富寺、西大寺、大友寺、尊召屋宇等こ、こしこ、勿よ刀論のこ、橋、登籠、歌謡、手水本、三三三。

は寒冷乃至乾燥の影響か。第一回により困難度をそろえた第二回はこの関係が顕著である。同間、(二五日)外 156"±38".3 内 3'.22"±88".2 (二八日)外 135"±12".5 内 250"±70".3で、練習効果に寒冷の影響が見える。精確度は恵比寿・馬橋の各間の音節・文節の誤・脱総数を計上して見た。

(第二表)

| 馬 | 橋 | | 恵 | | 比 | | 寿 | | (誤・脱) | (内) | I | II | III | IV | V | VI |
|---|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|---|----|-----|----|---|----|
| | 有意味 | 無意味 | 有意味 | 無意味 | 有意味 | 無意味 | 有意味 | 無意味 | | | | | | | | |
| | 音節 | 音節 | 音節 | 音節 | 音節 | 音節 | 音節 | 音節 | | | | | | | | |
| | 文節 | 文節 | 文節 | 文節 | 文節 | 文節 | 文節 | 文節 | | | | | | | | |
| | 6 | 24 | 9 | 33 | 28 | 17 | 15 | 18 | | | | | | | | |
| | 17 | 10 | 15 | 18 | 13 | 17 | 20 | 16 | | | | | | | | |
| | 25 | 8 | 20 | 14 | 7 | 22 | | | | | | | | | | |
| | 5 | 20 | 19 | 14 | 24 | 10 | | | | | | | | | | |
| | 69 | | 57 | | | | | | | | | | | | | |

第二表を見れば、房外より房内は概して誤脱が多く、精確を欠いていることがわかる。なお馬橋では寒冷のため触読不能の一女性が出た。

